

青森市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

横内遺跡・横内（2）遺跡

発掘調査報告書

平成6年度

青 森 市 教 育 委 員 会

序

本報告書は、平成5年度、市道合子沢6号線道路改良事業の実施に先立ち、当該路線内に所在する横内遺跡と横内(2)遺跡の発掘調査を実施し、その成果をまとめたものです。

今回の調査によって横内遺跡は縄文時代前期の集落跡であることが確認されました。また、横内(2)遺跡は縄文時代前期後半から中期前半にかけての貯蔵穴と推察される遺構が検出されるなど、両遺跡から当時の生活を知る上で貴重な資料を数多く得ることができました。

これらの調査の成果が、今後、埋蔵文化財の保護・活用に、さらには本市の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、ここに本書を刊行できましたことは、関係各機関・諸氏のご指導、地元町会のご協力の賜ものによるものと深く感謝の意を表する次第であります。

平成7年3月

青森市教育委員会

教育長 池 田 敬

例 言

1. 本報告書は、平成5年度に実施した青森市市道合子沢6号線道路改良事業に係る横内遺跡・横内(2)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡番号は、横内遺跡01164、横内(2)遺跡01206 である。
3. 各遺構の規模については、壁長(または長軸・短軸)、壁高では確認面から、ピット・壁溝では床面からの測定値を記した。主軸方位は、歴史時代の住居跡ではカマドの長軸を基準線とした。
4. 遺構番号は、各遺跡ごとに時代別ではなく通し番号を用いており、横内(2)遺跡の第5・18・21・26号土壌が欠番である。
5. 本書の編集・執筆は徳差義男が行った。なお、石器の石質鑑定及び地形・地質については、青森県立弘前高等学校教諭工藤一彌氏にご教示を賜った。
6. 遺構・遺物の文、図中での表現は原則として次の基準・様式に依った。
 - (1) 土層の注記については「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄1992)に準拠した。
 - (2) 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構の平面図の使用方位は磁北を示した。
7. 引用参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献については、著者名と西暦年で示した。
8. 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在青森市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の諸氏、諸機関からご教示、ご指導、ご協力を賜った。
(敬称略・順不同)
青森県教育庁文化課、八戸市立博物館、仙台市教育委員会、仙台市博物館、七ヶ浜町歴史資料館、古川金丸、宇部別保、上野茂樹、小笠原善範、小保内裕之、川村正、工藤竹久、佐藤好一、白鳥文雄、田中則和、原河英二、藤田亮一、三宅徹也、村木淳、村越潔、合子沢町会長、新町野町会長

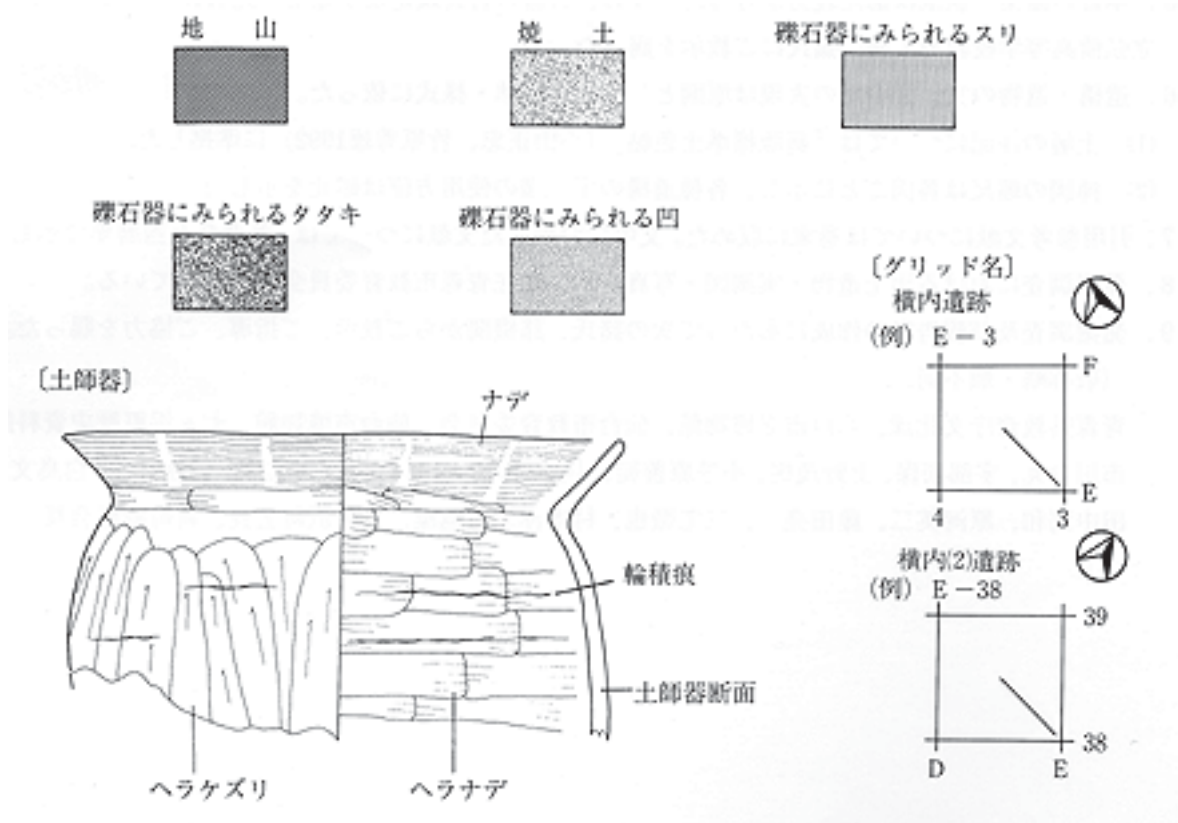
凡 例

本報告書内で使用する略称・表現方法・スクリーン等は以下のとおりである。

[略称]・「第 号住居跡」 「 住・ H」 「第 号土壇」 「 土」

・「第 号溝状遺構」 「 溝」

・遺構内のピット番号と深さ「第1号ピット深さ30cm」 「Pit1(-30)」



両遺跡の縄文時代の土器については便宜上次のように分類した。

[土器の分類基準について]

- 群 縄文時代早期の土器
- 群 縄文時代前期中頃の土器
- 群 縄文時代前期後半の土器
- 群 縄文時代中期の土器

目 次

序

例言（凡例）

目 次

第 章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過 1

第2節 調査要項 2

第3節 調査の方法 3

第 章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と周辺の地形 5

第2節 調査区域内の基本層序 5

第3節 周辺の遺跡 6

第 章 横内遺跡

第1節 検出遺構 8

第2節 出土遺物 16

第3節 小結 20

第 章 横内（2）遺跡

第1節 検出遺構 22

第2節 出土遺物 41

第3節 小結 52

まとめ 54

写真図版

報告書抄録

第 章 調査に至る経過と調査要項

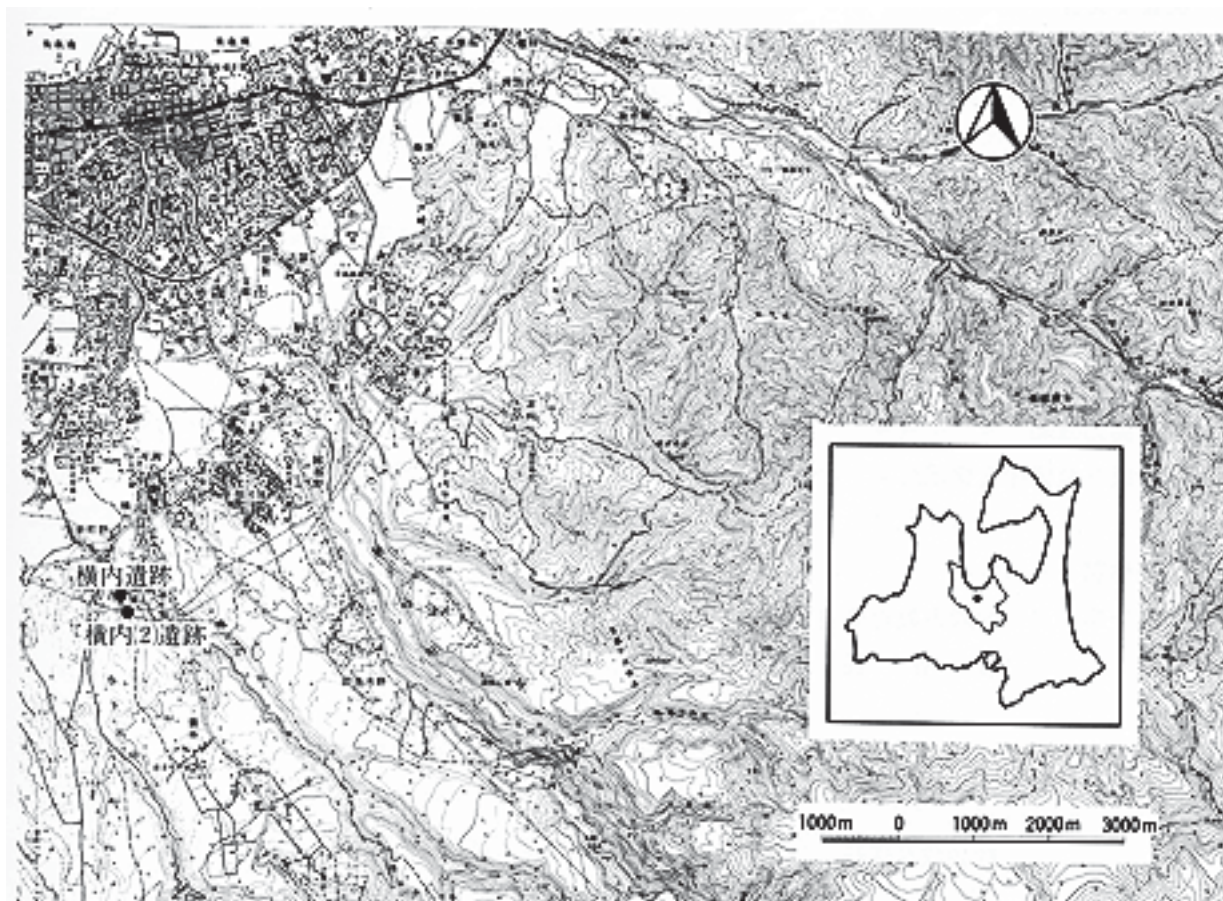
第1節 調査に至る経過

青森市企画財政部は、青森公立大学へのアクセス道路として市道合子沢6号線道路改良事業の計画を決定した。

それに伴い、青森市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の所在の確認がなされた。これを受けて確認したところ、道路改良予定地内に周知の遺跡である横内遺跡が所在し、また周辺の分布調査により横内(2)遺跡の所在も明らかになった。そこで、遺跡の所在についてとともに、計画を変更し埋蔵文化財の現状保存が図られるよう要望し、もし変更困難な場合には記録保存のため、事前の発掘調査が必要である旨を回答した。

その後、企画財政部、港湾河川課、公立大学と教育委員会の4者で取り扱いについての協議を行ったが、結局、計画変更は難しいとの結論に至り、発掘調査による記録保存が図られることとなった。そして、企画財政部より、平成5年8月20日付青市企第92号「青森市市道合子沢6号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について(依頼)」において、教育委員会に発掘調査の依頼が行われ、これを受け当委員会で検討の結果、文化財保護と開発事業の円滑な調整を図るために受諾することとし、平成5年8月24日付青市教委社第282号において企画財政部に回答を行った。

その後、企画財政部との協議の結果、現地での調査期間を平成5年9月7日から同年11月12日までとし、調査を実施するに至った。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査要項

1. 調査目的

平成5年度青森市市道合子沢6号線道路改良事業に先立ち、当該路線内に所在する横内・横内(2)遺跡の発掘調査を実施し、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

横内遺跡(よこうち)

青森市大字合子沢字山崎25

横内(2)遺跡

青森市大字合子沢字山崎75ほか

3. 発掘調査期間

平成5年9月7日～同年11月12日

4. 調査対象面積

1,280 m² [横内遺跡 180 m²、横内(2)遺跡 1,100 m²]

5. 調査委託者

青森市企画財政部

6. 調査受託者

青森市教育委員会

7. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課

8. 調査協力機関

青森県教育庁文化課

9. 調査体制

調査事務局 青森市教育委員会

教 育 長 花 田 陽 悟 (現 青森市助役)

” 池 田 敬

生涯学習部長 (現 青森市建設部長)

” 矢 野 順 平

社会教育課長 寺 澤 松三郎 (現 青森市教育史編さん委員)

”

| | | | |
|------------|------|------|-----|
| 課長補佐 | 遠藤正夫 | | |
| 主幹兼埋蔵文化財係長 | 塩谷光男 | | |
| 主査 | 武田均 | | |
| 指導主事 | 長沼圭一 | 得差義男 | 小林淳 |
| 主事 | 田澤淳逸 | 上野隆博 | |

第3節 調査の方法

グリッドの設定は、横内遺跡においては、工事用幅杭 LNo15 と L28 を結ぶ直線を調査区長軸方向の基準線（3ライン）とし、これに直交する線を短軸方向の基準線（Fライン）として、調査区域全体に 4m × 4m のグリッドを組んだ。グリッド杭の表示は、LNo15 を基点として北へ G、H、
、 J、南へ E、D、C、B の順にアルファベットを付し、また、西へ 4、5、6 の順に算用数字を付した。各グリッドの呼

称は、アルファベットと算用数字を組み合わせて示した（凡例）。具体的にはそのグリッドの南東隅のグリッド杭の表示によるものとした。なお、南北方向の基準線は、磁北より東偏 17° である。

横内(2)遺跡においては、工事用幅杭 RNo31 と RNo32 を結ぶ直線を調査区長軸方向の基準線（Cライン）とし、RNo31 でこれに直交する線を短軸方向の基準線（33ライン）として、調査区域全体に 4m × 4m のグリッドを組んだ。グリッド杭の表示は、RNo32 を基点として北へ 34、35、36...、南へ 32、31、30...、の順に算用数字を付し、また、西へ B、A の順に東へ D、E、F、G の順にアルファベットを付した。各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせて示した（凡例）。具体的にはそのグリッドの南東隅のグリッド杭の表示によるものとした。なお、南北方向の基準線は、磁北より西偏 32° である。

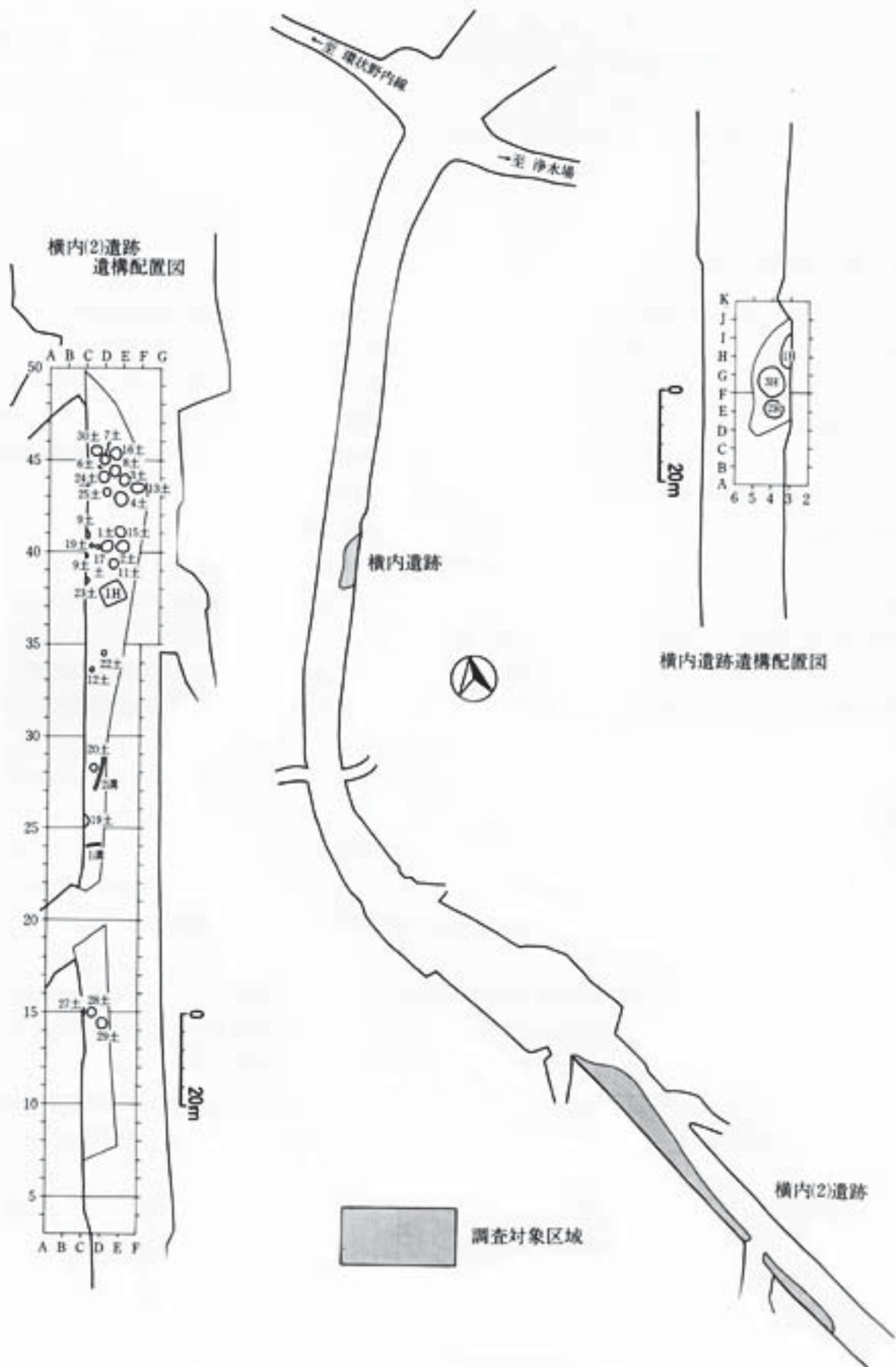
また、測量原点（B.M.）は、工事用に設置した No15 の B.M.（標高 25.714m）を基準とし、ここから原点移動を行い標高 26.950m の原点を設置した。これをもとに、高低差およそ 20m の横内(2)遺跡でも対処できるようにさらに数箇所を設定した。

工事路線内における調査対象範囲は、過去の横内遺跡の報告があるため全面調査を原則として実施した。

粗掘りは、土層の堆積状況を観察するために適宜セクション用ベルトを設定して、グリッド単位で掘り進めた。

遺物の取りあげは、遺構内・遺構外出土遺物とも各層ごとに一括し、適宜ポイント上げを実施した。遺構の精査は、原則として竪穴式住居跡は四分法で、土壌は二分法で実施した。実測は、簡易遣り方測量で行い、縮尺は 20 分の 1 を原則とし、微細図に関しては 10 分の 1 を採用した。

写真撮影にあたっては、35mm のモノクローム、カラーリバーサル各フィルムを供用して作業の進展に伴い、必要に応じて行った。



第2図 調査範囲とグリッド・遺構配置図

第 章 遺跡の概要

第 1 節 遺跡の位置と周辺の地形

地形的にみると青森市は、北側に陸奥湾に面した青森平野があり、西側に大釈迦丘陵、南～東側は八甲田山に連なる火山性の台地に囲まれている。青森平野は市西部を南北に走る「入内断層」の活動によって形成されていったもので、断層の東側が北側に落ち込み、沈降してできた低地を砂礫が埋めていった。

遺跡は、南側の火山性台地の先端部と青森平野との接点に位置している。この台地は約40万年前、八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物(田代平溶結凝灰岩)からなる台地でゆるやかな勾配で北西側に傾斜している。八甲田火砕流堆積物は横内～駒込付近で平野の中に没している。

本遺跡は、市街地より南に6km 国道103号バイパスと青森環状野内線の交差点の南方0.7kmで西側に流れる合子沢川と東側にある小谷に挟まれた舌状に突き出た台地の先端部に所在している。遺跡は、八甲田火砕流堆積物を基盤とし、その上に褐色火山灰が重なるが、葉理をもつ石英砂層を含むことから、南からの再堆積による部分もある。

遺跡付近一帯は、水田に囲まれ、小高くなった平地部分が住宅地と果樹園、さらに南側に山林が続き一部畑地として使用されている。標高は、横内遺跡で26m、横内(2)遺跡で35～44mである。

第 2 節 調査区域内の基本層序

横内遺跡は地山まで30～40cmの褐色土の堆積がみられ、横内(2)遺跡では、林部分で地山まで30～40cmの褐色土の堆積がみられ、以前畑地であった部分では20cmの耕作土がみられる。調査区域内の基本層序は次のとおりである。また、火山灰の堆積はみられない。

横内遺跡

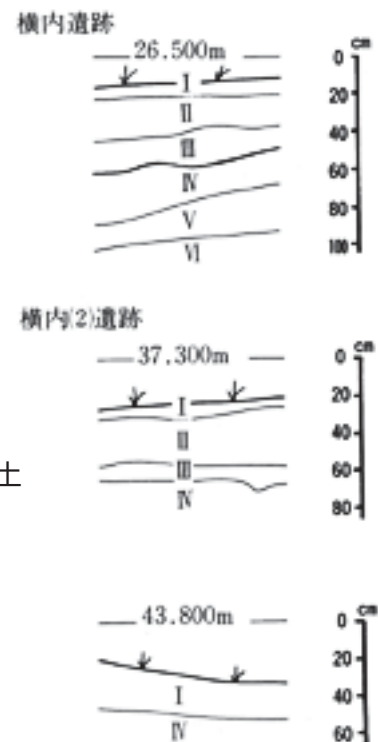
| | | | |
|-----|---------|---------|------|
| 第 層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | 表土 |
| 第 層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | |
| 第 層 | 褐色土 | 10YR4/4 | |
| 第 層 | にぶい黄橙色土 | 10YR6/4 | ローム層 |
| 第 層 | にぶい黄褐色土 | 10YR5/6 | 砂層 |
| 第 層 | 明黄褐色土 | 10YR7/8 | ローム層 |

横内(2)遺跡

| | | | |
|-----|---------|---------|------|
| 第 層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 表土 |
| 第 層 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | |
| 第 層 | にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | |
| 第 層 | 明黄褐色土 | 10YR6/6 | ローム層 |

7～20ライン

| | | | |
|-----|-------|---------|------|
| 第 層 | 褐色土 | 10YR4/4 | 耕作土 |
| 第 層 | 明黄褐色土 | 10YR6/6 | ローム層 |



第 3 図 基本層序

第3節 周辺の遺跡

平成5年度現在、青森市内には228箇所の遺跡が周知されている。本遺跡を含む青森市の南側の遺跡分布状況を見ると、東から西に向かい蛭沢遺跡～横内遺跡～朝日山遺跡～近野遺跡・三内丸山遺跡が所在している。これらの遺跡は、青森環状野内線を境として八甲田山の火山性の台地や大釈迦丘陵の裾野が青森平野に接する低丘陵部分に多くみられる。横内地区は、近年の分布調査等によって遺跡数の増えてきた地区である。

横内遺跡は、昭和41年にリンゴ園の土砂採取の際土器等が多数発見され、「青森史跡研究会」諸氏によって整理がおこなわれ、昭和44年遮光器2号(三宅・石岡1969)によって報告されている。これらの土器は、縄文時代前期円筒下層b式土器を主体にしている。多量の土器・石器の出土から集落が存在していたことが推測される。

本遺跡周辺で同時期の遺跡は、合子沢川の西側に新町野遺跡、小谷を挟んだ横内浄水場の南側に桜峯(1)遺跡・桜峯(2)遺跡・鏡山遺跡が所在している。なお、平成6年度に発掘調査が実施された桜峯(2)遺跡では、前期の遺物が少なく遺構も検出されなかった。

第1表 周辺の遺跡

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時代 | 備考 | 遺跡番号 |
|----|--------|--------------------|-----|--------------|----------------------------|------|
| 1 | 新町野 | 新町野字菅谷 | 散布地 | 縄文(前・中・後)、平安 | | 161 |
| 2 | 野木 | 野木字山口・野尻 合子沢字松森 | 散布地 | 縄文、平安 | | 210 |
| 3 | 桜峯(1) | 横内字桜峯 | 散布地 | 縄文(前・中・後) | | 207 |
| 4 | 桜峯(2) | 横内字桜峯・亀井 | 包蔵地 | 租文(前・中・後) | 桜峯(2)遺跡発掘調査報告書 | 208 |
| 5 | 鏡山 | 横内字鏡山 | 散布地 | 縄文(前・中・後) | | 209 |
| 6 | 横内城跡 | 横内字亀井 | 城館 | 中世 | 横内城跡発掘調査報告書 | 174 |
| 7 | 野尻館 | 野尻字野田 | 城館 | 中世 | | 173 |
| 8 | 四ッ石 | 四ッ石字里見 | 包蔵地 | 縄文(後) | 四ッ石遺跡調査概報青森市 四ッ石遺跡調査報告書 | 28 |
| 9 | 四ッ石(2) | 四ッ石字里見 | 散布地 | 縄文(中・後) | | 194 |
| 10 | 四ッ石(3) | 四ッ石字里見 | 散布地 | 縄文 | | 215 |
| 11 | 田茂木野 | 田茂木野字阿部野 | 包蔵地 | 縄文(前・中・後・晩) | 田茂木野遺跡発掘調査報告書 | 160 |
| 12 | 阿部野 | 幸畑字阿部野 | 集落跡 | 縄文、平安 | | 50 |
| 13 | 阿部野(2) | 幸畑字阿部野 | 散布地 | 平安 | | 219 |
| 14 | 阿部野(3) | 幸畑字阿部野 | 散布地 | 平安 | | 220 |

(第4図の番号と同一)



第4図 周辺の遺跡

第 章 横内遺跡

横内遺跡で検出した遺構は、縄文時代の前期中頃の竪穴式住居跡1軒と前期後半の竪穴式住居跡2軒である。

出土した遺物は、ダンボール箱にして4箱で、内訳は縄文時代の土器2箱と石器等2箱である。

今回の調査で出土した縄文時代の土器では、前期中頃と後半の土器が多く見られ、早期前半の土器、中期後半の土器が少量見られる。

第1節 検出遺構

1 竪穴式住居跡

第1号住居跡（第5・6・7図）

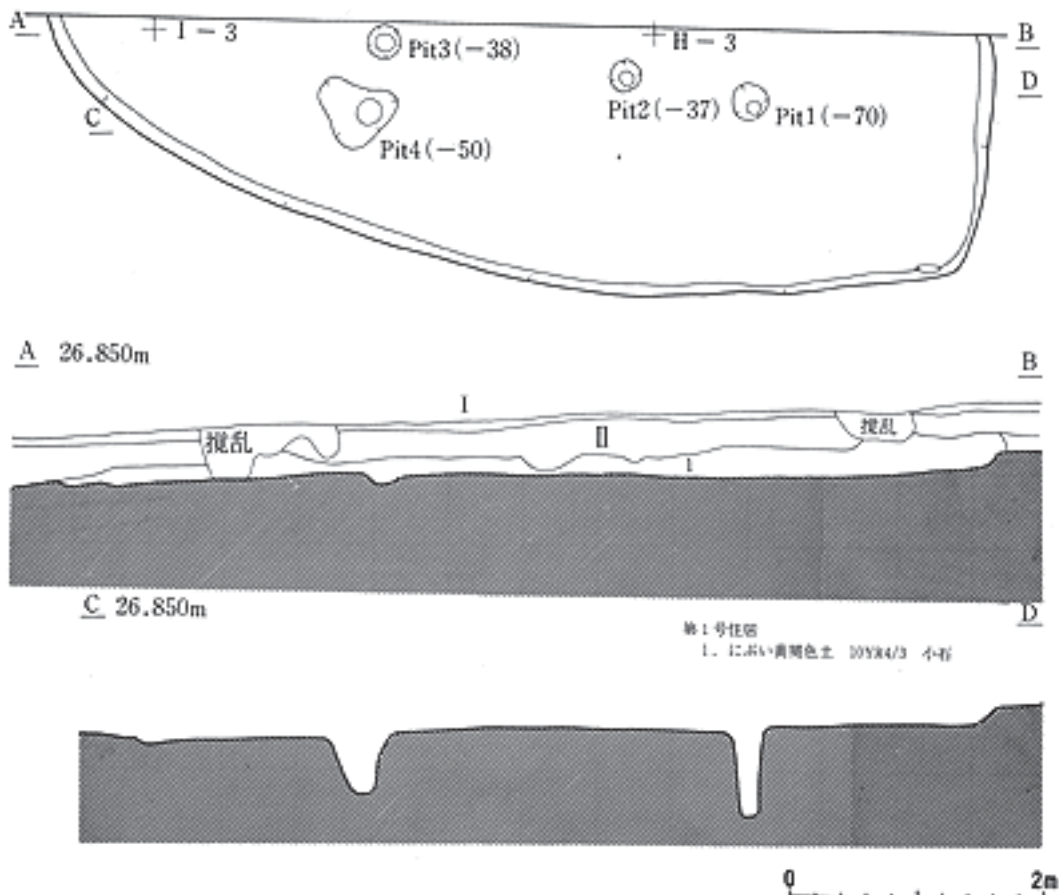
[位置] G・H・I - 3、第層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし

[平面形・規模] 調査範囲外に続き全体像は不明である。

[壁] しまり弱く、壁高は8～17cmである。北側の壁が低くなっている。

[床] 層を床とする。



第5図 第1号住居跡

[壁 溝] なし。

[柱 穴] 検出したピットは4基あり、支柱穴はピット1と考える。

[炉] 調査範囲中にはない。

[堆 積 土] 1層である。

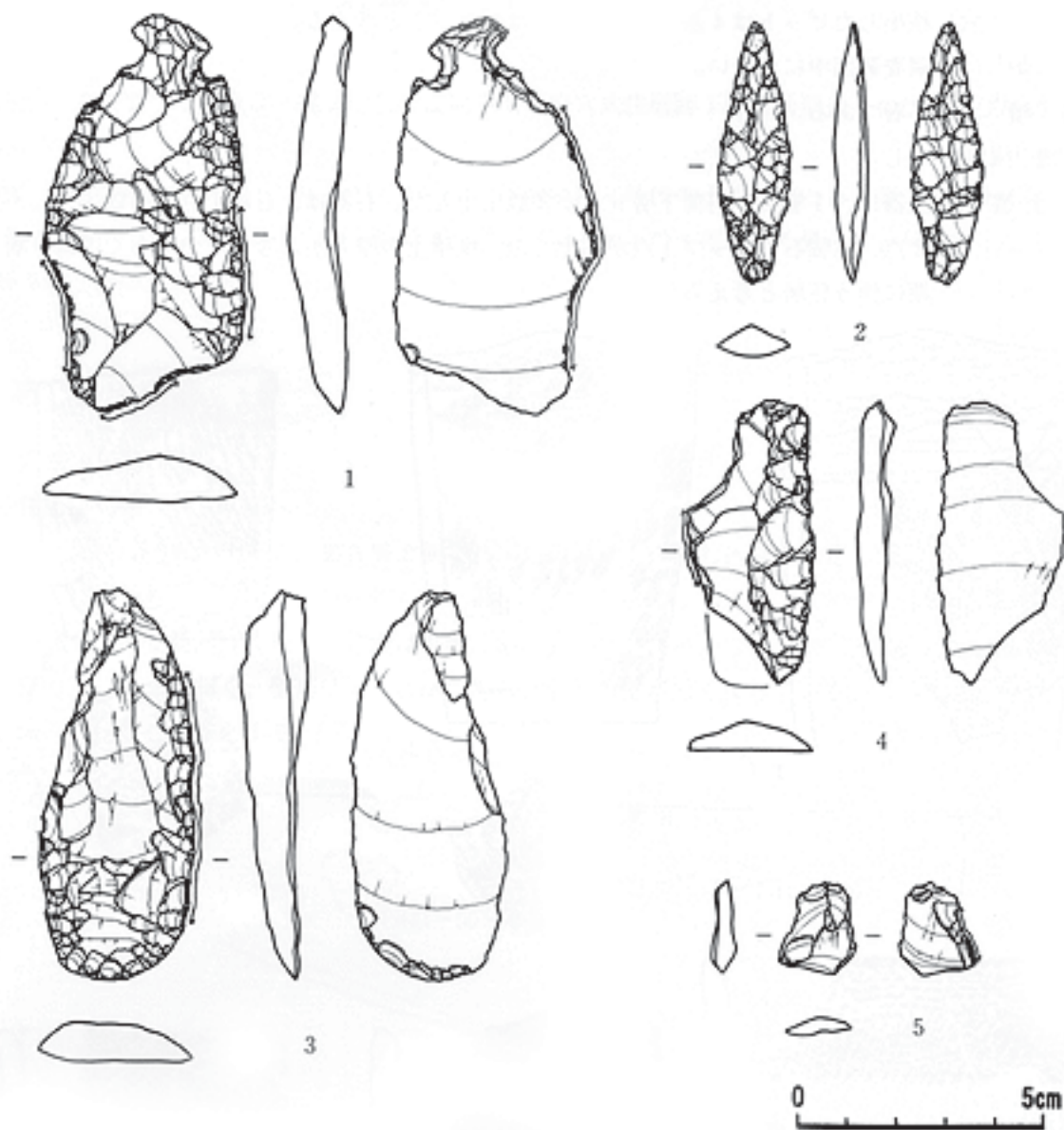
[その他の付属施設] なし。

[出 土 遺 物] 土器は、1層より円筒下層b式が多数出土した。石器は、石匙1点、石鏃1点、不定形2点、黒曜石のチップ1点が出土した。堆積土の厚さから考えておそらく円筒下層b式期に伴う住居と考えられる。



| 図版番号 | 地 点 | 層 位 | 器種・部位 | 外 面 の 文 様 | 分 類 | 整理番号 |
|------|-----|-----|---------|-------------------------------|-----|------|
| 6-1 | 1 H | 1 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部結節回転、胴部RL斜位回転 | 群 | |
| 2 | 1 H | 1 | 深鉢 | 口縁部結節回転、胴部前々段反撚横位回転、底面前々段反撚回転 | 群 | |
| 3 | 1 H | 1 | 深鉢 | 前々段反撚縄文、底面前々段反撚縄文 | 群 | |
| 4 | 1 H | 1 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部絡条体回転(すだれ状)、胴部前々段反撚斜位回転 | 群 | 75 |
| 5 | 1 H | 1 | 深鉢・口縁部 | 絡条体回転(RとL) | 群 | 73 |
| 6 | 1 H | 1 | 深鉢・口縁部 | 絡条体回転(網目状) | 群 | 70 |
| 7 | 1 H | 1 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部絡条体回転(すだれ状)、胴部RL斜位回転 | 群 | 74 |

第6図 第1号住居跡出土遺物(1)



第7図 第1号住居跡出土遺物(2)

第2号住居跡(第8・9図)

[位置] D・E - 3・4、第層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 4.75m × 4.5m で円形を呈する。

[壁] 比較的堅緻であり、壁高は30cmである。

[床] 2段構造をもち、床は凹凸がなく平坦であり、面積は3.9㎡である。10cmほど高いテラス部分もっこり部分を除き広がっている。テラス部分の面積は11.2㎡である。

[壁溝] 壁溝は、ほぼ全周し南側で途切れている。テラス部分にも一部溝の掘り込みがみられる。

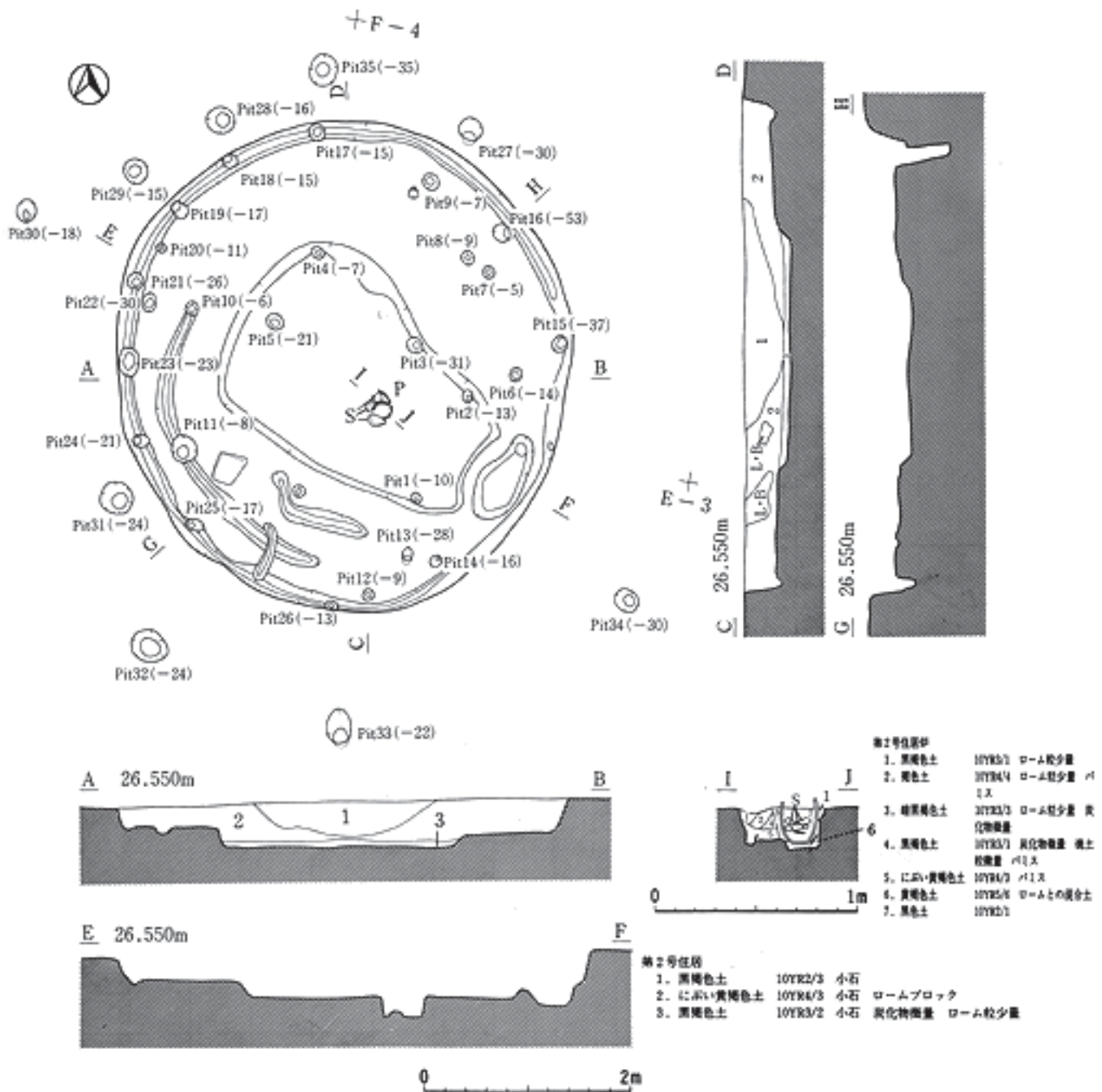
[柱穴] 検出したピット35基中、ピット27～35の9基は壁外にみられ、ピット15～26は、壁柱穴と考えられる。主柱穴の配置は不明である。

[炉] 床面を掘り込み円筒下層d2式の土器を2重に埋め込み、上部に石を組んでいる。直径は45cmである。

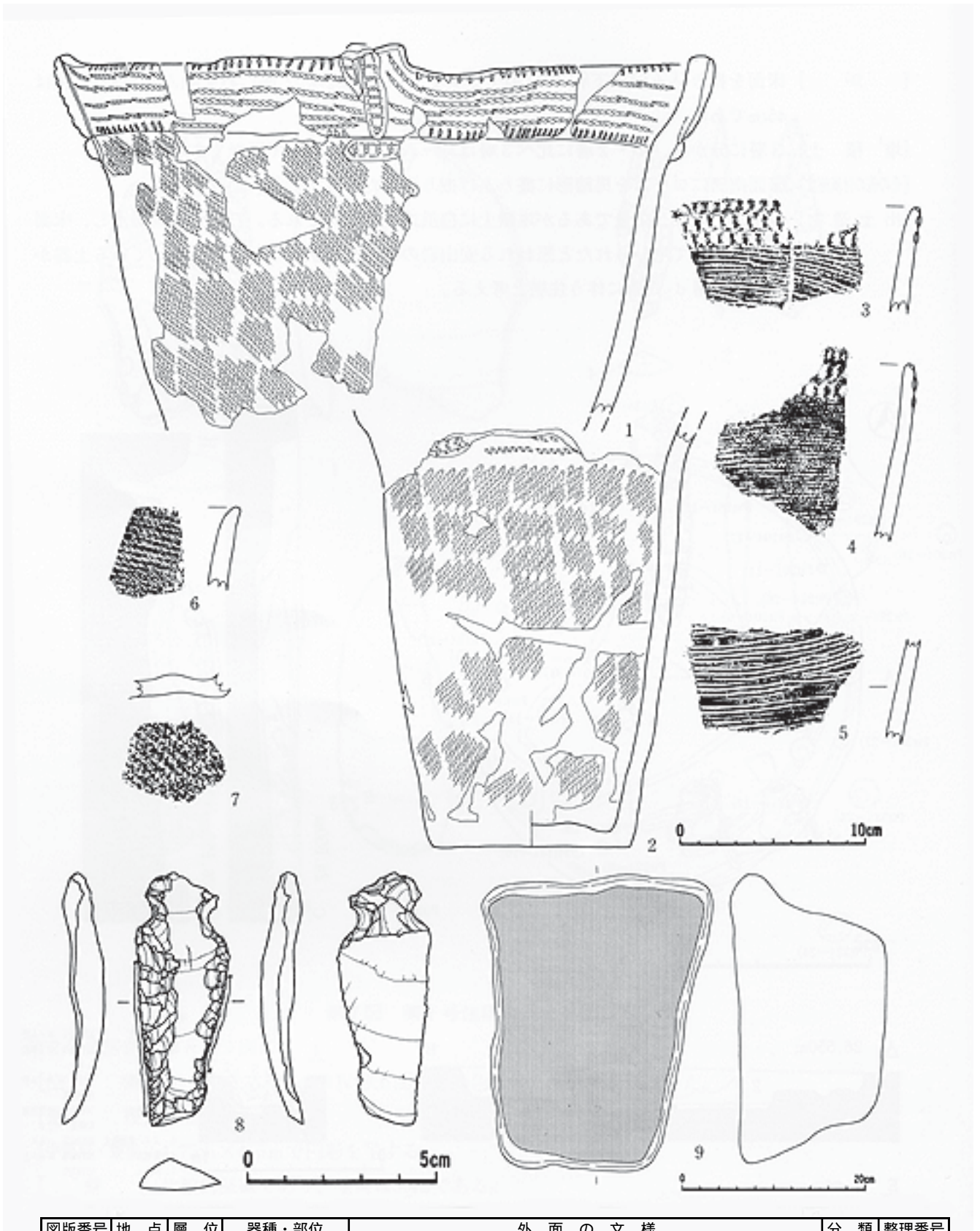
[堆 積 土] 3層に分かれ、1・2層に比べ3層はローム粒との混合土で堅緻である。

[その他の付属施設] 床面南側にロームを馬蹄形に盛り上げ掘り込んだ「もっこり」がみられる。

[出 土 遺 物] 遺物出土量は、少量であるが堆積土に白浜式土器が含まれる。石匙が1点出土し、床面に台石として用いられたと思われる安山岩の平らな礫がある。炉に使用している土器から円筒下層d₂式期に伴う住居と考える。



第8図 第2号住居跡

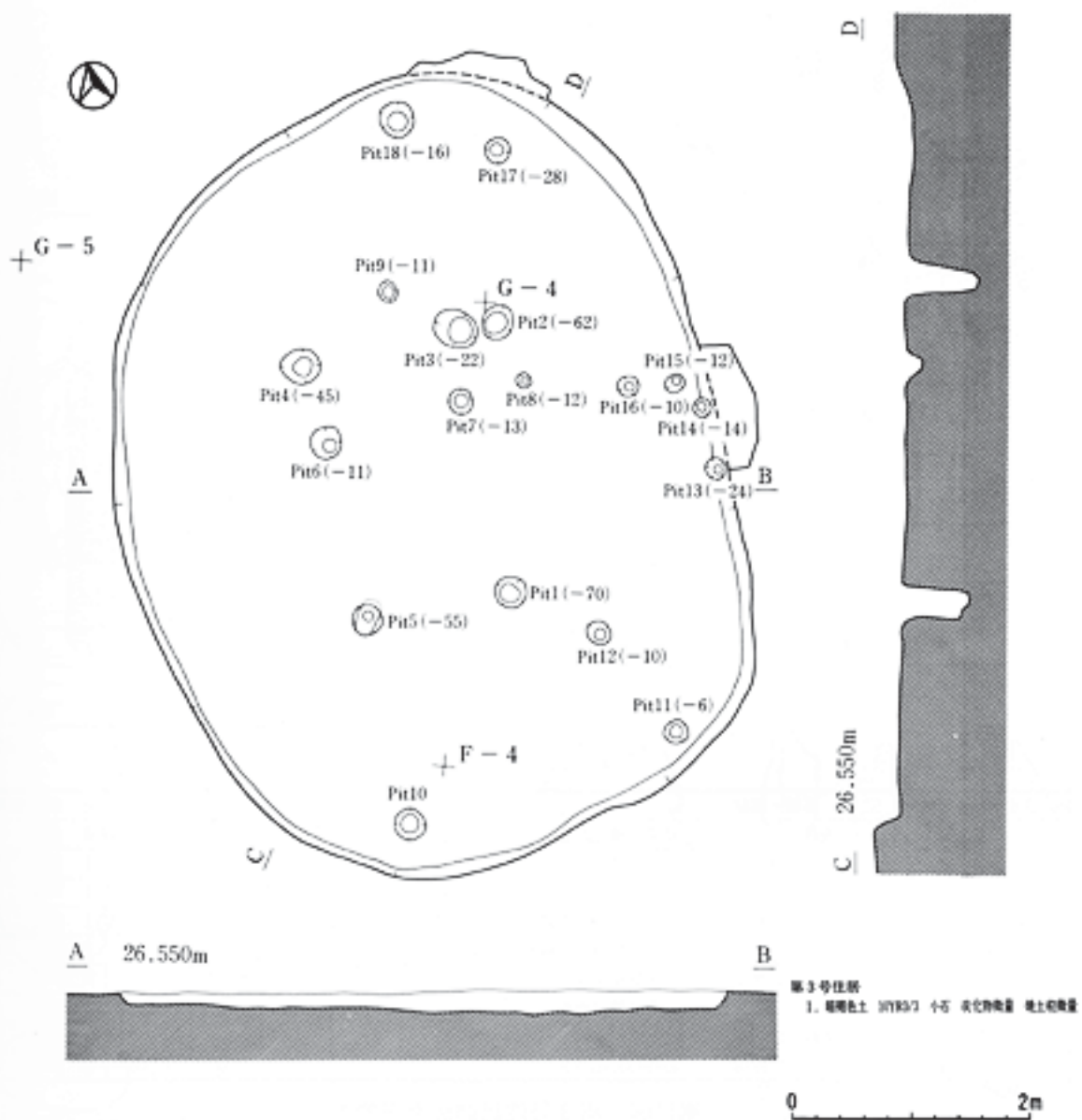


| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 | |
|------|----|----|-------|---------|--------------------------------|------|----|
| 9-1 | 2 | H | 炉 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部垂下隆帯、R側面圧痕、頸部刻目状刺突、胴部RL横位回転 | 群 | |
| 2 | 2 | H | 炉 | 深鉢・頸～胴部 | 頸部LR側面圧痕、胴部LR横位回転 | 群 | |
| 3 | 2 | H | 2 | 尖底・口縁部 | 口唇部刻目、口縁部刺突・貝殻条痕 | 群 | 66 |
| 4 | 2 | H | 2 | 尖底・口縁部 | 口唇部刻目、口縁部刺突・LR斜位回転 | 群 | 65 |
| 5 | 2 | H | 3 | 尖底・胴部 | 貝殻条痕 | 群 | 67 |
| 6 | 2 | H | 2 | 深鉢・口縁部 | L側面圧痕 | 群 | 16 |
| 7 | 2 | H | 2 | 深鉢・底部 | 底面にRLR回転 | 群 | 54 |

第9図 第2号住居跡出土遺物

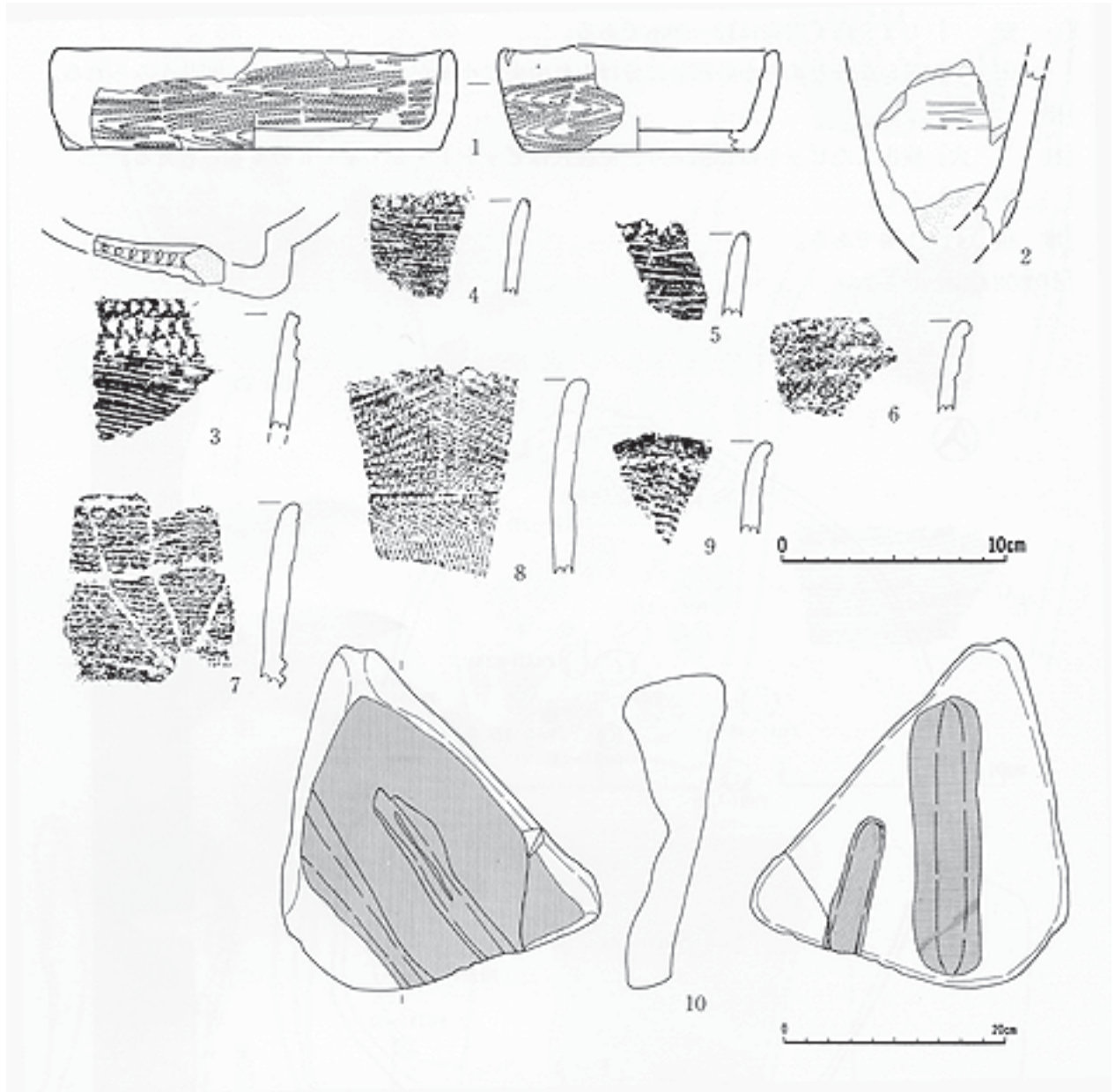
第3号住居跡（第10・11・12図）

- [位置] E・F・G - 3・4、第 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [平面形・規模] 6.55m × 5.2m で長円形を呈する。
- [壁] しまり弱く壁高は12 ~ 20cm である。
- [床] 堅い部分と柔らかい部分に分けられ中央に小礫がまとまってあり、凹凸がみられる。
- [壁溝] なし。
- [柱穴] 検出したピットは18基あり、主柱穴はピット1・2・4・5の4本と考える。
- [炉] なし。
- [堆積土] 1層である。
- [その他の付属施設] なし。



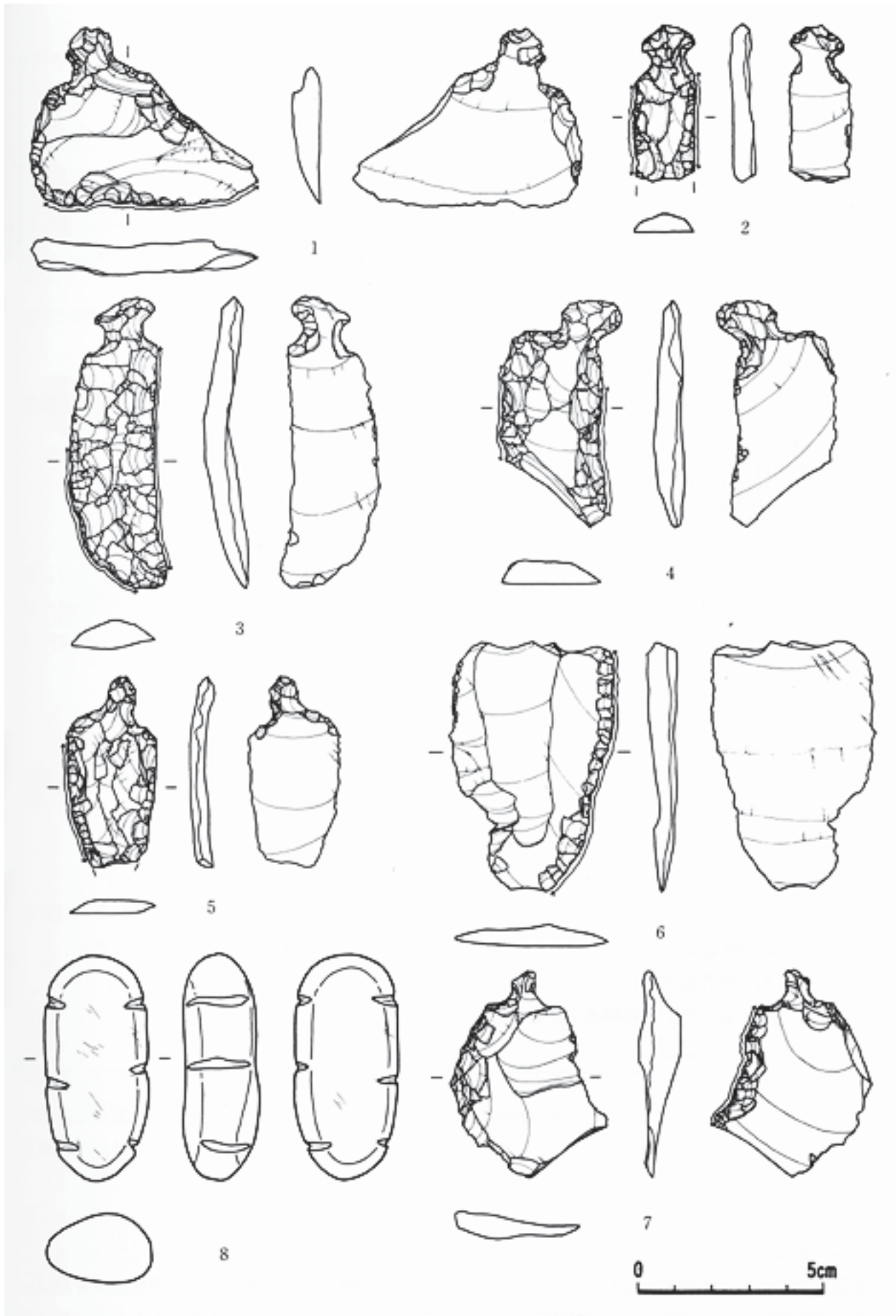
第10図 第3号住居跡

[出土遺物] 堆積土より円筒下層d₂式の浅鉢、白浜式土器、石匙6点、不定形石器1点と多量の頁岩の破片が出土した。また、両面に溝のある砥石が出土している。堆積土の低位より円筒下層d₂式の土器がみられることから円筒下層d₂式期に伴う住居と思われる。



| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 |
|------|-----|----|--------|---------------------|----|------|
| 11-1 | 3 H | 1 | 浅鉢 | 絡糸体横位回転 (LとRの木目状) | 群 | |
| 2 | 3 H | 1 | 尖底・胴部 | 貝殻条痕 | 群 | 56 |
| 3 | 3 H | 1 | 尖底・口縁部 | 口唇部刻目、口縁部刺突・貝殻条痕、注口 | 群 | 58 |
| 4 | 3 H | 1 | 尖底・口縁部 | 口唇部刻目、口縁部摩滅により不明 | 群 | 61 |
| 5 | 3 H | 1 | 尖底・口縁部 | 口唇部刻目、口縁部貝殻条痕 | 群 | 69 |
| 6 | 3 H | 1 | 深鉢・口縁部 | LR側面圧痕 | 群 | 14 |
| 7 | 3 H | 1 | 深鉢・口縁部 | 絡糸体横位回転 (R) | 群 | 13 |
| 8 | 3 H | 1 | 深鉢・口縁部 | RL側面圧痕、縦2列刺突 | 群 | 31 |
| 9 | 3 H | 1 | 深鉢・口縁部 | 絡糸体回転 (R) | 群 | 46 |

第11図 第3号住居跡出土遺物(1)



第12图 第3号住居跡出土遺物(2)

第2表 遺構内出土石器計測表

| 図版番号 | 出土地点 | 層位 | 最大計測値 | | | | 石質 | 器種 | 整理番号 | 備考 |
|-------|------|----|--------|-------|-------|--------|-----|-----|------|-------------|
| | | | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | | | | |
| 7-1 | 1 H | 1 | 83.0 | 42.0 | 13.5 | 25.0 | 頁岩 | 石匙 | 20 | |
| 2 | 1 H | 1 | 54.0 | 15.0 | 7.5 | 4.3 | 頁岩 | 石鏃 | 1 | |
| 3 | 1 H | 1 | 81.0 | 32.5 | 14.0 | 26.9 | 頁岩 | 不定形 | 2 | |
| 4 | 1 H | 1 | (58.5) | 26.5 | 8.0 | (8.6) | 頁岩 | 不定形 | 3 | |
| 5 | 1 H | 1 | 19.0 | 15.5 | 5.0 | 0.7 | 黒曜石 | チップ | 24 | 裏面に刃部作出と使用痕 |
| 9-8 | 2 H | 1 | 68.0 | 25.0 | 11.0 | 13.4 | 頁岩 | 石匙 | 4 | |
| 9 | 2 H | 床面 | 321 | 255 | 171.0 | 23,500 | 安山岩 | 台石 | 30 | |
| 11-10 | 3 H | 1 | 315 | 290 | 94.0 | 5,500 | 安山岩 | 砥石 | 31 | |
| 12- | 3 H | 1 | 63.5 | 49.0 | 10.0 | 21.2 | 頁岩 | 石匙 | 7 | |
| 2 | 3 H | 1 | (43.0) | 18.0 | 8.5 | (5.0) | 頁岩 | 石匙 | 8 | |
| 3 | 3 H | 1 | 80.5 | 27.0 | 12.0 | 15.7 | 頁岩 | 石匙 | 9 | |
| 4 | 3 H | 1 | 62.5 | 33.5 | 9.0 | 14.2 | 頁岩 | 石匙 | 6 | |
| 5 | 3 H | 1 | (52.5) | 25.5 | 7.0 | (7.8) | 頁岩 | 石匙 | 10 | |
| 6 | 3 H | 1 | 69.0 | 46.0 | 8.0 | 19.0 | 頁岩 | 不定形 | 11 | |
| 7 | 3 H | 1 | (57.0) | 43.0 | 12.0 | (16.0) | 頁岩 | 石匙 | 5 | |
| 8 | 3 H | 1 | 62.5 | 29.0 | 20.0 | 44.0 | 安山岩 | 石製品 | 13 | |

()は残存部の数値

第2節 出土遺物

今回の調査で出土した土器は、縄文時代早期から中期末まで及び、縄文時代前期中頃と後半の土器が比較的多く見られた。

1 土器

(1) 群 縄文時代早期の土器

白浜式土器(第9図3~5、第11図2~5、第13図1)

口唇部にヘラ状工具を右から斜めにあてた刻みがみられる。口縁部文様帯に2列の刺突文があり、胴部に貝殻腹縁による条痕がみられる。胴部に横走縄文を施したものが1点みられる。少ない出土量ではあるが、これらは、口唇部刻目・条痕、口唇部刻目・刺突・条痕、口唇部刻目・刺突・縄文の3形態に分けられる。

(2) 群 円筒下層式前半に比定されるもの

円筒下層b式(第6図1~7、第9図7、第11図7・9、第13図2~5・7~10)

いずれも深鉢形を呈し平口縁と波状口縁がみられる。口縁部文様帯には絡状体による回転施文が施され、胴部との区画に隆帯を施しているものもみられる。

(3) 群 円筒下層式後半に比定されるもの

円筒下層d2式(第9図1・2・6、第11図1・6・8、第13図6)

楕円形を呈した浅鉢がみられる。深鉢形を呈しているものには平口縁と波状口縁がみられる。口縁部文様帯には然糸押圧による施文が太くなり直交する刺突もでてくる。口縁が外反するものもある。

(4) 群4類 最花式土器に比定されるもの(第13図11・12)

胴部に沈線による「」状の懸垂文が施されている。

2 石器・石製品

剥片石器20点、礫石器7点、石製品1点が出土した。一般的な名称を用いて分類し、計測表は遺構内出土のものは第2表で、遺構外出土のものは第3表で表示する。なお、欠損品については計測値は残存部の数値である。

(1) 剥片石器

石鏃(第7図2、第14図1・2)

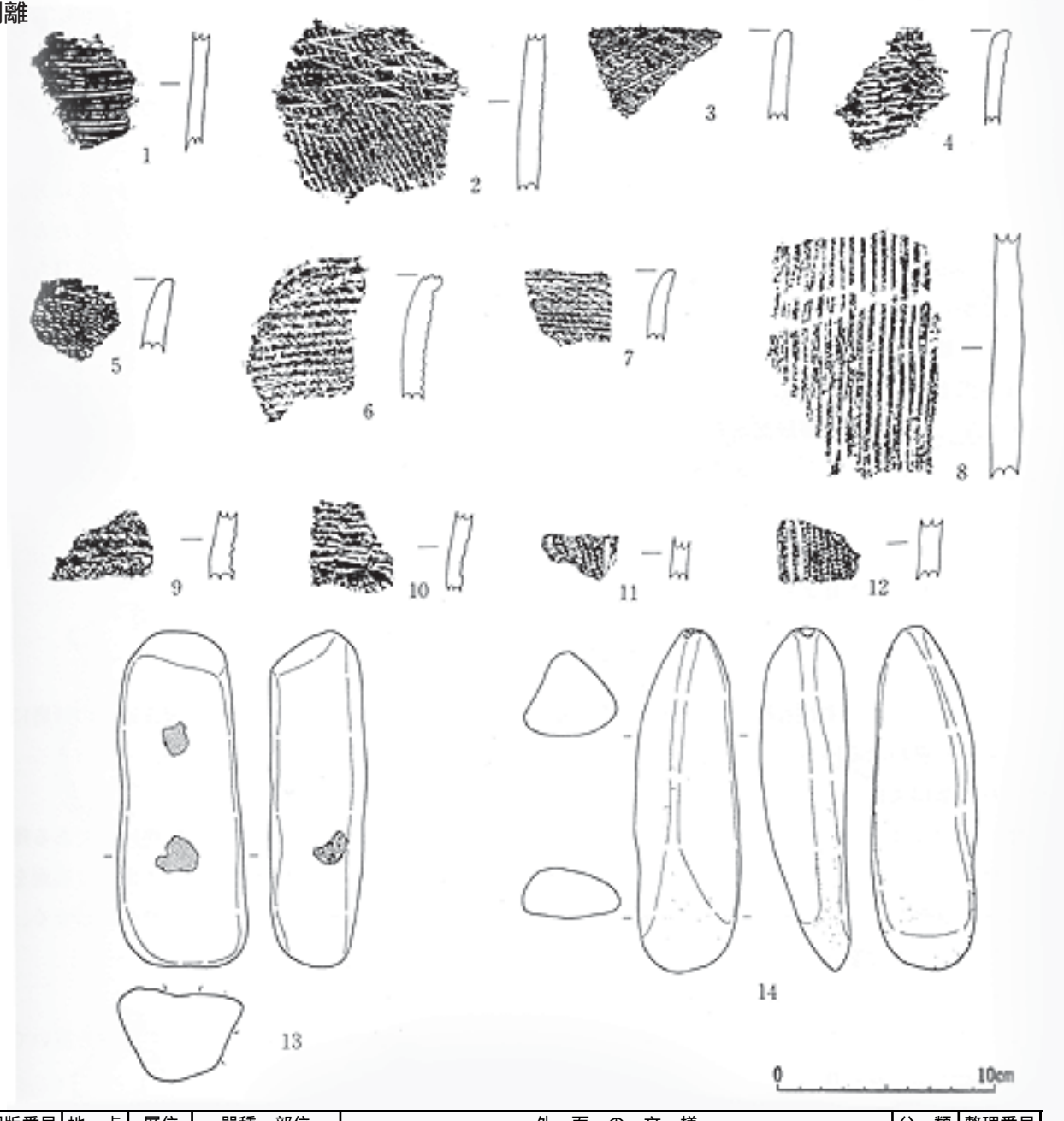
3点出土した。遺構内出土のものは、1Hの7-2は有舌尖頭器様の石鏃で基部と茎部の境界がはっきりせず茎部は太い。遺構外出土の2点はいずれも薄手の無茎鏃で、刃部にやや膨らみをもつ二等辺三

角形を呈し、基部は若干えぐれている。14 - 2は輝緑凝灰岩を素材としている。

石 匙 (第7図1、第9図1、第12図1~5・7、第14図3~8)

14点出土した。遺構内からは8点出土しており、内訳は1H1点、2H1点、3H6点である。

1Hの7 - 1は比較的大型の石匙で薄めの薄片を使用し、つまみの部分を除き背面に丁寧な調整剥離



| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 |
|--------|-------|----|--------|-----------------------|----|------|
| 13 - 1 | F - 4 | | 尖底・胴部 | 貝殻条痕 | 群 | 68 |
| 2 | G - 3 | | 深鉢・頸部 | 絡条体回転(網目状)、地文格条体回転(R) | 群 | 48 |
| 3 | E - 3 | | 深鉢・口縁部 | 絡条体回転(木目状) | 群 | 32 |
| 4 | H - 3 | | 深鉢・口縁部 | 絡条体回転(すだれ状) | 群 | 38 |
| 5 | F - 4 | | 深鉢・口縁部 | 絡条体L回転(L) | 群 | 20 |
| 6 | E - 3 | | 深鉢・縁部 | 絡条体回転(L) | 群 | 33 |
| 7 | F - 4 | | 深鉢・縁部 | 絡条体回転(LR) | 群 | 28 |
| 8 | H - 3 | | 深鉢・胴部 | 絡条体回転(R) | 群 | 8 |
| 9 | F - 3 | | 深鉢・口縁部 | LR側面圧痕 | 群 | 24 |
| 10 | H - 3 | | 深鉢・口縁部 | 絡条体回転(すだれ状) | 群 | 41 |
| 11 | G - 3 | | 深鉢・胴部 | RL回転、垂下沈線 | 群 | 7 |
| 12 | H - 3 | | 深鉢・胴部 | RL回転、垂下沈線 | 群 | 6 |

第13図 遺構外出土遺物(1)

がみられる。2Hの9 - 1は肩部分を広めに残し、刃先部分に向かってすぼまっていき、刃先が少し広がっている。また、刃の先端の一部に自然面が残っている。これも主に背面だけに調整を施している。3Hから横型の12 - 1が1点出土している。遺構外の14 - 5も横型で、主な使用面と思われる刃部にポリッシュがみられる。

14点のうち、つまみが右側によっているものが6点、左側によっているものが7点でつまみの調整の仕方については規格性が感じられない。材料となる剥片が縦長のものは12点、横長のものは2点であり、横型石匙に使用されている。つまみの調整は、打撃点を加工し、バルブを残しているものが多いが、なかには12 - 7のようにバルブをわざと外してその横に小さくつけているものも見られる。

14点中13点が、つまみの両側縁を除き、調整は背面だけに限られている。そのなかで、14 - 8は刃部再生の痕跡がみられる。14 - 4はつまみがあるという理由で石匙に分類したが、先端部に摩耗したと思われるつぶれがみられ、さらに両側縁の刃部に刃つぶししたと思われる階段状の剥離が断続的に見られることから、石錐として使用されていた可能性もある。

不定形石器（第7図3・4、第12図6）

3点出土した。1Hの7 - 4は右側縁部に調整が見られ、先端部は欠失している。7 - 3は石筥状の形態を呈していて、右側縁部から左側縁部の下約半分まで調整が見られその上方は自然面を一部残している。3Hの12 - 6は薄手の剥片を利用し、右側縁部に連続した規則正しい調整が見られ、主使用面と思われる。裏面は全面に主要剥離面を残し、使用面の裏にはごく山部に微細剥離がある。

チップ

黒曜石の剥片が1Hより出土した。

（2）礫石器

磨製石斧（第14図9）

2点出土した。いずれも節理面で剥離した欠損品で、刃部は残っていない。表面に製作過程の研磨によるものと思われる擦痕がみられる。

磨石（第13図14）

使用目的ははっきりしないが、丸みを帯びた細長い、基部の断面が三角で刃部付近は楕円形である礫を素材とし、全体に擦痕が見られ、特に顕著なのは刃先部分に縦方向の研磨痕が見られ表面より裏面をより強く研磨している。刃部は磨製石斧ほど鋭くない。基部には器体そのものを打撃したのではなく、他の物体により加撃されたと思われる敲打痕がみられる。

凹石（第13図13）

1点出土した。やや角張った細長い礫を使用し、一番広い面の長軸方向に約5センチの間隔を置いて2つ浅い凹みがみられる。

砥石（第11図10）

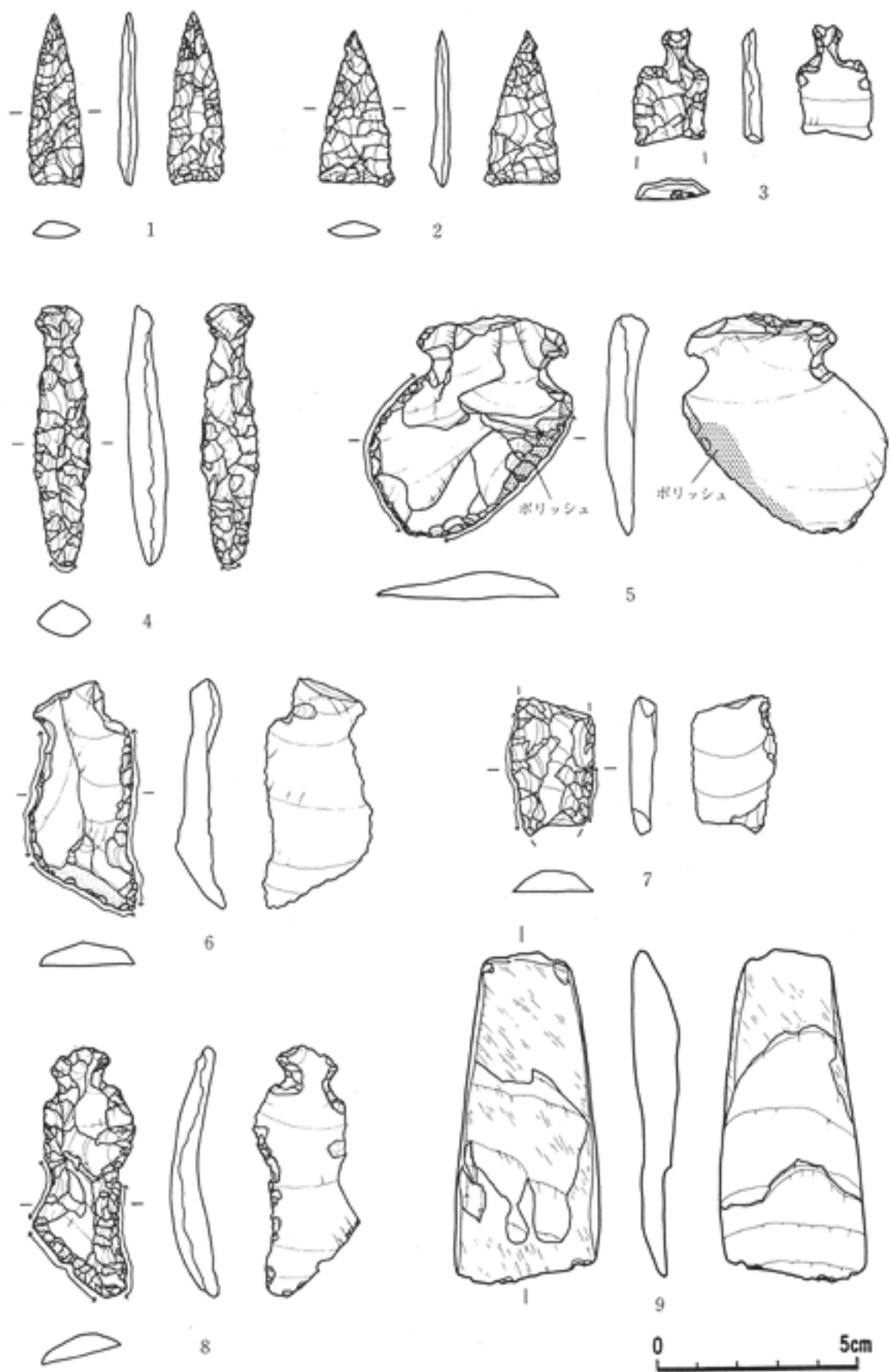
3Hの1層から出土した。両面に溝状の擦り跡がみられる。磨製石斧を製作する際に使用したものと思われる。

台石（第9図9）

2H床面から出土した。表面は平らで全面に磨りがみられる。

石製品（第12図8）

3Hの1層から出土した。やや丸みを帯びた細長い礫を素材とし、左右に各々3本ずつの刻み目がみられる。



第14図 遺構外出土遺物(2)

第3表 遺構外出土石器計測表

| 図版番号 | 出土地点 | 層位 | 最大計測値 | | | | 石質 | 器種 | 整理番号 | 備考 |
|---------|-------|----|--------|-------|-------|-------|-------|----|------|-------------------|
| | | | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | | | | |
| 13 - 13 | D - 3 | | 157 | 61 | 45 | 552 | 安山岩 | 凹 | | |
| 14 | H - 3 | | 161 | 50 | 41 | 398 | 頁岩 | スリ | | |
| 14 - | F - 3 | | 44.0 | 14.5 | 5.0 | 2.5 | 頁岩 | 石鏃 | 14 | |
| 2 | F - 3 | | 40.0 | 19.5 | 5.0 | 2.4 | 輝緑凝灰岩 | 石鏃 | 15 | |
| 3 | H - 3 | | (29.0) | 19.0 | 5.0 | (2.7) | 頁岩 | 石匙 | 21 | 焼けハジケ |
| 4 | G - 3 | | 67.0 | 15.0 | 10.0 | 8.7 | 頁岩 | 石匙 | 17 | 先端部潰れ |
| 5 | D - 3 | | 56.5 | 52.5 | 11.0 | 20.8 | 頁岩 | 石匙 | 16 | 刃部にポリッシュ |
| 6 | G - 4 | | 59.0 | 28.0 | 14.0 | 11.7 | 頁岩 | 石匙 | 19 | |
| 7 | I - 3 | | (36.5) | 21.5 | 6.5 | (6.5) | 頁岩 | 石匙 | 22 | |
| 8 | G - 4 | | 64.0 | 27.0 | 12.5 | 11.1 | 頁岩 | 石匙 | 18 | 器面全件つるつる 右側縁刃部再加工 |
| 9 | H - 3 | | 85.0 | 37.0 | 12.0 | 54 | 粘板岩 | 磨斧 | 23 | |

() は残存部の数値

第3節 小 結

1 第2号住居跡にみられるテラスについて

第2号住居跡は、平坦な面が二つあり、2段構造をもつ特異な竪穴式住居跡である。本書では、上位の平坦面を「テラス」という名称を用いることとした。テラスについての考察は、八戸市弥次郎窪遺跡で遠藤正夫氏がテラスを有する竪穴式住居跡及機能について次のように推定している。

1. テラスを有する竪穴式住居跡は、一つの集落内においても一般的な存在ではない。
2. テラスを有する竪穴式住居跡は、縄文時代早期後半から後期前半の時期まで認められる。
3. テラスを有する竪穴式住居跡は、比較的集落の中にあっても一般的な存在ではない。
4. テラスの形状は、大きく、全周及びそれに近いもの、半周程度のもの、対峙する格好のもの、部分的なもの四つのタイプがあり、そのうち、部分的なものについては、それが出入口の施設の可能性がある。
5. テラスの住居全体の中で占める割合が比較的大きい場合その機能は、確かに寝床としての利用も考えられるが、それ以外の施設と考える方が妥当である。
6. テラスを有する竪穴式住居跡の出土遺物の中には、石器に関する作業場の遺物が比較的共通してみられるという傾向が認められ、石器製作の場所という推定が可能である。

本住居跡の時期は、炉に埋め込まれた土器から円筒下層d₂式斯と考えられる。本遺跡における調査面積が180m²と狭いことから集落内の他の住居と比較することが困難であるが、おそらく一般的な存在ではないと思われる。本住居跡における床面積は3.9m²、テラス部分の面積は11.2m²である。テラスの住居に占める割合は、1:3と過去に報告されている例よりテラス部分の比率が大きいという特徴がある。石器製作の作業場の可能性については、テラス部分に台石が埋められた形で出土していること、また、隣接する第3号住居においても住居の形態が異なるものの両面に溝のある砥石が出土するとともに頁岩のフレークが数多く出土しており、石器製作の作業場の可能性が十分に考えられる。

また、本住居跡については、堆積土3層の土が強くしまっているため、テラスとして使用した後、平坦な床に埋め戻して使用したとも考えられる。

2 出土遺物について

今回の調査で出土量は少ないものの、群の縄文時代早期の貝殻条痕系の白浜式土器は、口唇部刻目・貝殻条痕と口唇部刻目・2列の刺突・貝殻条痕と口唇部刻目・2列の刺突・縄文の3形態が確認された。また、第11図3に見られるの片口（注口）の破片も出土している。

青森市内における縄文時代早期の土器の報告は、三内沢部遺跡や蛸沢遺跡等に見られるが非常に少なく、当資料が貴重な資料になり得ると考える。

また、発掘調査面積が少ないにもかかわらず竪穴式住居が3軒検出されたためか、礫石器は少ないものの剥片石器が20点出土したことは、2号住居跡の台石、3号住居の砥石や多数のフレークの出土と考えあわせ、石器製作の場所であった可能性が出土遺物からも考えられる。

第 章 横内(2)遺跡

横内(2)遺跡で検出した遺構は、平安時代の竪穴式住居跡1軒、縄文時代の土壇26基、時期不明の溝状遺構2基である。

出土した遺物は、ダンボール箱にして16箱で、内訳は縄文時代の土器5箱、平安時代の土師器・須恵器1箱、石器・礫等10箱である。出土した縄文時代の土器では、前期後半の土器が多くみられる。

第1節 検出遺構

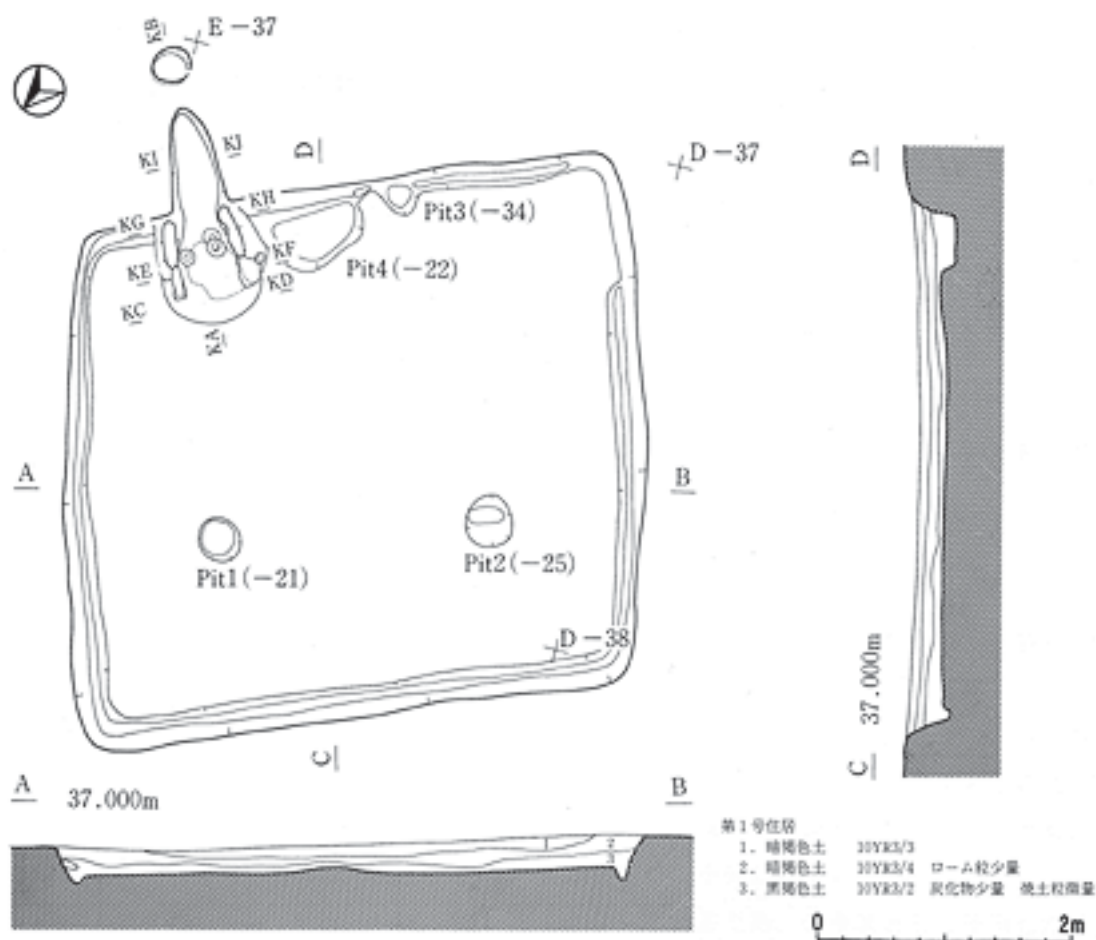
1 竪穴式住居跡

第1号住居(第15・16・17図)

[位置] E・F - 37・38、第層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、主軸方位はS - 55° - Eである。壁長は、南壁4.2m北壁4.5m東壁4.0m



第15図 第1号住居跡

西壁 4.2m である。

[壁] 壁高は、南壁 30cm 北壁 30cm 東壁 25cm 西壁 25cm である。

[床] 第 層を床とし、貼床は認められない。

[壁 溝] 南西隅で途切れているがほぼ全周する。カマドを構築する前に壁溝を掘ったと思われる。

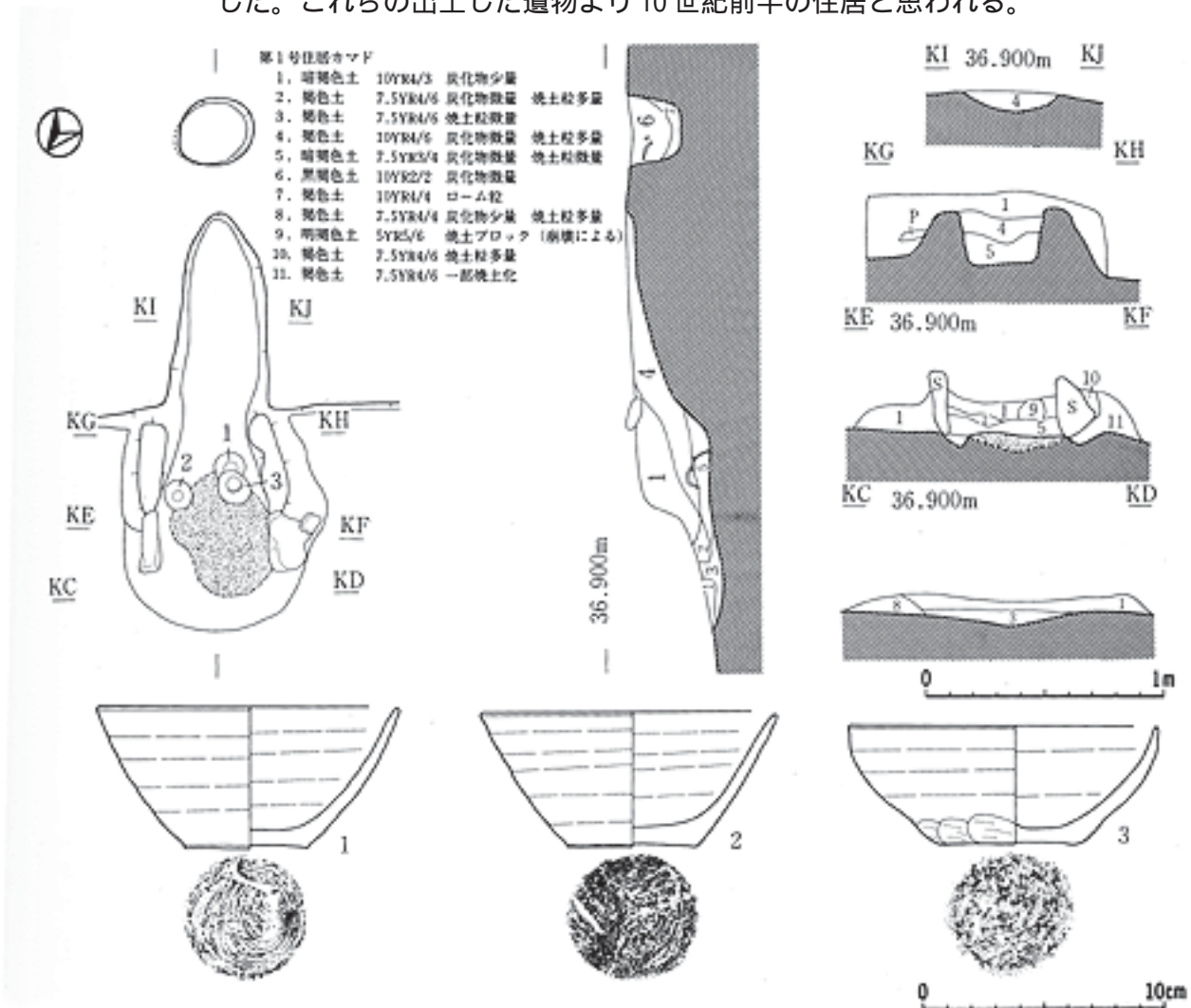
[柱 穴] 検出したピットは4基でピット1・2・3を主柱穴と考える。

[カ マ ド] 南壁東寄に位置し半地下式の煙道を有する。燃烧部は、第 層を掘り込み、袖は石を芯材として粘土で構築している。また、支脚として杯を3個使用している。

[堆 積 土] 3層に分かれ、炭化物和ローム粒が含まれる。

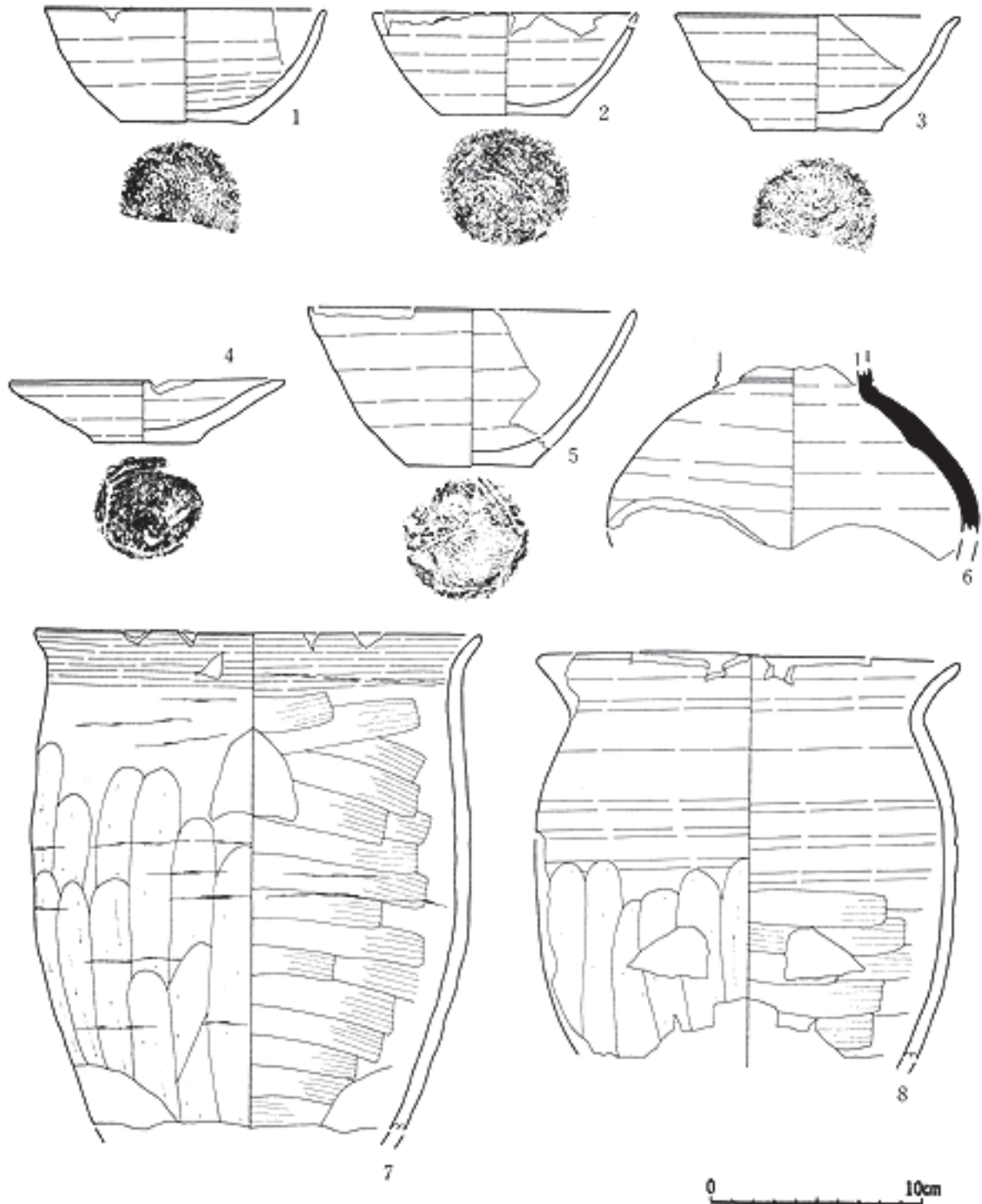
[その他の付属施設] なし。

[出 土 遺 物] 土師器と須恵器が出土している。カマドの支脚として使用された杯3点、カマド堆積土から甕2点、堆積土より杯4点で、大きめの杯と浅い皿状の杯がみられる。また、床面より杯1点が出土した。須恵器は堆積土から長頸壺の肩部が出土した。これらの出土した遺物より10世紀前半の住居と思われる。



| 図版番号 | 地点 | 層位 | 種類・器種 | 法量 (cm) | | | 外面調整 | | | 内面調整 | | | 底面 | 整理番号 | |
|------|----|----|-------|---------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|----|------|-------|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 口縁部 | 体部上半 | 体部下半 | 口縁部 | 体部上半 | 体部下半 | | | |
| 16-1 | 1 | H | カマド | 5 | 土師器・杯 | 12.8 | 6.0 | 5.3 | ロク口 | | | | | | 回転糸切り |
| 2 | 1 | H | カマド | 5 | 土師器・杯 | 12.0 | 5.7 | 5.5 | ロク口 | | ヘラケズリ | | | | 回転糸切り |
| 3 | 1 | H | カマド | 5 | 土師器・杯 | 13.0 | 5.1 | 5.5 | ロク口 | | | | | | 回転糸切り |

第16図 第1号住居跡カマド・出土遺物(1)



| 図版番号 | 地点 | 層位 | 種類・器種 | 法量 (cm) | | | 外面調整 | | | 内面調整 | | | 底面 | 整理番号 | |
|------|----|----|-------|---------|--------|-----|-------|------|-------|-------|------|------|------|---------|--|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 口縁部 | 体部上半 | 体部下半 | 口縁部 | 体部上半 | 体部下半 | | | |
| 17-1 | 1 | F | 床 | 土師器・坏 | (13.1) | 5.3 | (6.1) | ロク口 | | | | | | 回転糸切り | |
| | 2 | F | 2 | 土師器・坏 | 12.3 | 4.9 | 6.3 | ロク口 | | | | | | 回転糸切り | |
| | 3 | F | Pit4 | 土師器・坏 | 13.3 | 5.6 | 6.2 | ロク口 | | | | | | 回転糸切り | |
| | 4 | F | 1・2・3 | 土師器・坏 | 13.3 | 3.0 | 5.0 | ロク口 | | | | | | 回転切り後調整 | |
| | 5 | F | 床 | 土師器・坏 | 15.8 | 7.6 | 6.1 | ロク口 | | | | | | 回転糸切り | |
| | 6 | F | 床 | 須恵器・壺 | - | - | - | | | | | | | | |
| | 7 | F | カマド | 土師器・甕 | - | - | - | ナデ | ヘラケズリ | ヘラケズリ | ナデ | ヘラナデ | ヘラナデ | | |
| | 8 | F | カマド | 土師器・甕 | - | - | - | ロク口 | | ヘラケズリ | ロク口 | ロク口 | ヘラナデ | | |

第17図 第1号住居跡出土遺物(2)

2 土 壙

第1号土壙（第18図）

[位 置] D・E - 40、第 層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

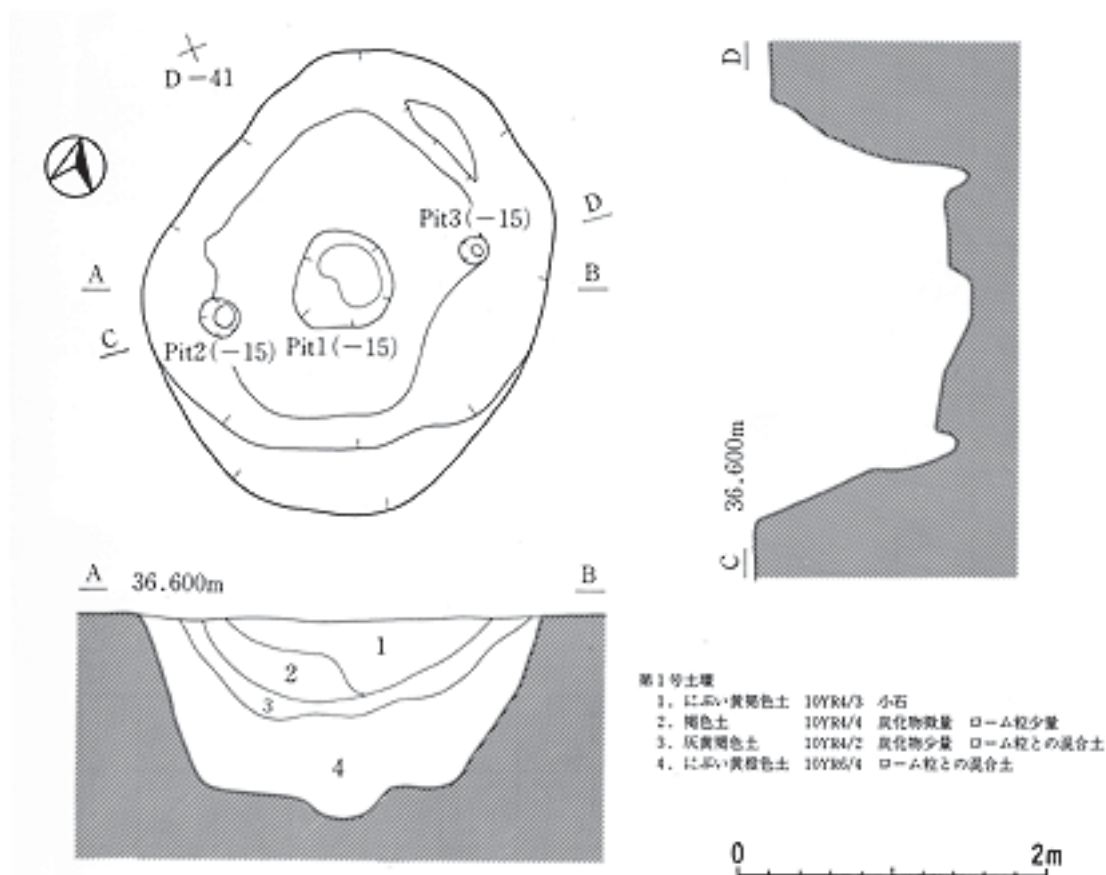
[形状・規模] 開口部で3.0m × 2.4mの長円形、底部で2.0m × 1.5mの不整形円形を呈し、深さは110cmである。

[壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。

[底] 底面は平坦で、ピット3基がみられる。

[堆 積 土] 4層に分層され、2・3層に炭化物とローム粒が含まれる。

[出 土 遺 物] 土器は3層から円筒下層d2式土器が出土した。



第18図 第1号土壙

第2号土壙（第19図）

[位 置] E・F - 40、第 層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重 複] なし。

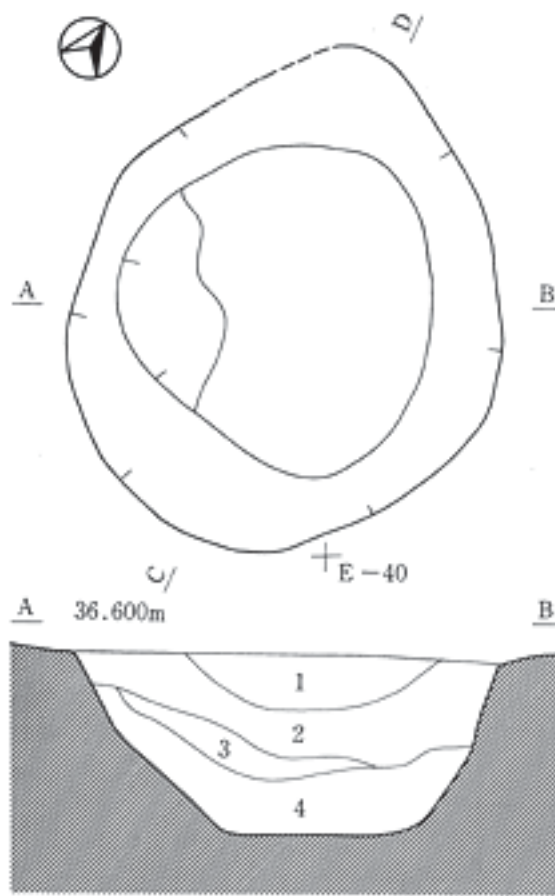
[形状・規模] 開口部で3.4m × 2.8mの不整形円形、底部で2.1m × 2.1mの不整形円形を呈し、深さは120cmである。

[壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。

[底] 第 層を底面とし平坦である。

[堆 積 土] 4層に分層され、1層に炭化物2層にローム粒が含まれ、3・4層はロームとの混合土である。3・4層の堆積状況は、人為的に一気に埋めもどされた様相を呈する。

第2号土壌

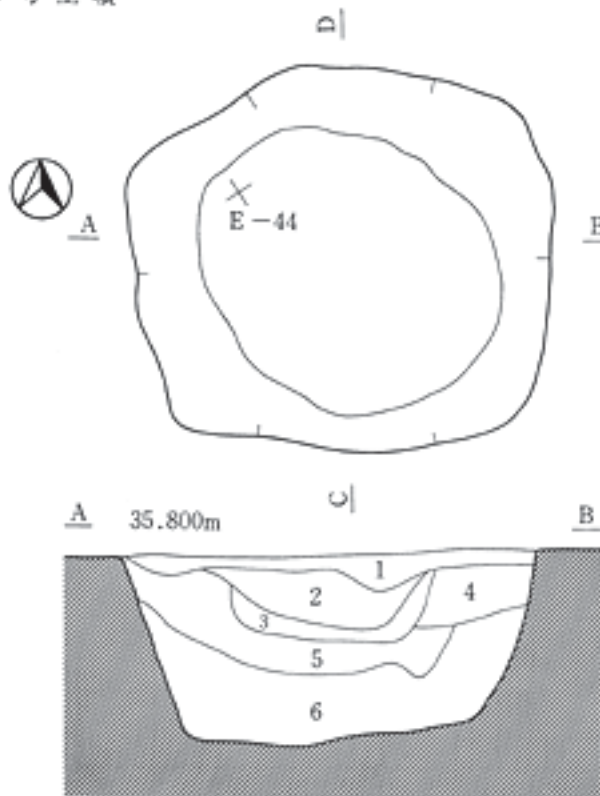


第2号土壌

- 1. にがい黄褐色土 10YR5/4 炭化物少量 小石
- 2. 褐色土 10YR4/4 ローム粒
- 3. 黄褐色土 10YR5/6 ロームとの混合土
- 4. にがい黄褐色土 10YR6/4 ロームとの混合土

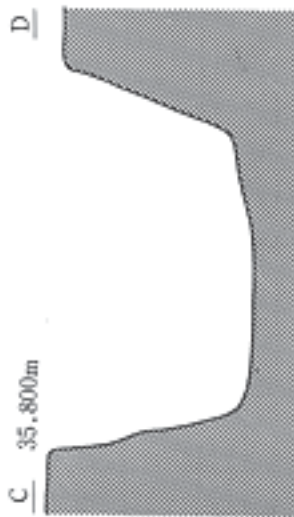


第3号土壌



第3号土壌

- 1. 褐色土 10YR4/4 炭化物微量
- 2. にがい黄褐色土 10YR6/3 炭化物少量 ローム粒少量
- 3. 褐色土 10YR4/4 ローム粒少量
- 4. 褐色土 10YR4/6 炭化物
- 5. にがい黄褐色土 10YR5/4 炭化物少量
- 6. にがい黄褐色土 10YR5/3 炭化物微量 ロームとの混合土



第19図 第2・3号土壌

[出土遺物] 土器が多量に出土し4層より円筒下層 d_2 式土器、床面より摩滅した土器、石器は2層より石鏃、フレイクが出土した。

第3号土壌(第19図)

[位置] E・F - 43・44、第層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部で2.75m × 2.5mの不整形円形、底部で2.05m × 1.7mの長円形を呈し、深さは110 ~ 120cmである。

[壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。

[底] 底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層され、各層に炭化物が含まれる。

[出土遺物] 土器が数多く出土し5層より円筒下層 d_2 式土器、2層よりフレイクが出土した。

第4号土壌(第20図)

[位置] E・F - 42・43、第層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

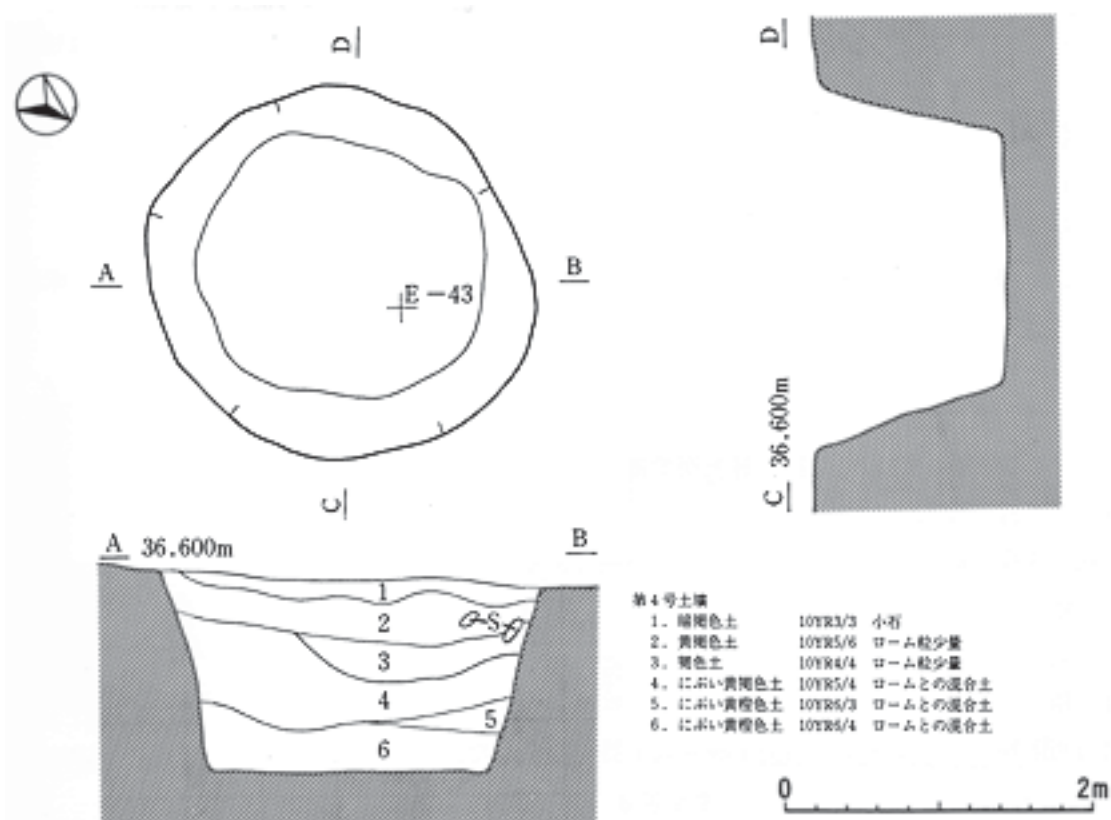
[形状・規模] 開口部で2.5m × 2.3mの円形、底部で1.9m × 1.65mの不整形円形を呈し、深さは120 ~ 130cmである。

[壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。

[底] 底面は平坦である。

[堆積土] 6層に分層され、各層にローム粒が含まれ4 ~ 6層に多量にみられる。

[出土遺物] 各層より土器、礫が出土した。



第20図 第4号土壌

第6号土壙(第21図)

- [位置] D - 44、第 層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で0.8m × 0.7mの円形、底部で0.7m × 0.65mの円形を呈し、深さは60cmである。
- [壁] 断面形はほぼ垂直に立ち上がり、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦である。
- [堆積土] 3層に分層され、1層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 出土していない

第7号土壙(第21図)

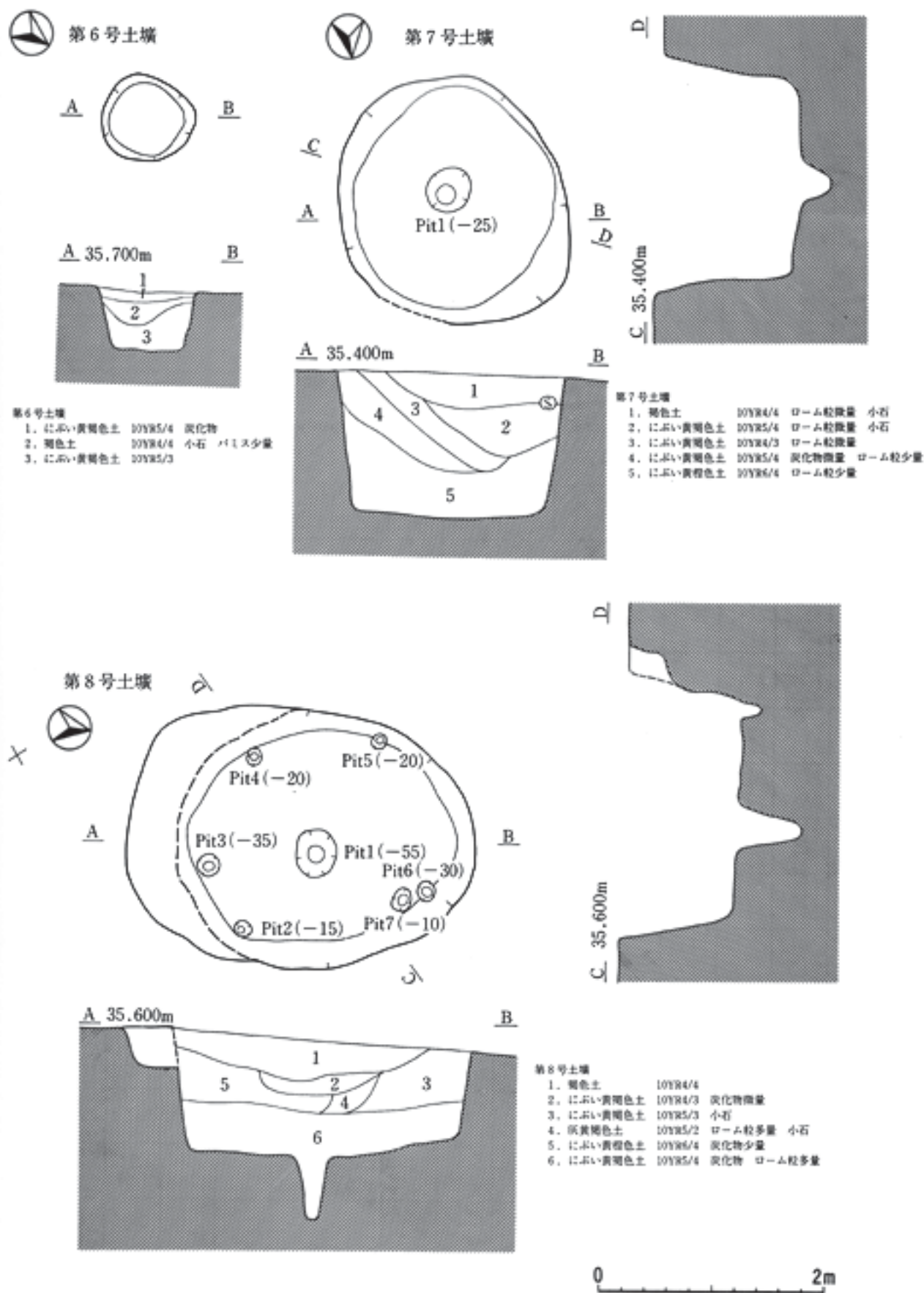
- [位置] D・E - 44・45、第 層上面で褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.4m × 2.05mの長円形、底部で1.9m × 1.8mの不整円形を呈し、深さは130cmである。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面はほぼ平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 5層に分層され、4層に炭化物各層にローム粒が含まれる。
- [出土遺物] 土器は1～3層から円筒下層b式土器が出土した。

第8号土壙(第21図)

- [位置] E - 44、第 層上面で褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.7m × 2.3mの長円形、底部で2.45m × 1.9mの長円形を呈し、深さは100～110cmである。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基、壁の周囲に6基みられる。
- [堆積土] 6層に分層され、2・5・6層に炭化物4・6層にローム粒が含まれる。
- [出土遺物] 土器は数多く出土している。1層より大木7式土器、円筒下層d₂式土器、床面より摩滅した土器、2・5層よりフレイクが出土した。

第9号土壙(第22図)

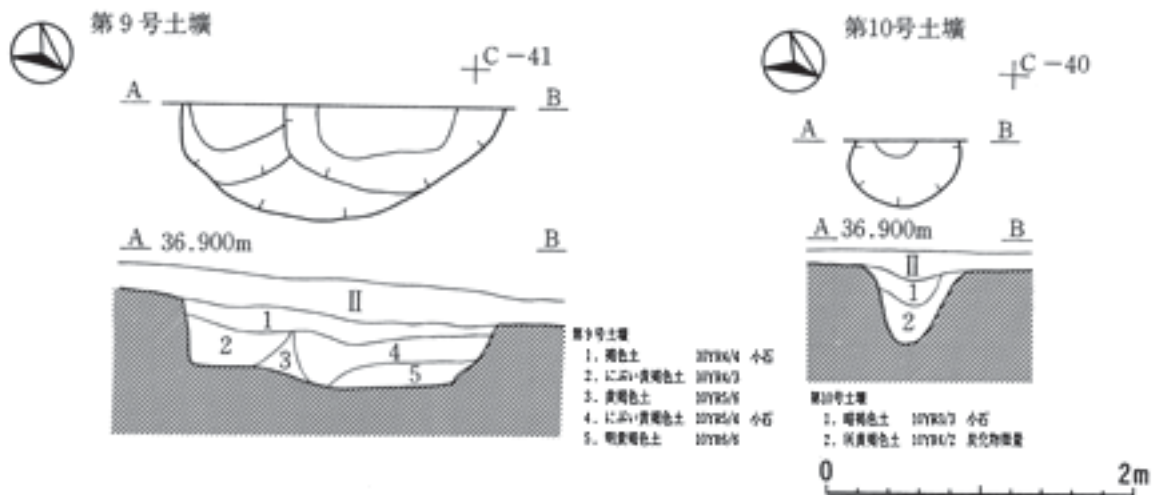
- [位置] D - 40・41、第 層上面で褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 調査範囲外に続き全体像は不明である。
- [壁] 壁高40cmでしまりは強い。
- [底] 第 層を底面とし平坦である。
- [堆積土] 5層に分層される。
- [出土遺物] 1・4層より円筒上層a式土器が出土した。



第21図 第6・7・8号土坑

第10号土壙（第22図）

- [位置] D - 39、第 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 調査範囲外に続き、推定で開口部で0.7m × 0.6mの円形を呈する。
- [壁] しまりは強い。
- [底] 底面は丸くくぼんでいる。
- [堆積土] 2層に分層され、2層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 時期不詳の土器が3点出土した。



第22図 第9・10号土壙

第11号土壙（第23図）

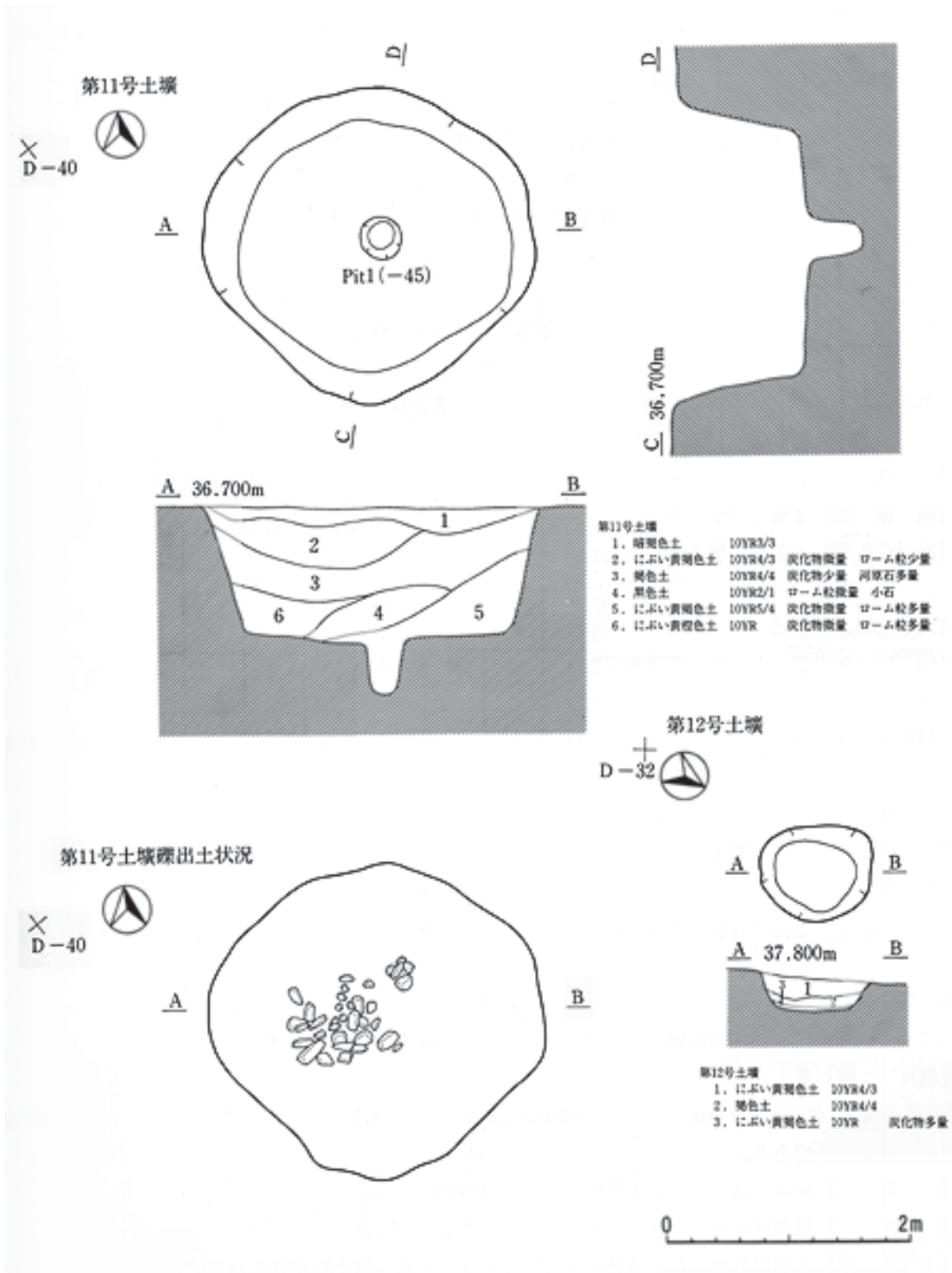
- [位置] E - 39、第 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.75m × 2.65mの円形、底部で2.3m × 2.1mの円形を呈し、深さは100～110cmである。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 6層に分層され、2・3・5・6層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 土器は各層より出土し、5層より円筒下層d₂式土器、石器は4層石鏃・不定形石器、3層に礫が多量に並べたような配置で出土した。

第12号土壙（第23図）

- [位置] D - 33、第 層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で0.95m × 0.8mの不整形円形、底部で0.65m × 0.5mの不整形円形を呈し、深さは30cmである。
- [壁] 断面形はゆるやかに立ち上がり上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層され、3層に炭化物が含まれる。

[出土遺物] 土器は床面から出土したが摩滅により時期不詳である。



第23図 第11・12号土坑

第13号土壙(第24図)

- [位置] F・G - 43、第層上面で褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.7m × 2.6mの不整円形、底部で2.6m × 1.8mの不整円形を呈し、深さは80 ~ 100cmでる。
- [壁] 断面形は上部が開く形で一部フラスコ状を呈し、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 5層に分層され、1・3層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 土器は3層で円筒下層d₁式土器、床面より円筒上層a式土器が出土した。

第14号土壙(第24図)

- [位置] D - 40、第層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で0.6m × 0.6mの円形を呈し、深さは70 ~ 80cmである。
- [壁] 断面形は逆三角錐状で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦である。
- [堆積土] 3層に分層される。
- [出土遺物] 土器は1層より出土した。

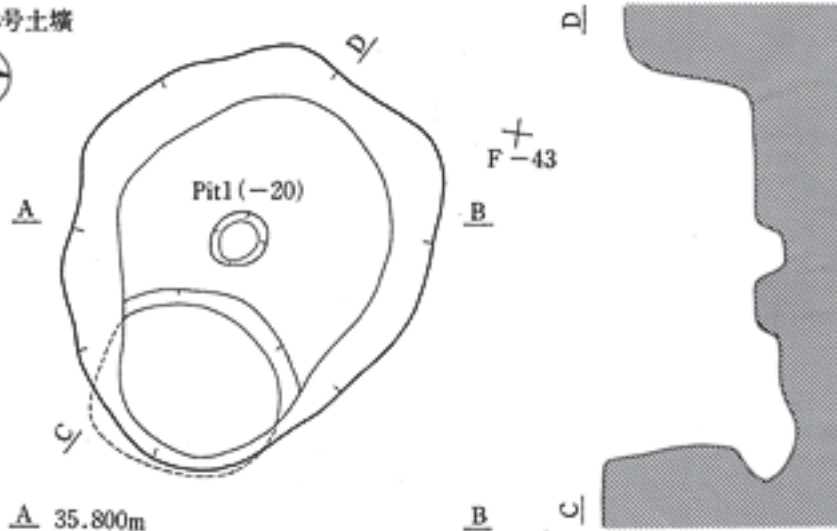
第15号土壙(第24図)

- [位置] E・F - 41、第層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.25m × 1.9mの長円形、底部で1.75m × 1.5mの不整円形を呈し、深さは130 ~ 100cmでる。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は若干傾斜し、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 5層に分層され、2 ~ 5層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 土器は各層より出土し、2層から円筒下層d₂式土器、3層よりフレークが出土した。

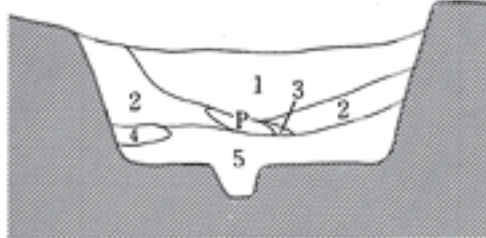
第16号土壙(第25図)

- [位置] E - 45、第層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.4m × 2.3mの不整円形、底部で2.0m × 1.95mの円形を呈し、深さは110 ~ 120cmである。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 6層に分層され、各層に炭化物2・3・6層に焼土粒が含まれる。
- [出土遺物] 1層より円盤状土製品、5層より円筒下層d₂式土器が出土した。

第13号土壌



A 35.800m



- 第13号土壌
- | | | |
|------------|---------|----------|
| 1. 褐色土 | 10YR6/6 | 炭化物少量 |
| 2. 褐色土 | 10YR6/4 | ローム粒少量 |
| 3. 黒褐色土 | 10YR2/3 | 炭化物微量 |
| 4. 暗褐色土 | 10YR3/3 | |
| 5. にがい黄褐色土 | 10YR5/4 | ロームとの混合土 |



第14号土壌

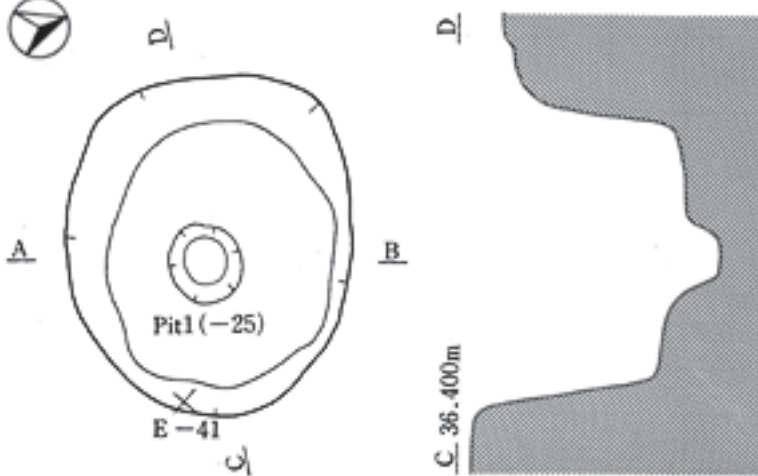


A 36.600m

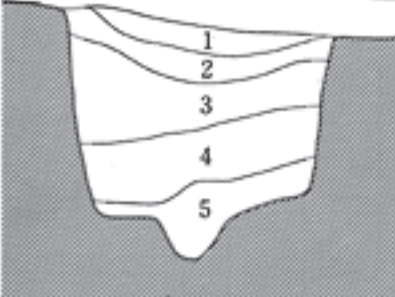


- 第14号土壌
- | | |
|------------|---------|
| 1. 暗褐色土 | 10YR3/3 |
| 2. 灰黄褐色土 | 10YR4/2 |
| 3. にがい黄褐色土 | 10YR5/4 |

第15号土壌



A 36.400m



- 第15号土壌
- | | | |
|------------|---------|-------|
| 1. 黒褐色土 | 10YR2/3 | |
| 2. 褐色土 | 10YR4/4 | 炭化物微量 |
| 3. にがい黄褐色土 | 10YR6/4 | 炭化物少量 |
| 4. にがい黄褐色土 | 10YR5/4 | 炭化物微量 |
| 5. 褐色土 | 10YR6/6 | 炭化物微量 |



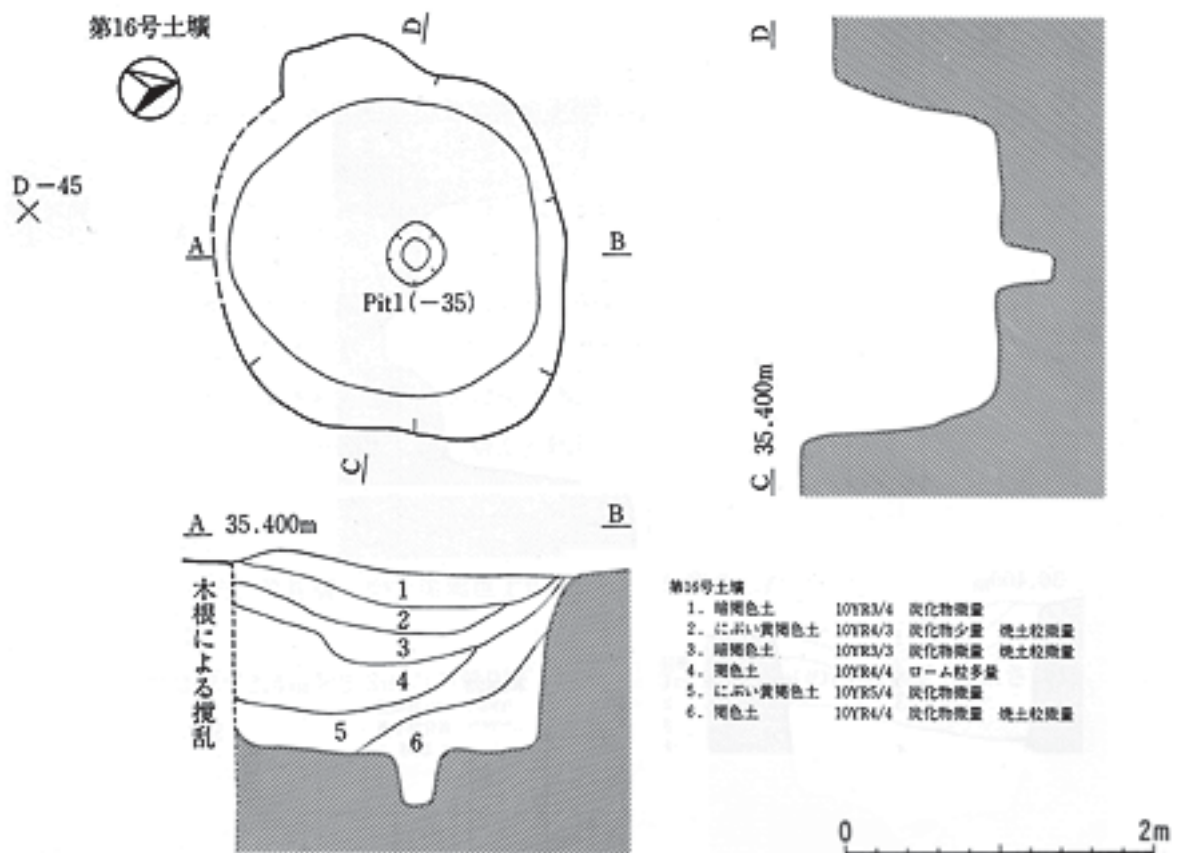
第24図 第13・14・15号土壌

第17号土壌 (第26図)

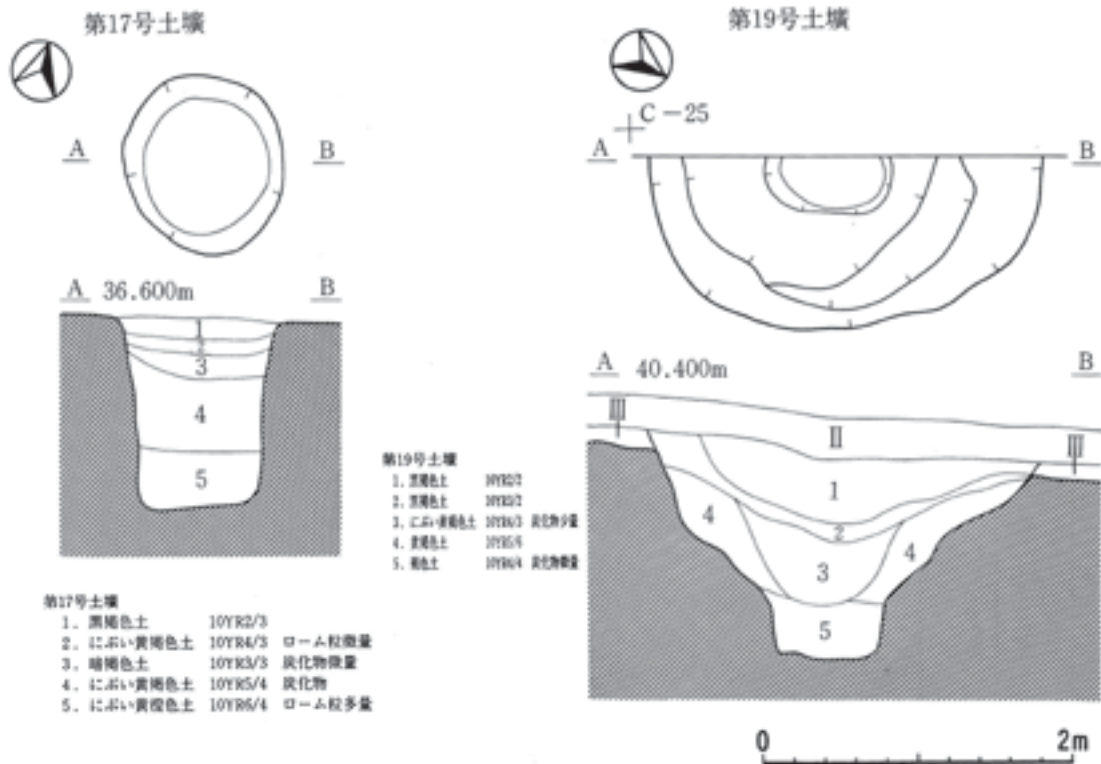
- [位置] D - 40、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で1.2m × 1.0mの円形、底部で0.8m × 0.8mの円形を呈し、深さは120cmである。
- [壁] 断面形は垂直に立ち上がり、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦である。
- [堆積土] 5層に分層され、3・4・5層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 床面から円筒上層b式土器が出土した。

第19号土壌 (第26図)

- [位置] D・E - 40、第 層上面で異褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 調査範囲外に続き全体像は不明である。
- [壁] 断面形はゆるやかに上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面がピット状に掘り込まれ平坦である。
- [堆積土] 5層に分層され、3・5層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 5層に円筒下層d₂式土器が集中して出土した。



第25図 第16号土壌



第26図 第17・19号土壌

第20号土壌（第27図）

- [位置] D・E - 40、第層上面で黒色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.05m × 1.8mの不整形円形、底部で0.65m × 0.6mのピット状を呈する。
- [壁] 断面形はゆるやかに立ち上がり、しまりは強い。
- [底] 底面がピット状に掘り込まれ平坦である。
- [堆積土] 7層に分層され、炭化物と小石が含まれる。
- [出土遺物] 土器は6・7層から円筒下層d₂式土器が出土している。

第22号土壌（第27図）

- [位置] D - 33、第層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で0.95m × 0.8mの不整形円形、底部で0.65m × 0.5mの不整形円形を呈し、深さは30cmである。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦である。
- [堆積土] 2層に分層される。
- [出土遺物] 土器は1層から円筒下層d₂式土器、早期と思われる土器が出土した。

第23号土壌 (第27図)

[位置] D - 38、第層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

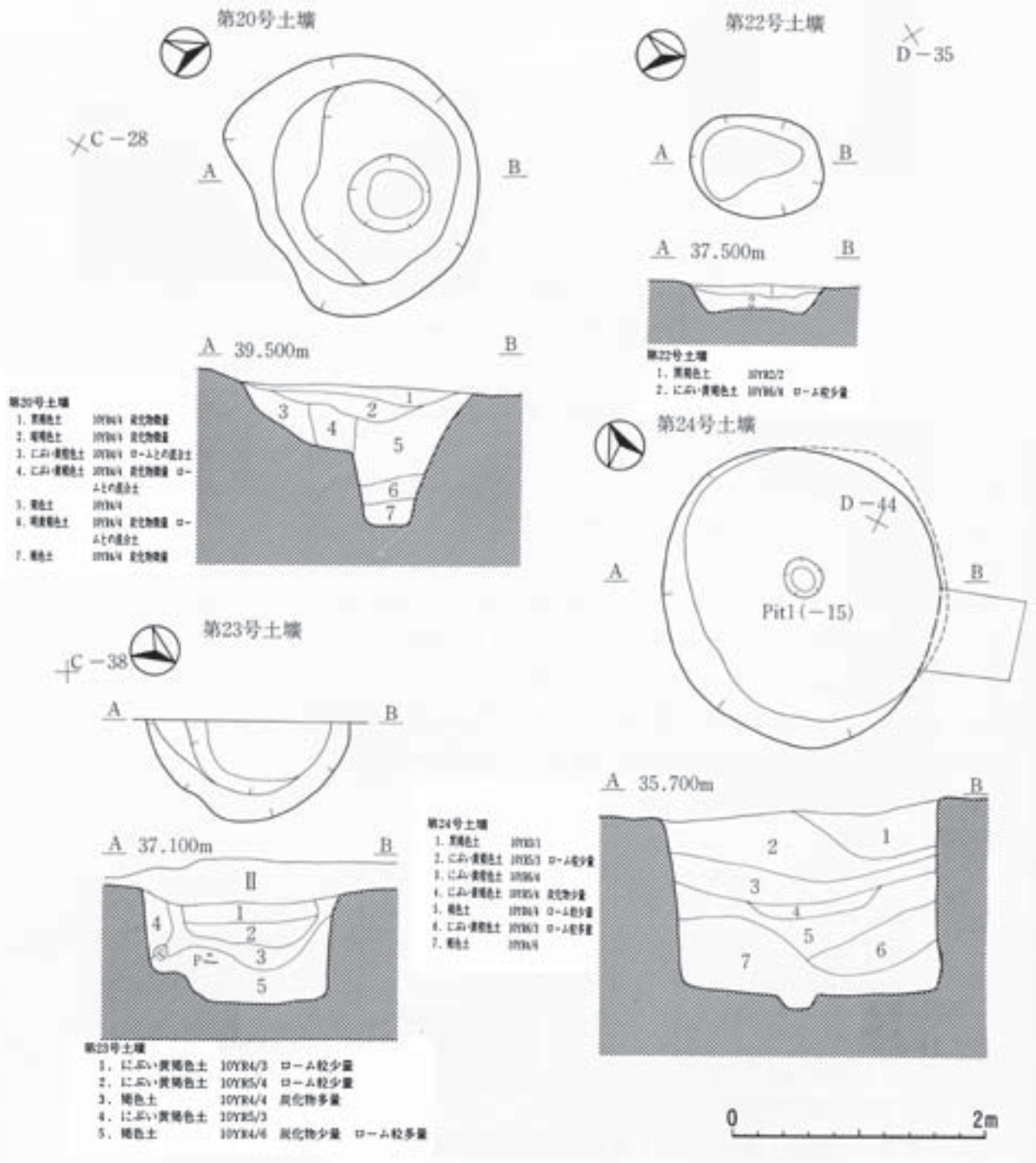
[形状・規模] 調査範囲外に続き全体像は不明である。

[壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。

[底] 底面は平坦であり、一部段差がみられる。

[堆積土] 5層に分層され、3・5層に炭化物が含まれる。

[出土遺物] 土器は4層から出土した。



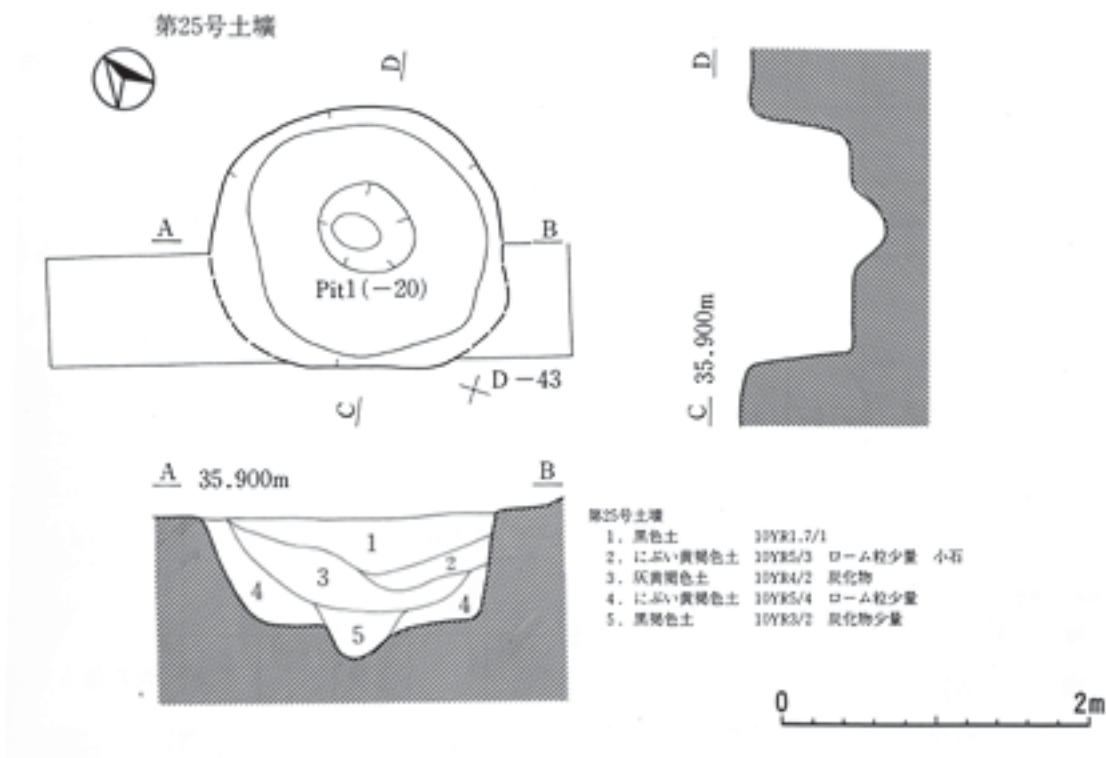
第27図 第20・22・23・24号土壌

第24号土壙（第27図）

- [位置] D・E - 43・44、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.4m × 2.25mの円形、底部で2.2m × 2.0mの円形を呈し、深さは130 ~ 150cmである。
- [壁] 断面形はほぼ垂直に立ち上がり一部フラスコ状を呈し、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 7層に分層され、4層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 土器は2層から出土している。

第25号土壙（第28図）

- [位置] D・E - 43、第 層上面で黒色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で1.9m × 1.7mの円形、底部で1.5m × 1.5mの円形を呈し、深さは60 ~ 70cmである。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 5層に分層され、3・5層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 土器は2・3層から出土した。



第28図 第25号土壙

第27号土壙(第29図)

- [位置] D - 14・15、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 調査範囲外に続き不明であるが、推定で開口部で1.2m × 1.0mと推測される。
- [壁] 断面形は上部が開く形で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦である。
- [堆積土] 5層に分層され、各層に炭化物が含まれる。
- [出土遺物] 出土していない。

第28号土壙(第29図)

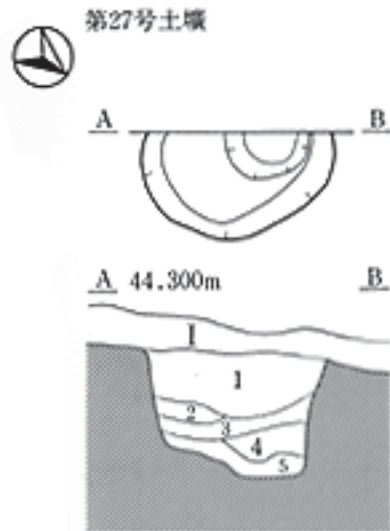
- [位置] D - 14・15、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.1m × 2.1mの円形、底部で2.4m × 2.4mの円形を呈し、深さは230cmである。
- [壁] 断面形はフラスコ状を呈し、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 11層に分層され、2・3・5・11層に炭化物が含まれる。ロームとの混合土である。
- [出土遺物] 土器は9層から1片出土した。

第29号土壙(第29図)

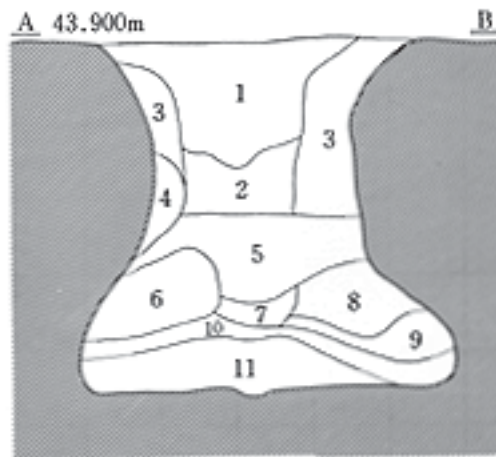
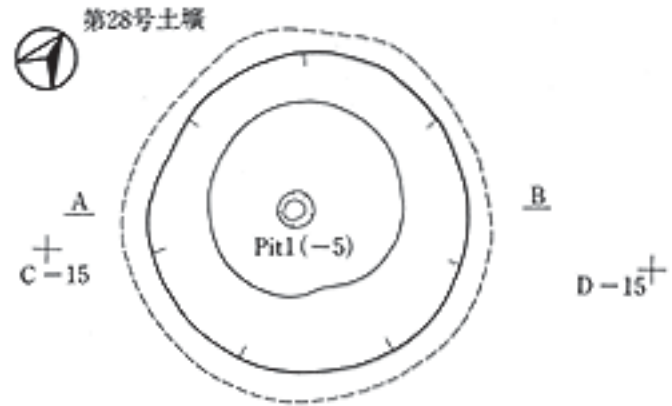
- [位置] D・E - 14・15、第 層上面で異色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.7m × 2.8mの円形、底部で3.1m × 3.1mの円形を呈し、深さは240～250cmである。
- [壁] 断面形はフラスコ状を呈し、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基がみられる。
- [堆積土] 11層に分層され、4・5・9・11層に炭化物が含まれる。ロームとの混合土である。
- [出土遺物] 土器は9層から1片出土した。

第30号土壙(第30図)

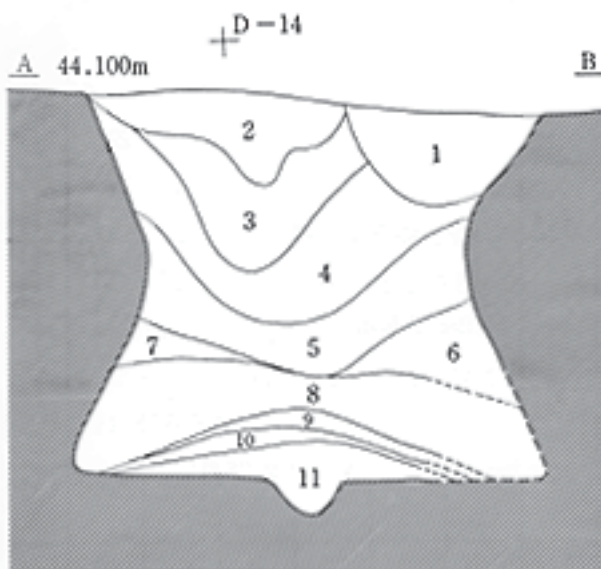
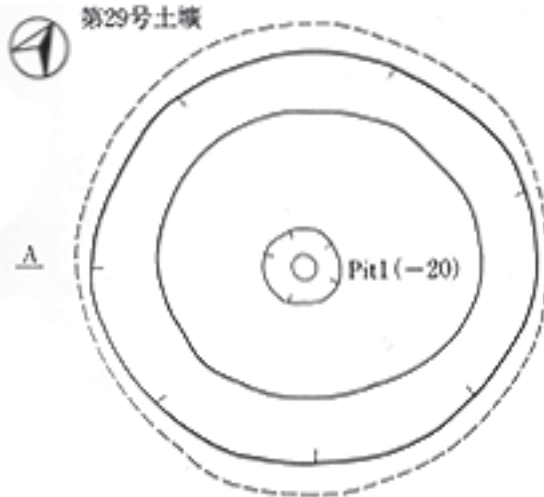
- [位置] D - 45、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部で2.9m × 2.5mの不整円形、底部で2.6m × 2.2mの不整円形を呈し、深さは140である。
- [壁] 断面形はフラスコ状で、しまりは強い。
- [底] 底面は平坦であり、中央にピット1基と放射状の水抜き施設と考えられる溝6本がみられる。
- [堆積土] 5層に分層される。
- [出土遺物] 土器は2層から円筒上層b式土器、円筒下層d₂式土器が出土した。



- 第27号土壌
- | | | | |
|------------|---------|-------|--------|
| 1. 黒褐色土 | 10YR2/3 | 炭化物微量 | ローム粒少量 |
| 2. にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | ローム | 小石 |
| 3. 暗褐色土 | 10YR3/3 | 炭化物微量 | ローム粒少量 |
| 4. 褐色土 | 10YR4/4 | 炭化物微量 | ローム粒少量 |
| 5. 黄褐色土 | 10YR5/4 | 炭化物微量 | |



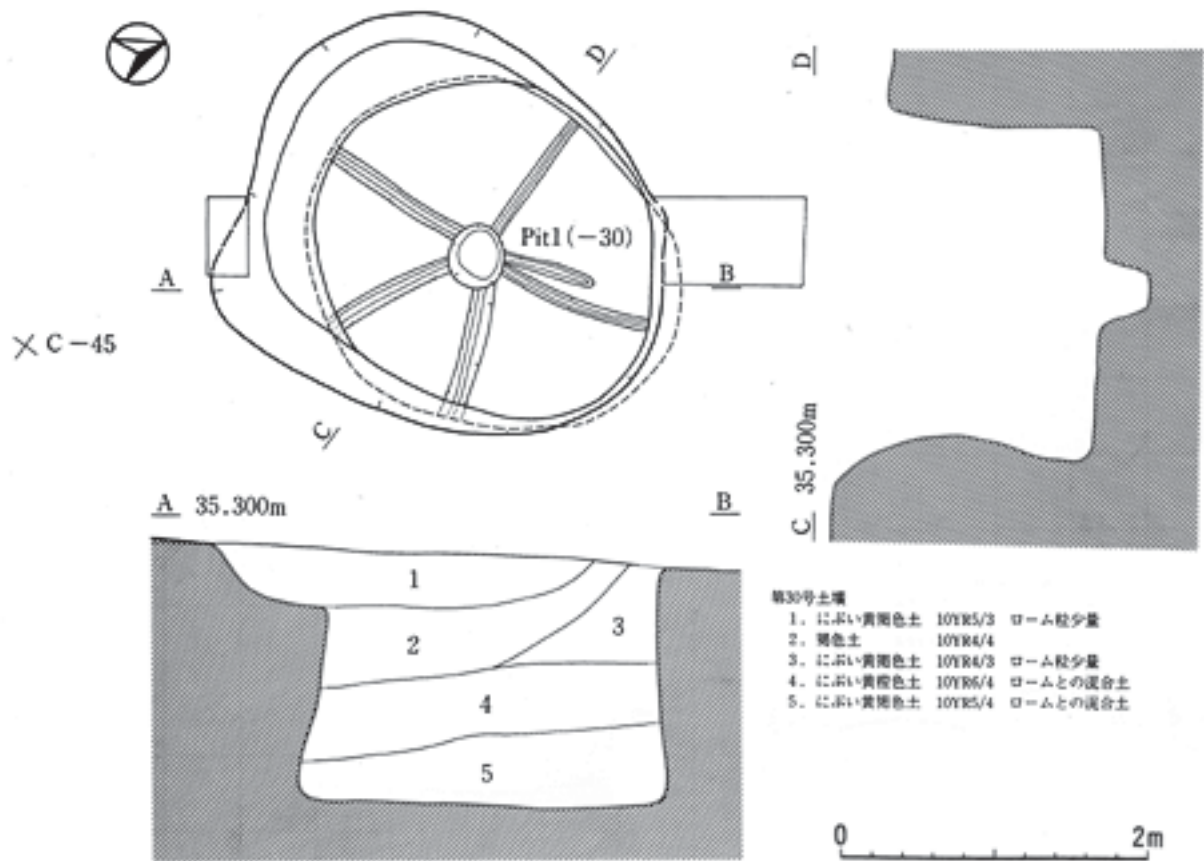
- 第28号土壌
- | | | |
|-------------|---------|----------|
| 1. 黒褐色土 | 10YR2/3 | ローム粒少量 |
| 2. 暗褐色土 | 10YR3/3 | 炭化物少量 |
| 3. にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | 炭化物微量 |
| 4. 浅黄褐色土 | 10YR6/4 | ロームとの混合土 |
| 5. 黄褐色土 | 10YR5/4 | 炭化物少量 |
| 6. にぶい黄褐色土 | 10YR4/4 | ロームとの混合土 |
| 7. 黒褐色土 | 10YR2/3 | |
| 8. にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | ロームとの混合土 |
| 9. 暗褐色土 | 10YR3/4 | ロームとの混合土 |
| 10. にぶい黄褐色土 | 10YR5/4 | |
| 11. にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | 炭化物微量 |



- 第29号土壌
- | | | |
|------------|---------|----------|
| 1. 黒褐色土 | 10YR2/3 | |
| 2. 暗褐色土 | 10YR3/3 | |
| 3. 黒褐色土 | 10YR2/2 | |
| 4. にぶい黄褐色土 | 10YR4/4 | 炭化物少量 |
| 5. にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | 炭化物少量 |
| 6. にぶい黄褐色土 | 10YR5/4 | ロームとの混合土 |
| 7. 明黄褐色土 | 10YR6/6 | ロームとの混合土 |
| 8. 黄褐色土 | 10YR5/5 | ロームとの混合土 |
| 9. にぶい黄褐色土 | 10YR4/4 | 炭化物微量 |
| 10. 黄褐色土 | 10YR5/5 | 炭化物微量 |
| 11. 褐色土 | 10YR4/4 | 炭化物微量 |

0 2m

第29図 第27・28・29号土壌



第30図 第30号土壌

3 溝状遺構

第1号溝状遺構（第31図）

[位置] D - 24、第 層上面で黒色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 直線状を呈する。最大幅60cm全長2.6m最深部60cmである。東側が若干浅くなっている。

[堆積土] 3層に分層される。

[出土遺物] なし。

第2号溝状遺構（第31図）

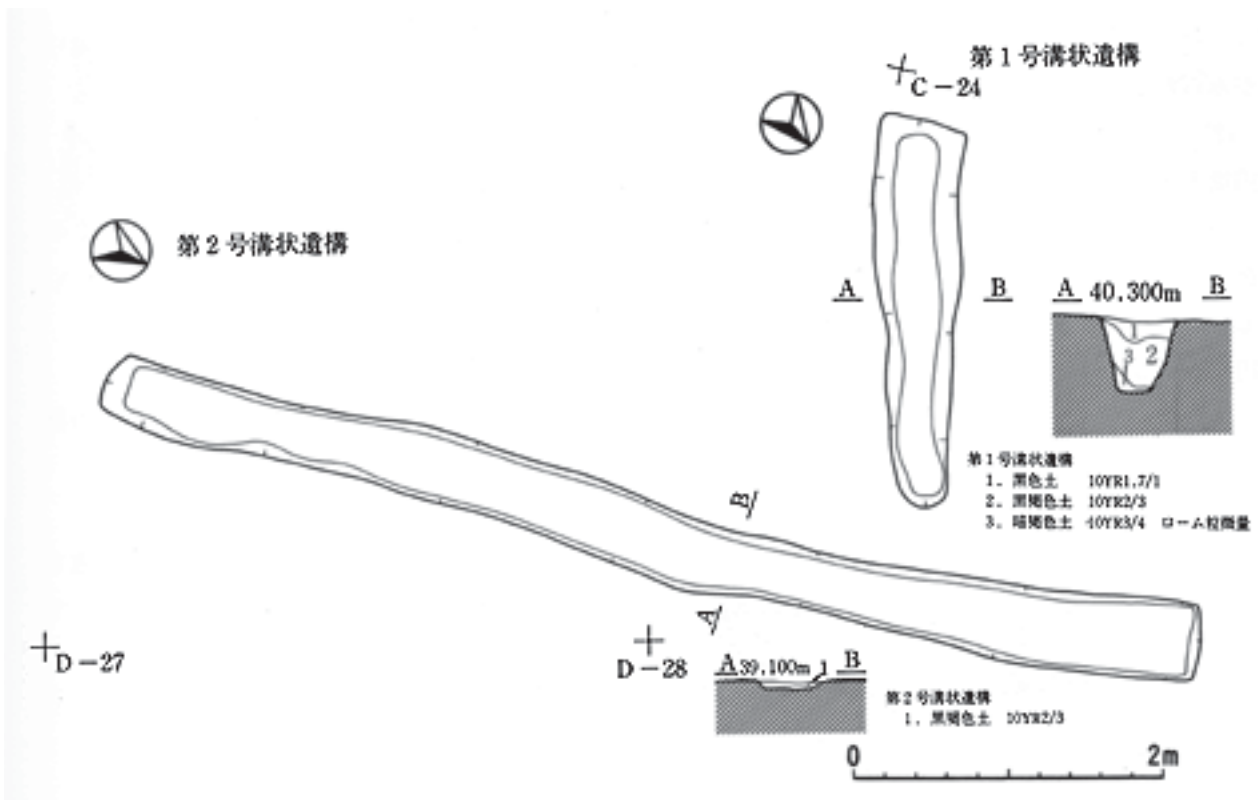
[位置] D - 27・28、E - 28、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 直線状を呈する。最大幅50cm全長7.3m最深部10cmである。

[堆積土] 1層に分層される。

[出土遺物] なし。



第31図 第1・2号溝状遺構

第2節 出土遺物

今回の調査で出土した土器は、縄文時代早期から中期末まで及ぶが、縄文時代前期後半の土器が大部分を占めている。平安時代の土師器・須恵器はほとんど第1号住居跡堆積土内からの出土である。

1 土師器・須恵器

甕2点の器面調整は、1点は口縁部の内外面が横方向のナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリで、内面は横のヘラナデである。

坏8点は、いずれもロクロによる整形であり切り離し方法は回転系切りである。すべて内面の再調整が行われていない。

須恵器は長頸壺の肩部、底部、胴部の破片が出土している。

2 土器

(1) 群 縄文時代早期の土器 (第35図3)

口縁部から胴部にヘラ状工具による条痕がみられる。

(2) 群 円筒下層式後半に比定されるもの

円筒下層d₁式 (第33図7)

深鉢形を呈し、口縁部文様帯の幅が狭く、撚糸押圧による施文がみられ、胴部との区画に隆帯を施し隆帯に刻目がみられる。

円筒下層d₂式 (第32図1・3～7、第33図2・4・7～10、第34図1、第35図1・4・8、第36図1～4)

いずれも深鉢形を呈し、平口縁と波状口縁がみられる。口縁文様帯には撚糸押圧による施文が太くな

り、縦に直交する押圧もみられ、口縁が少し外反するものもみられる。垂下隆帯や短い隆帯の貼り付けがみられる。

(2) 群1類 円筒上層式に比定されるもの

円筒上層a式に比定されるもの(第33図3、第35図7、第36図5~7)

いずれも深鉢形を呈し、口縁部文様帯に太い粘土紐の隆帯を貼り付けている。太い粘土紐には撚糸の押圧が施されている。この部位には地文縄文は施されず、鋸歯状の幾何学的な文様が押圧施文されている。突起部から垂下する橋状把手がみられるものもある。

円筒上層b式に比定されるもの(第33図11)

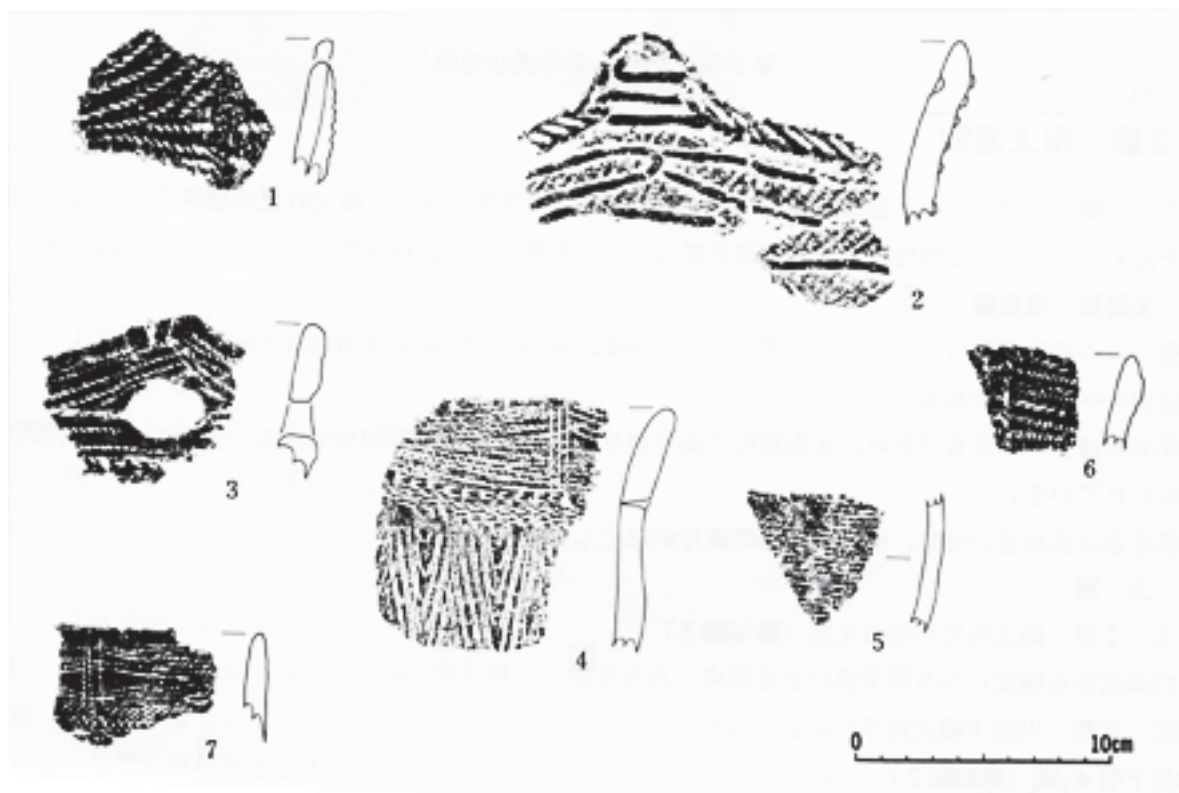
隆帯が複雑になり、隆帯によって区画された内部に撚糸圧痕文を平行に数条施し、内部に馬蹄形の撚糸圧痕を施している。

(3) 群2類 大木7式土器に比定されるもの(第33図1)

口唇部に縄文の圧痕をめぐらし、口縁部文様帯には、2条の平行の押圧縄文と弧状の押圧縄文が施され細い隆起帯に縦に刻目状圧痕、胴部には単節の羽状縄文がみられる。器形は頸部から外に張り出している。

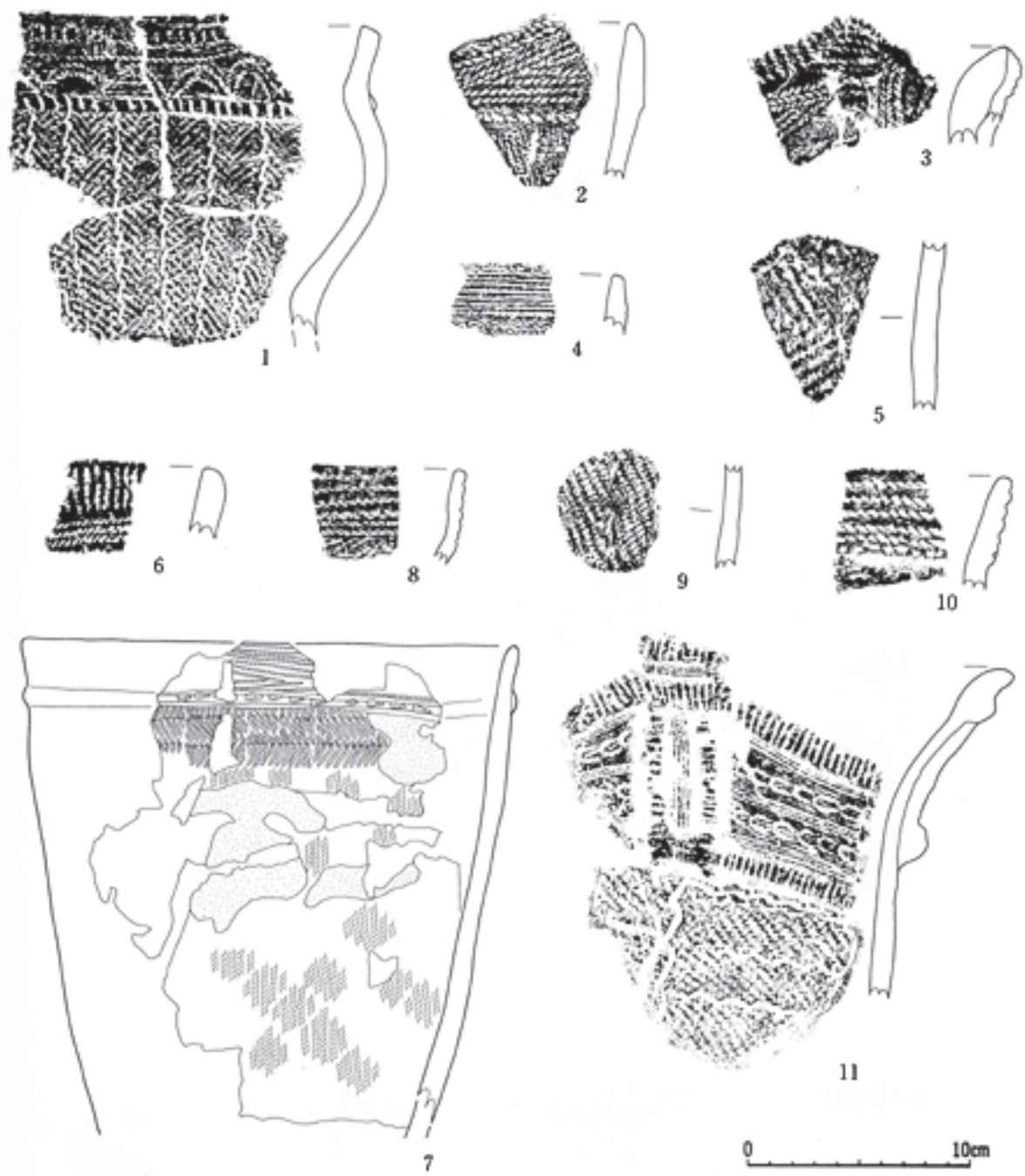
(4) 群3類 円筒上層d式に比定されるもの(第32図2)

口唇部文様帯に簡素化された粘土紐の貼り付けを施し、口縁頸部文様帯が胴部に広がっている。



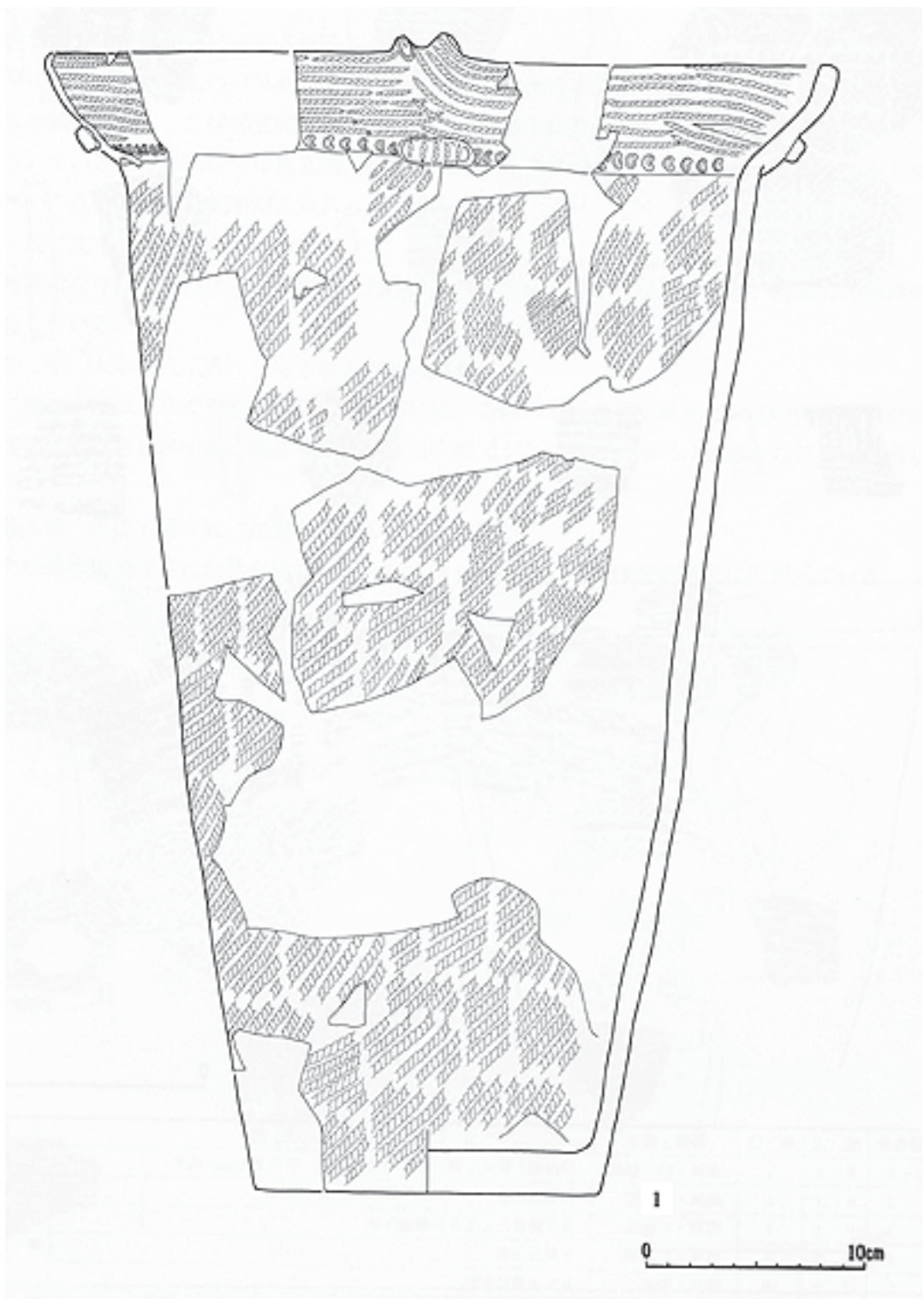
| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 |
|------|----|----|--------|--------------------------|----|------|
| 32-1 | 1土 | 3 | 深鉢・口縁部 | 垂下隆帯、LR側面圧痕 | 群 | 45 |
| 2 | 2土 | 1 | 深鉢・口縁部 | LR横位回転、粘土紐貼付 | 群 | 20 |
| 3 | 2土 | 1 | 深鉢・口縁部 | L側面圧痕 | 群 | 21 |
| 4 | 2土 | 4 | 深鉢・口縁部 | 口縁部L側面圧痕、頸部半截管刺突、胴部絡条体回転 | 群 | 22 |
| 5 | 2土 | 床 | 深鉢・胴部 | 絡条体縦位回転(L) | 群 | 15 |
| 6 | 3土 | 5 | 深鉢・口縁部 | 列点刺突 | 群 | 38 |
| 7 | 4土 | 1 | 深鉢・口縁部 | R側面圧痕 | 群 | 52 |

第32図 遺構内出土遺物(1)



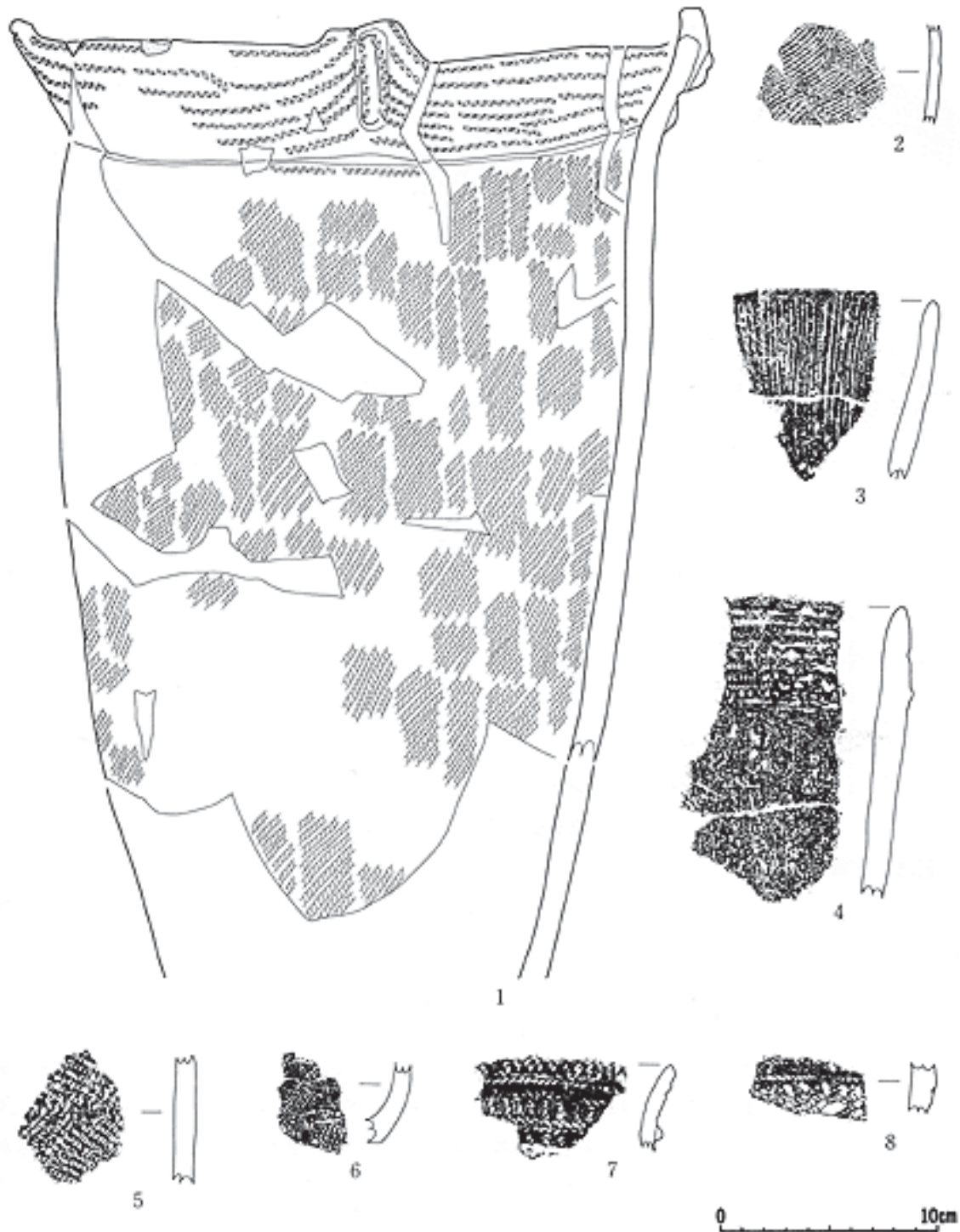
| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 |
|------|------|----|---------|---------------------------------|----|------|
| 33-1 | 8 土 | 1 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部L側面圧痕、頸部刻目状圧痕、胴部単節羽状縄文 | 群 | 1 |
| 2 | 8 土 | 1 | 深鉢・口縁部 | R側面圧痕 | 群 | 2 |
| 3 | 9 土 | 1 | 深鉢・口縁部 | 垂下隆帯、LとRの側面圧痕 | 群 | 46 |
| 4 | 11 土 | 5 | 深鉢・口縁部 | R側面圧痕 | 群 | 28 |
| 5 | 12 土 | 床 | 深鉢・胴部 | RL横位回転 | | 54 |
| 6 | 13 土 | 床 | 深鉢・口縁部 | R側面圧痕 | 群 | 51 |
| 7 | 13 土 | 3 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部R側面圧痕、頸部刻目、胴部RL斜位回転 | 群 | |
| 8 | 15 土 | 2 | 深鉢・口縁部 | RL側面圧痕 | 群 | 43 |
| 9 | 16 土 | 1 | 深鉢・胴部 | LR横位回転（一部RL縦位回転） | 群 | 26 |
| 10 | 16 土 | 5 | 深鉢・口縁部 | LR側面圧痕 | 群 | 23 |
| 11 | 17 土 | 床 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部垂下隆帯・爪形圧痕、胴部RL結節横位回転、R結節縦位回転 | 群 | 61 |

第33図 遺構内出土遺物(2)



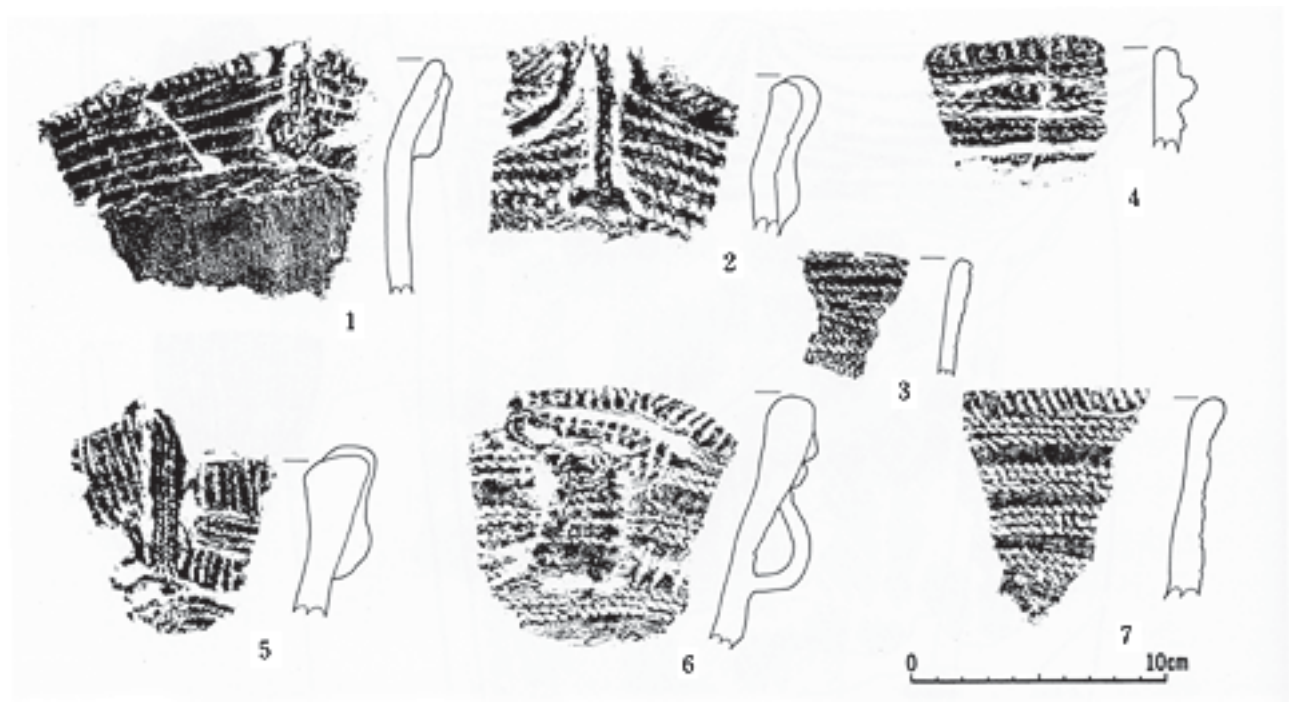
| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 |
|--------|------|----|-------|------------------------|----|------|
| 34 - 1 | 20 土 | 7 | 深鉢 | 口縁部R側面圧痕、頸部刻目、胴部LR横位回転 | 群 | |

第 34 図 遺構内出土遺物 (3)



| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 |
|--------|------|----|---------|-------------------------|----|------|
| 35 - 1 | 20 土 | 7 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部垂下隆帯、LR側面圧痕、胴部LR横位回転 | 群 | |
| 2 | 21 土 | 1 | 深鉢・胴部 | LR横位回転 | | 70 |
| 3 | 22 土 | 1 | 口縁部 | 条痕 | 群 | 12 |
| 4 | 22 土 | 1 | 深鉢・口～胴部 | 口縁部R側面圧痕、胴部摩滅により不明 | 群 | 9 |
| 5 | 28 土 | 9 | 深鉢・胴部 | 羽状縄文 | | 13 |
| 6 | 29 土 | 9 | 深鉢・底部 | 絡条体縦位回転 | | 14 |
| 7 | 30 土 | 2 | 深鉢・口縁部 | 短線状側面圧痕 | 群 | 7 |
| 8 | 30 土 | 3 | 深鉢・頸部 | 刺突または原体での刺突状列点 | 群 | 8 |

第 35 図 遺構内出土遺物 (4)



| 図版番号 | 地点 | 層位 | 器種・部位 | 外面の文様 | 分類 | 整理番号 |
|--------|--------|----|--------|---------------------------|----|------|
| 36 - 1 | D - 28 | | 深鉢・口縁部 | 口縁部R側面圧痕、垂下隆帯（刺突）、胴部絡条体回転 | 群 | 62 |
| 2 | D - 30 | | 深鉢・口縁部 | LR側面圧痕、垂下隆帯 | 群 | 73 |
| 3 | E - 46 | | 深鉢・口縁部 | R側面圧痕 | 群 | 66 |
| 4 | C - 26 | | 深鉢・口縁部 | 垂下隆帯、LR側面圧痕 | 群 | 72 |
| 5 | E - 39 | | 深鉢・口縁部 | RとLの側面圧痕、垂下隆帯 | 群 | 65 |
| 6 | D - 31 | | 深鉢・口縁部 | LR側面圧痕、橋状把手 | 群 | 63 |
| 7 | D - 31 | | 深鉢・口縁部 | LR側面圧痕 | 群 | 64 |

第36図 遺構外出土遺物

3 石器・石製品

剥片石器 12点、礫石器 20点、石製品 1点が出土した。一般的な名称を用いて分類し、計測表は遺構内、遺構外出土のものを一括して第4表で表示する。なお、欠損品の計測値は残存部の数値である。

(1) 剥片石器

石 鏃（第37図1・3、第38図3）

3点出土した。2土の37 - 1は尖基無茎鏃で両側縁に調整を施し、表裏の中央部に主要剥離面が残っている。11土の37 - 3は無茎鏃で少し丸みを帯びた二等辺三角形を呈している。基部は若干挟れている。主に背面を調整しており腹面は粗雑である。表採の38 - 3は尖基有茎鏃で茎部にピッチ痕がみられ、先端部には錐として使用されたと思われる磨滅によるくびれができています。

石 槍（第38図1）

1点出土した。基部は欠失している。両側縁を調整しており背面は全面に及んでいる。背面中央付近に階段状の剥離が見られる。腹面は中央部に主要剥離面を大部分残している。

石 匙（第37図5・9）

2点出土した。11土の37 - 5は、つまみ部付近のみの残存である。遺構外の37 - 9は、完形品で背面に全面調整が施され、腹面にはつまみ部を除き大部分主要剥離面を残している。

石 篋（第38図2）

1点出土した。短冊型の完形品である。表裏とも全面に調整が施されている。

不定形石器（第37図2・4・6～8）

5点出土した。2土の37 - 2は、剥片の両側縁に連続した調整を施している。20土の37 - 4は、周縁部に不連続の粗雑な調整をしている。13土の37 - 6は、右側縁部に階段状の剥離が見られ、左側縁部には刃部として使用された可能性がある鋭利な刃を作出している。遺構外の37 - 8は両側縁に急角度の刃部を作出しており、基部の断面には背面から加撃された点が残っている。また右側縁には背面にも調整が見られる。37 - 7は錐状の刃部を作出しており石錐の可能性がある。さらに周縁部には石匙状の調整を施しており、ヒンジを呈する折損部にも、微細剥離が見られる。

（2）礫石器

磨製石斧（第38図4～7）

4点出土した。全て遺構外からの出土である。完形品2点、基部欠損1点、基部のみ1点である。

閃緑岩を素材としている38 - 7は、原石を打ち欠いてある程度成形した後、敲打により角を取り去り、仕上げは磨き調整を施している。刃部は鋭角ではなく丸みを帯びている。凝灰岩を素材としている38 - 5は調整のための擦痕がみられ、刃部は片刃に近い形状で、刃先には使用痕と思われる摩滅した筋状の擦痕がみられる。この石斧は斧ではなく手斧として使用された可能性が高いと思われる。38 - 4は基部が欠失している。器面はざらざらして刃先には使用痕と思われるつぶれがみられる。38 - 6は基部で器面には敲打痕が一部に見られるほかは磨き調整を施している。折損面を観察すると横方向からの力で折れたことがわかる。

半円状扁平打製石器（第38図8、第39図1・2、第40図1）

4点出土した。3土の39 - 1は薄手の礫を素材とし、3辺の周縁部を両側から打ち欠いて刃部を作出している。13土の39 - 2は、欠損品で安山岩の薄手の礫を素材とし、周縁部を両側から打ち欠いて刃部を作出している。刃部には一部擦痕がみられる部分もある。遺構外出土の2点はいずれも欠損品で周縁部に刃部を作出している。

磨石（第39図6、第40図2・3）

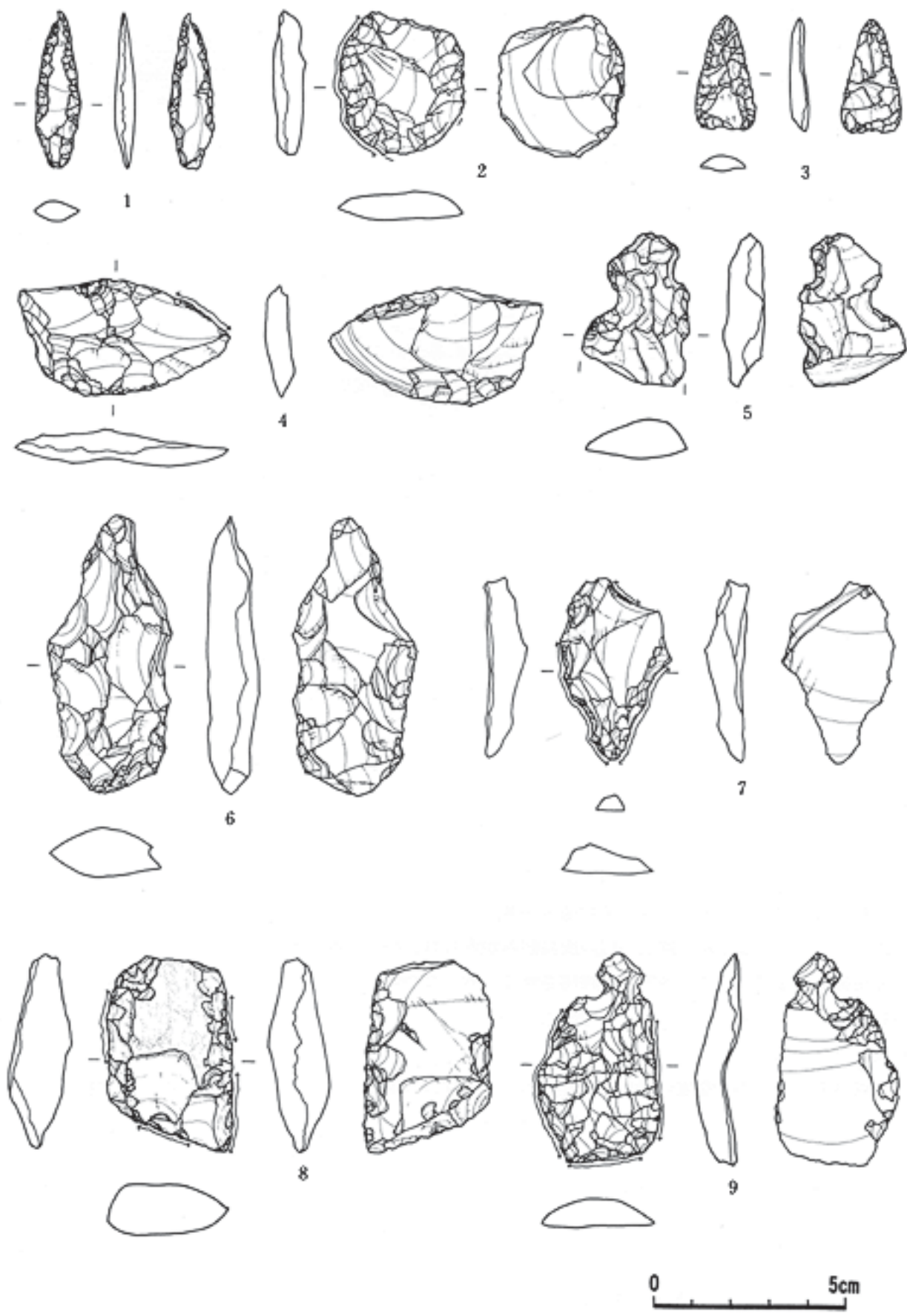
3点出土した。素材を敲き調整によって成形し丸みを帯びた方を稜として機能面はその反対側にある。なかには、39 - 6のように断面が三角形の礫を素材としその一稜部を機能面としているものもある。

凹石（第39図3～5・7・8、第40図4～8）

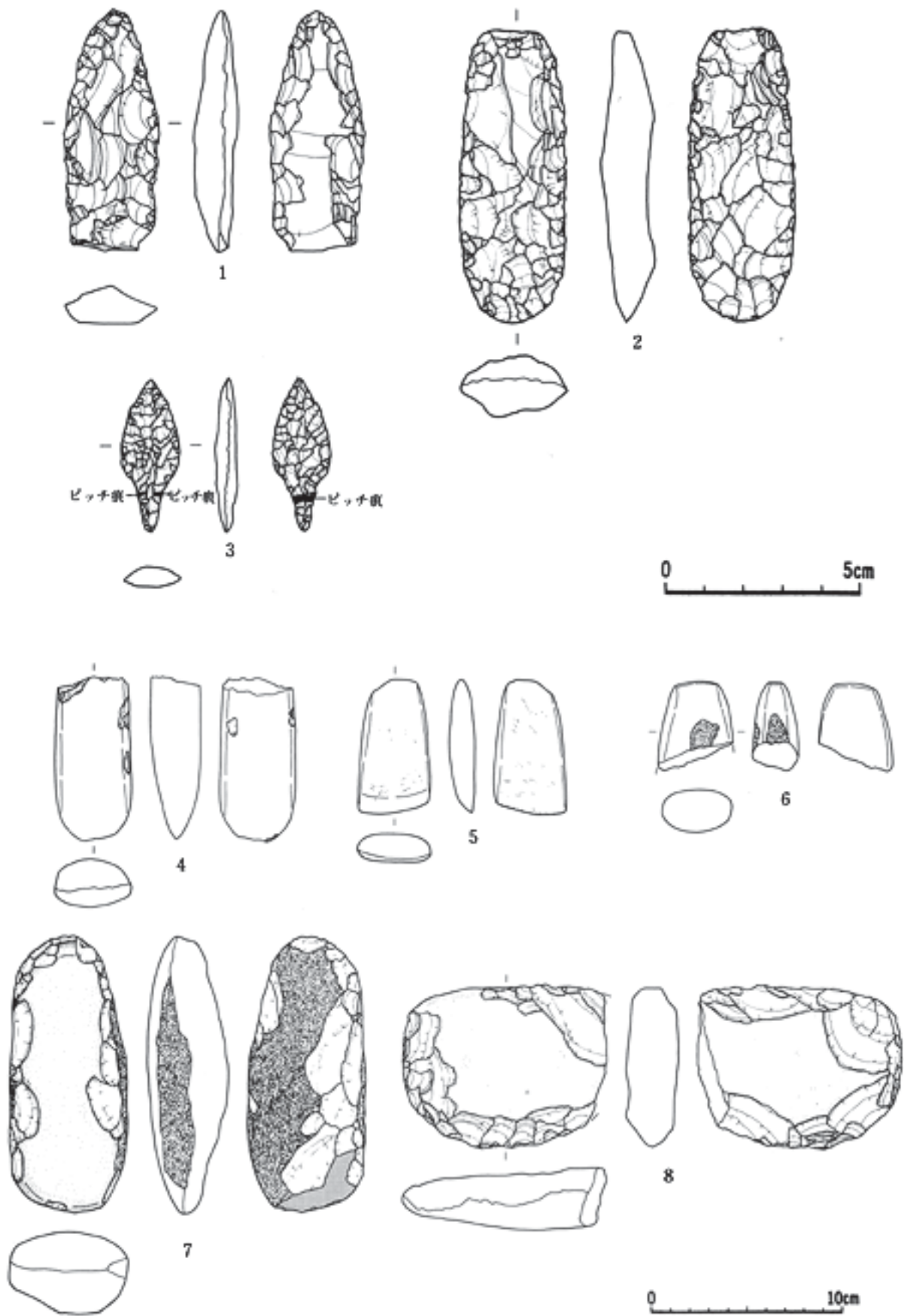
10点出土した。ほとんど礫面の広い面に凹みがみられ、一つの面に丸い礫には1～2つ、細長いものには長軸に沿って2～3つの凹みが作出されている。なかには40 - 7のように凹みの反対側の面に筋状の刻みをもつものもある。

石製品（第39図3）

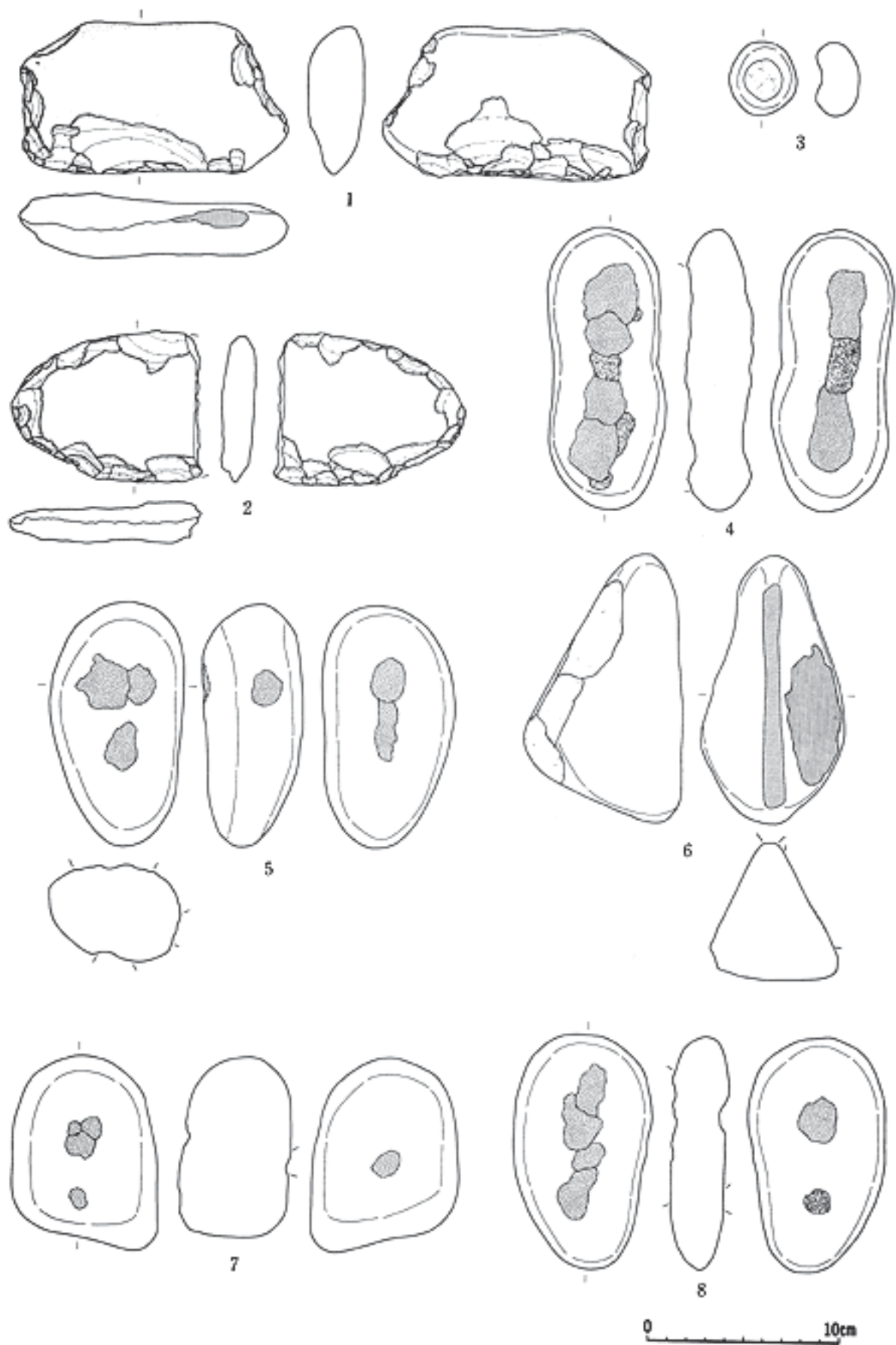
1点出土した。小さな丸い礫を使用し、広い面の片面を削って抉るように凹みをつけている。



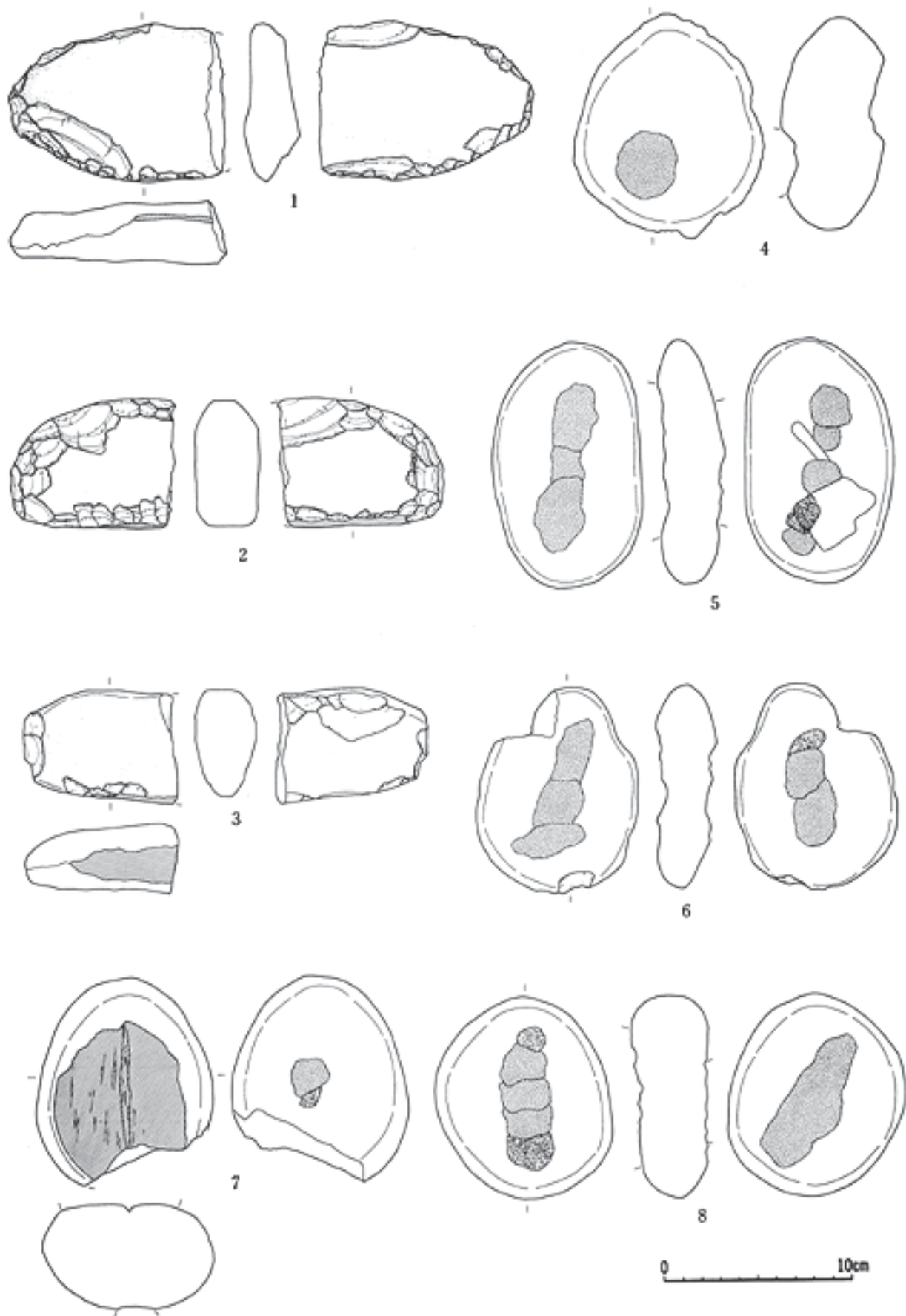
第 37 図 出土遺物（石器）



第38図 出土遺物(石器)



第39図 出土遺物(石器)



第40図 出土遺物(石器)

第4表 出土石器計測表

| 図版番号 | 出土地点 | 層位 | 最大計測値 | | | | 石質 | 器種 | 整理番号 | 備考 |
|------|------|----|--------|-------|-------|--------|-----|-----|------|------|
| | | | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | | | | |
| 37-1 | 2土 | 2 | 41.5 | 12.0 | 5.0 | 2.1 | 頁岩 | 石鏃 | 25 | |
| 2 | 2土 | 1 | (38.0) | 33.5 | 8.5 | (10.8) | 頁岩 | 不定形 | 26 | |
| 3 | 11土 | 4 | 30.0 | 16.0 | 5.5 | 2.0 | 頁岩 | 石鏃 | 27 | |
| 4 | 20土 | 2 | 57.0 | 31.5 | 9.0 | 14.0 | 頁岩 | 不定形 | 29 | |
| 5 | 11土 | 4 | (41.0) | 18.5 | 11.0 | (9.7) | 頁岩 | 石匙 | 28 | |
| 6 | 13土 | 4 | 74.5 | 35.5 | 14.5 | 31.6 | 頁岩 | 不定形 | 35 | |
| 7 | D-47 | | 48.5 | 29.5 | 11.5 | 10.8 | 頁岩 | 不定形 | 32 | |
| 8 | E-44 | | 51.5 | 34.5 | 16.5 | 29.9 | 頁岩 | 不定形 | 36 | |
| 9 | E-30 | | 56.5 | 33.0 | 12.0 | 14.7 | 頁岩 | 石匙 | 33 | |
| 38-1 | D-41 | | (63.0) | 25.0 | 12.0 | (17.9) | 頁岩 | 石槍 | 31 | |
| 2 | D-40 | | 77.0 | 28.0 | 16.0 | 34.6 | 頁岩 | 石篋 | 34 | |
| 3 | D-13 | 表採 | 40.5 | 10.5 | 6.0 | 2.6 | 頁岩 | 石鏃 | 30 | ピッチ痕 |
| 4 | D-28 | | (87) | 41 | 26 | (138) | 凝灰岩 | 磨斧 | | |
| 5 | E-47 | | 82 | 39 | 16 | 58 | 凝灰岩 | 磨斧 | | |
| 6 | C-27 | 表採 | (48) | (40) | 28 | (62) | 花崗岩 | 磨斧 | | |
| 7 | D-43 | | 147 | 62 | 43 | 556 | 閃緑岩 | 磨斧 | | |
| 8 | E-38 | | (109) | 87 | 33 | (410) | 安山岩 | 半扁 | | |
| 39-1 | 3土 | 2 | 142 | 81 | 35 | 512 | 安山岩 | 半扁 | | |
| 2 | 13土 | 2 | (101) | 81 | 22 | (220) | 安山岩 | 半扁 | | |
| 3 | 11土 | 3 | 39 | 36 | 23 | 34 | 安山岩 | 凹 | | |
| 4 | 4土 | 4 | 150 | 64 | 36 | 462 | 安山岩 | 凹 | | |
| 5 | 8土 | 2 | 129 | 70 | 53 | 524 | 安山岩 | 凹 | | |
| 6 | 4土 | 4 | 142 | 77 | 84 | 868 | 安山岩 | スリ | | |
| 7 | 13土 | 5 | 103 | 78 | 60 | 596 | 安山岩 | 凹 | | |
| 8 | 19土 | 3 | 125 | 73 | 31 | 344 | 安山岩 | 凹 | | |
| 40-1 | E-46 | | (116) | 85 | 34 | (392) | 安山岩 | 半扁 | | |
| 2 | D-28 | | (90) | 70 | 38 | (402) | 閃緑岩 | スリ | | |
| 3 | D-46 | | (82) | 62 | 39 | (272) | 安山岩 | スリ | | |
| 4 | D-4 | | 121 | 103 | 56 | 622 | 安山岩 | 凹 | | |
| 5 | D-22 | | 133 | 81 | 36 | 386 | 安山岩 | 凹 | | |
| 6 | E-34 | | 111 | 88 | 33 | 344 | 安山岩 | 凹 | 21 | |
| 7 | E-36 | | (112) | 95 | 57 | (606) | 安山岩 | 凹 | 22 | |
| 8 | D-30 | | 110 | 96 | 42 | 470 | 安山岩 | 凹 | | |

()は残存部の数値

第3節 小 結

1 土壌について

本遺跡で26基の土壌が検出された。平面形は円形ないし長円形である。断面形状から考えると次のように分けられる。

a類 壁が緩やかに立ち上がり、浅いナベ底状を呈するもの(9、12、22土)

b類 壁がほぼ垂直に立ち上がり筒状で、底面が平坦なもの(6、17、27土)

- c類 規模が大きく、壁が上部に開く形で、底面が平坦なもの（2、3、4土）
- d類 c類の底面にピットがみられるもの（1、7、8、11、13、15、16、23、24、25土）
- e類 フラスコ状を呈するもの（28、29、30土）
- f類 逆三角錐状を呈するもの（10、14、19、20土）

26基中a類3基、b類3基、c類3基、d類10基、e類3基、f類4基である。

土壌からの遺物の出土はみられるものの、堆積土の上部に多いため構築時期を特定することは困難であるが、数少ない床面や堆積土下部の遺物から考えると縄文時代前期後半から縄文時代中期前半と推定される。

検出された土壌のうち、c類とd類計13基がある一定の地域にまとまって確認された。これらの土壌は、八戸市鶉窪遺跡等の過去の報告例より落とし穴の可能性が考えられる。

しかし、これらの土壌と規模・形状が同様な30土は、水抜き施設とみられる溝を有する貯蔵穴の可能性が高い。また、密集して存在しているにもかかわらず各土壌間の切り合いがみられないことから一定期間内に構築されたものと考えられる。

ここで時期がほぼ同一の横内遺跡の集落の一部という仮説にたって考えると、集落として居住区域・墓域等のある種の域をもっていたと考えられる縄文時代において、これらの土壌群は、一定期間のうちに構築された貯蔵穴と考えることができる。

ただし、11土のように3層上面に疎が集中していることや、2土等の下位の層にみられる人為的な埋め戻しから墓壇の可能性も否定できない。

2 出土遺物について

群2類土器（第33図1）は、今回の調査によって出土した円筒土器と一種異なった器形と文様構成を呈する。口縁が外反し、頸部からふくらみ胴部下半にかけてすぼまる深鉢形で、口縁部文様帯の弧状の圧痕や胴部の縦位回転の文様施文から円筒土器とは考えにくく、大木式土器の影響を受けた大木7式土器に比定される土器と考えられる。同種の土器は、福島県腰巻遺跡第5号土壌に出土例が見られる。

1個体の出土ではあるが、円筒土器文化圏における大木式土器の影響を受けた土器の出土から文化の融合を考えるうえで貴重である。

また、今回の調査で11土のようにまとまって礫が出土した例は、他の土壌では見られないもののc類とd類の土壌の堆積土中に安山岩礫が含まれていた。このうち、礫石器として使用されたものは少ないが、これらの礫は遺跡まで石器の素材として搬入されたものと考えられる。

ま と め

1. 横内遺跡・横内(2)遺跡は、青森市大字合子沢字山崎に所在する遺跡であり、青森平野に突き出した丘陵にある。横内遺跡の標高は26m、横内(2)遺跡の標高は35～44mである。
2. 検出された遺構は、横内遺跡で縄文時代の竪穴式住居跡3軒、横内(2)遺跡で平安時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代の土壌26基、時期不詳の溝状遺構2基である。
3. 出土土器の時期は、横内遺跡は縄文時代早期(白浜式土器)・前期(円筒下層b・d₂式土器)・中期(最花式土器)のものがみられ、横内(2)遺跡は前期(円筒下層b・d₁・d₂式土器)・中期(円筒上層a・b・d式土器、大木7式土器)・平安時代の土師器・須恵器である。石器は、石鏃・石匙・石篋・石錐・石槍・磨石・凹石等が出土している。
4. 横内遺跡の第2号住居跡は、縄文時代前期後半に位置付けられ、県内の検出例に比べてテラス部分の占める比率が大きく貴重な資料となりえる。
5. 今回の調査により横内遺跡と横内(2)遺跡の関係について明確なことがいえないものの、同一の丘陵に立地する地形、両遺跡とも時期が似ていること、集落を構成する要素である住居・墓・貯蔵穴等関係から、両遺跡は、縄文時代前期後半から中期前半の一つの集落として考えたほうが妥当と思われる。(徳差 義男)

引用・参考文献

- | | | | |
|-----------|-------|-------|---|
| 青森県教育委員会 | 1976 | 第27集 | 千歳(13)遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1978a | 第38集 | 熊沢遺跡 |
| 〃 | 1978b | 第41集 | 三内沢部遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1980a | 第52集 | 大平遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1980b | 第55集 | 大面遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1981a | 第61集 | 表館遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1981b | 第62集 | 新納屋遺跡(2)発掘調査報告書 |
| 〃 | 1989 | 第128集 | 弥次郎窪遺跡 |
| 〃 | 1990 | 第130集 | 空沢遺跡 |
| 〃 | 1991 | 第134集 | 中野平遺跡 |
| 〃 | 1992 | 第143集 | 富ノ沢(2)遺跡 |
| 〃 | 1993 | 第147集 | 富ノ沢(2)遺跡・富ノ沢(3)遺跡 |
| 三沢市教育委員会 | 1985 | 第2集 | 根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書 |
| 〃 | 1988a | 第4集 | 根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書 |
| 〃 | 1988b | 第5集 | 根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書 |
| 青森市教育委員会 | 1979 | | 蛭沢遺跡 |
| 〃 | 1991 | 第16集 | 山吹(1)遺跡発掘調査報告書 |
| 〃 | 1994 | 第22集 | 小三内遺跡発掘調査報告書 |
| 池田 敬 | 1979 | | 青森市の大地のなりた『青森市の自然』 高校生版 |
| 江坂 輝 弥 | 1970 | | 『石神遺跡』 |
| 工藤 竹 久 | 1988 | | 縄文尖底系土器様式『縄文土器大観』 1 |
| 白鳥 良 一 | | | 前期大木式土器様式『縄文土器大観』 1 |
| 丹羽 茂 | | | 中期大木式土器様式『縄文土器大観』 1 |
| 〃 | 1981 | | 大木式土器『縄文文化の研究』 4 |
| 三宅 徹 也 | 1974 | | 青森県における円筒下層式土器群の地域展開『北奥古代文化』 6号 |
| 〃 | 1978 | | 円筒土器の概念とその崩壊『青森県立郷土館調査研究年報』 3 |
| 〃 | 1981 | | 円筒土器『縄文文化の研究』 3 |
| 〃 | 1988 | | 円筒土器下層様式『縄文土器大観』 1 |
| 三宅徹也・石岡憲雄 | 1969 | | 青森県青森市横内遺跡()『遮光器』 2号 |
| 村越 潔 | 1974 | | 『増補円筒土器文化』 |
| 〃 | | | 東北10部における石器・石製品の出現と消滅『月刊考古学ジャーナル』 2月号 No287 |

写真図版



遺跡遠景 N→S



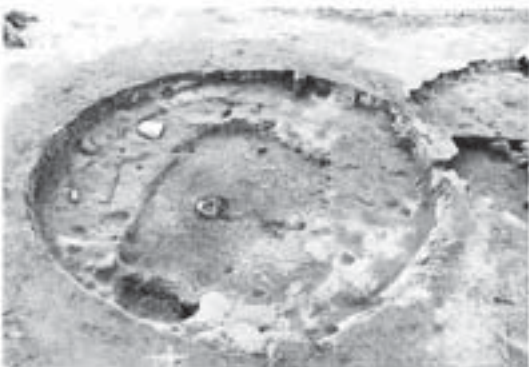
遺跡近景 W→E



遺物出土状況



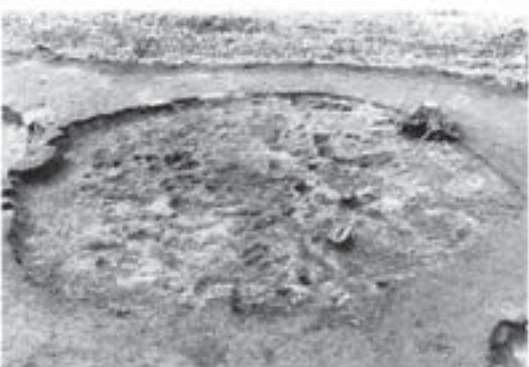
第1号住居跡



第2号住居跡完掘



第2号住居跡 炉



第3号住居跡完掘



横内遺跡全景(向こう側より2H・3H・1H)



6-1



6-2



6-3



9-1



9-2



11-1



13-13



13-14



2H



11-10



9-9

(数字は図版番号)

写真2 出土遺物

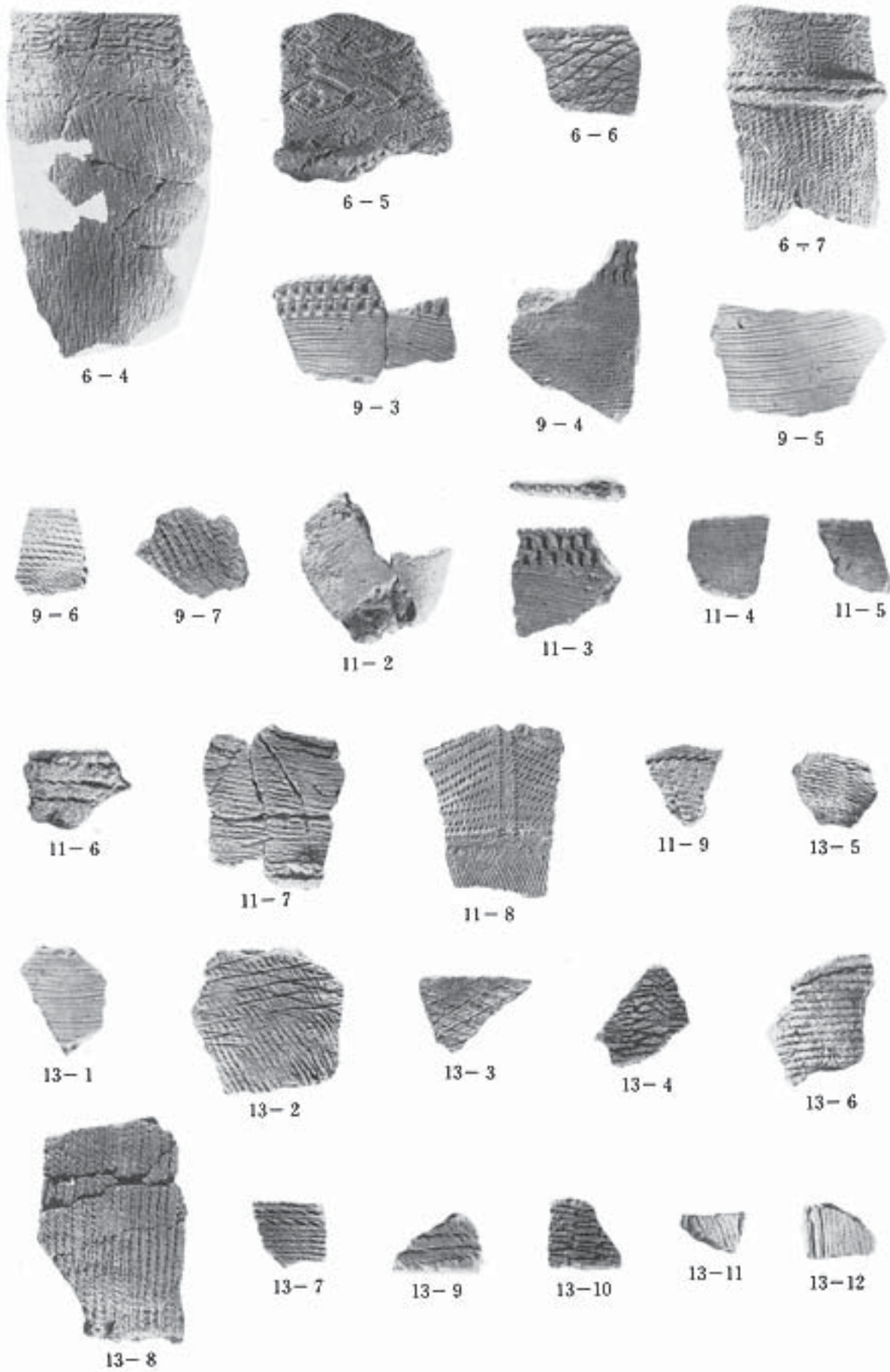


写真3 出土遺物(土器)

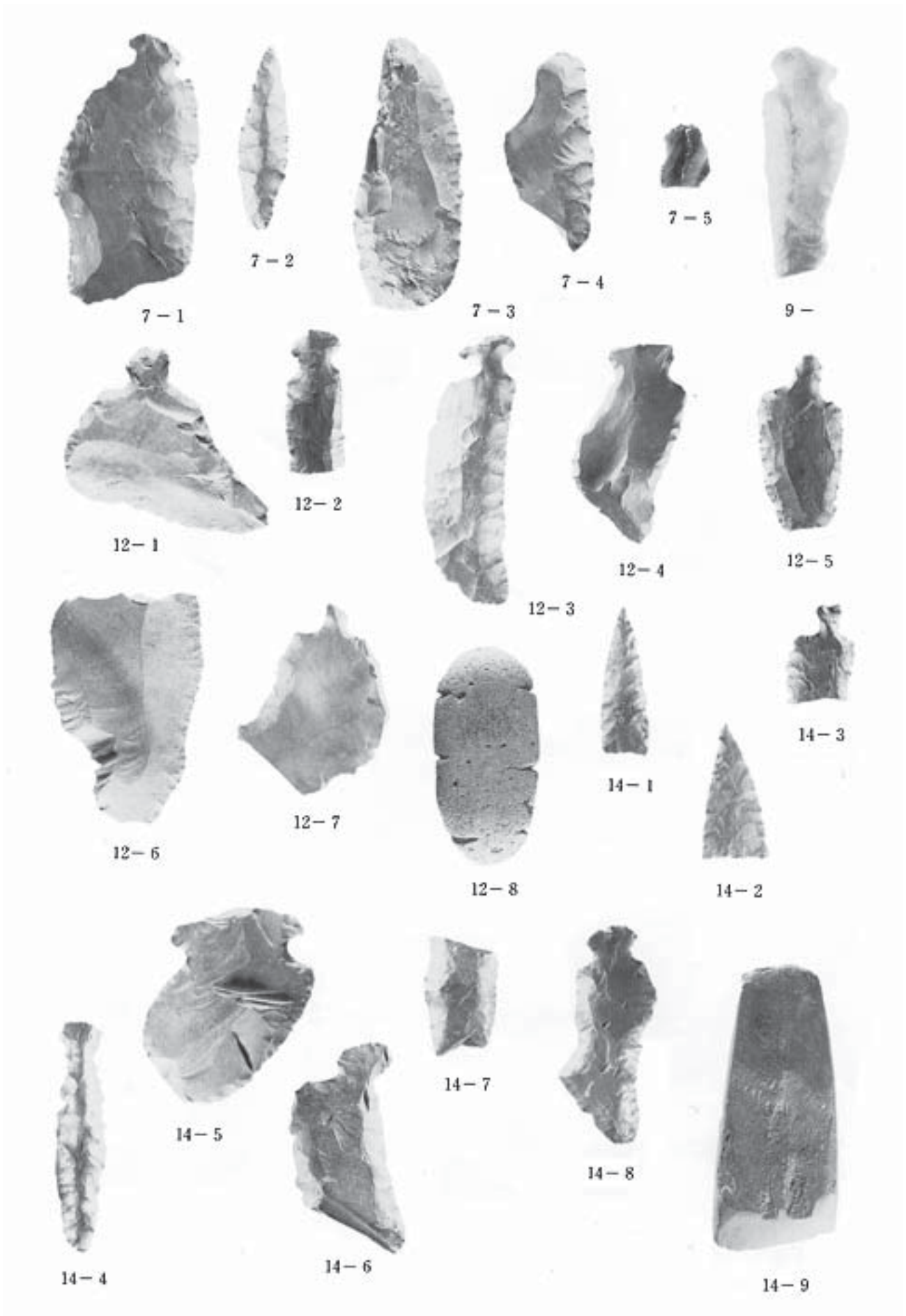


写真4 出土遺物(石器)



遺跡遠景 E→W



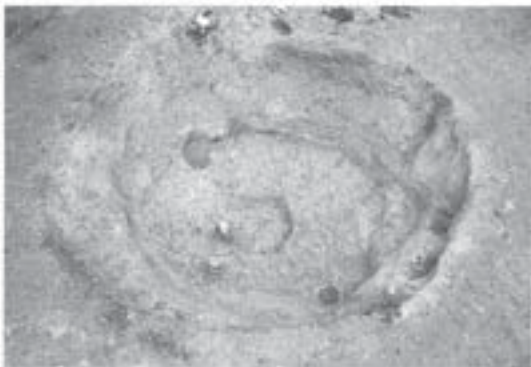
遺跡近景 S→N



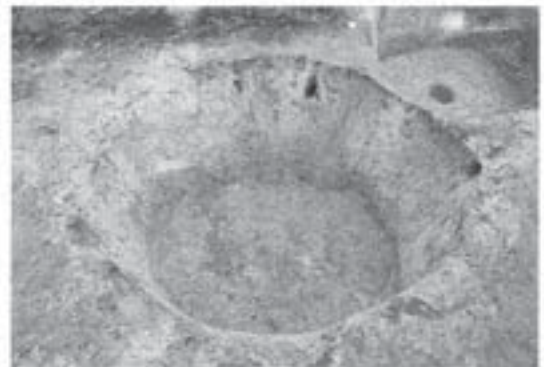
第1号住居跡完掘



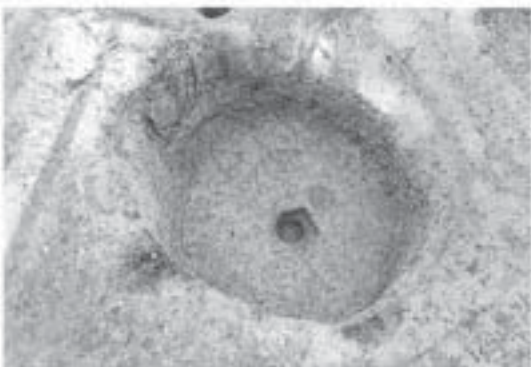
第1号住居跡カマド



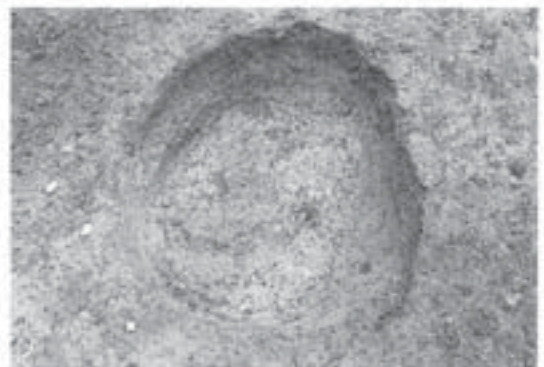
第1号土壇完掘



第3号土壇完掘



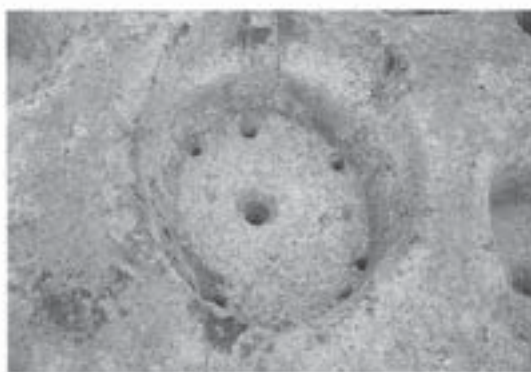
第7号土壇完掘



第12号土壇完掘



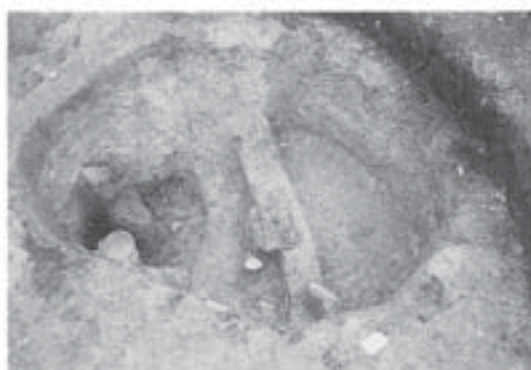
第8号土壌セクション



第8号土壌完掘



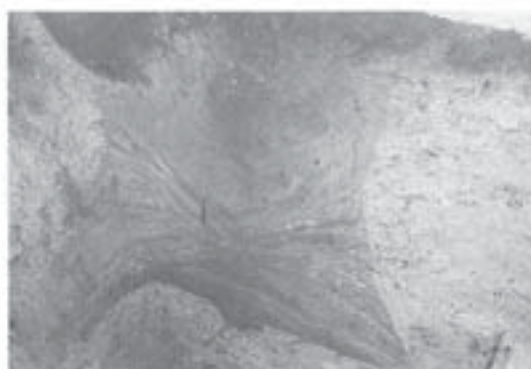
第11号土壌礫出土状況



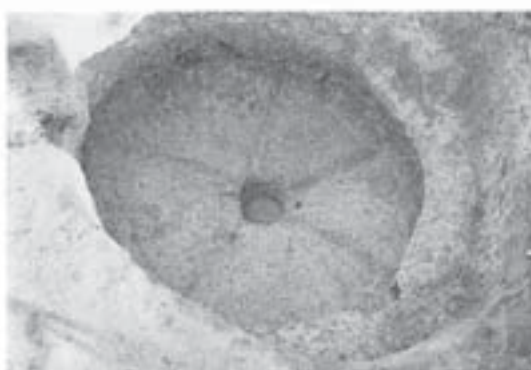
第13号土壌遺物出土状況



第28号土壌セクション



第29号土壌セクション



第30号土壌完掘



土壌群

写真6 横内(2)遺跡

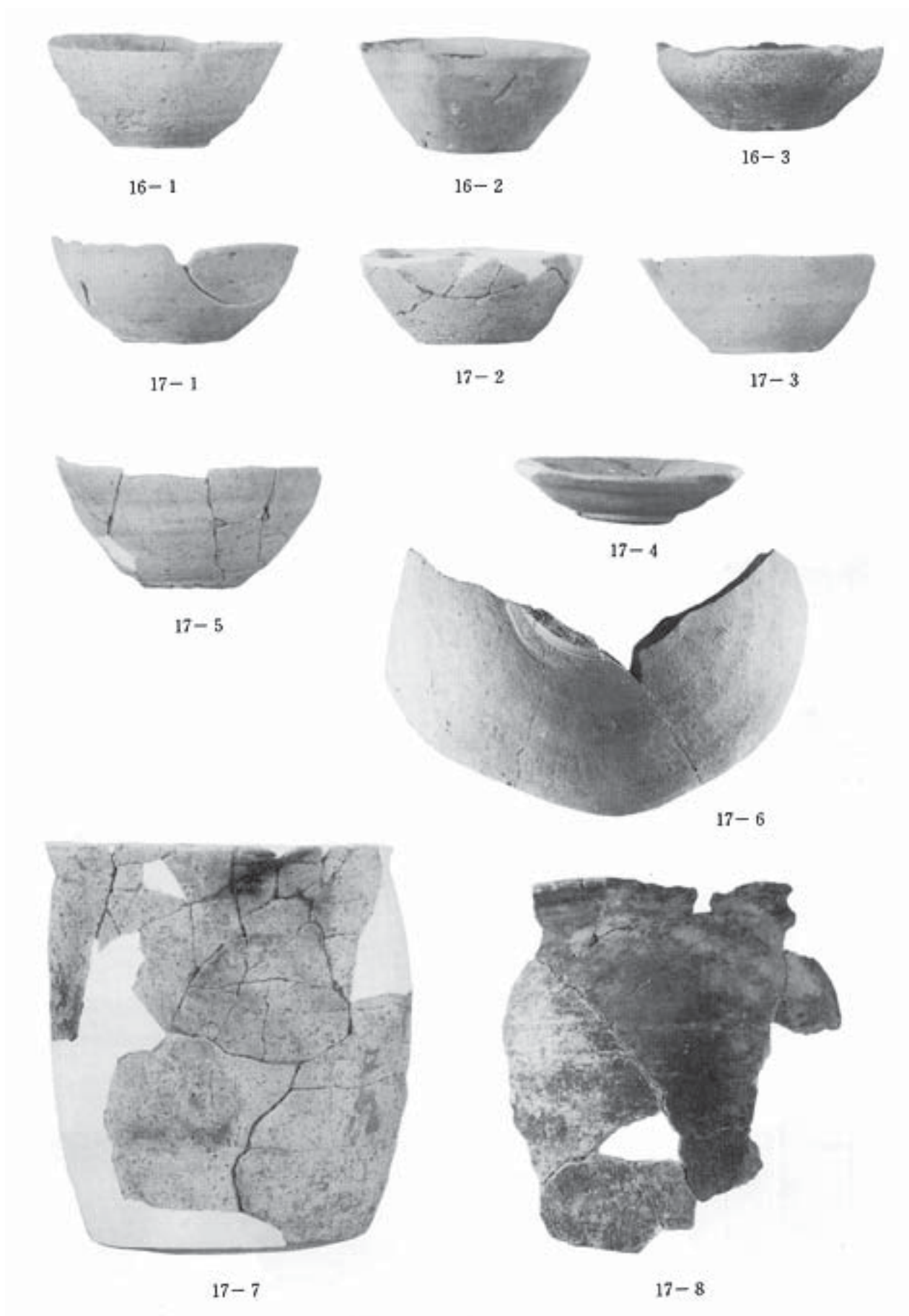


写真7 第1号住居出土遺物

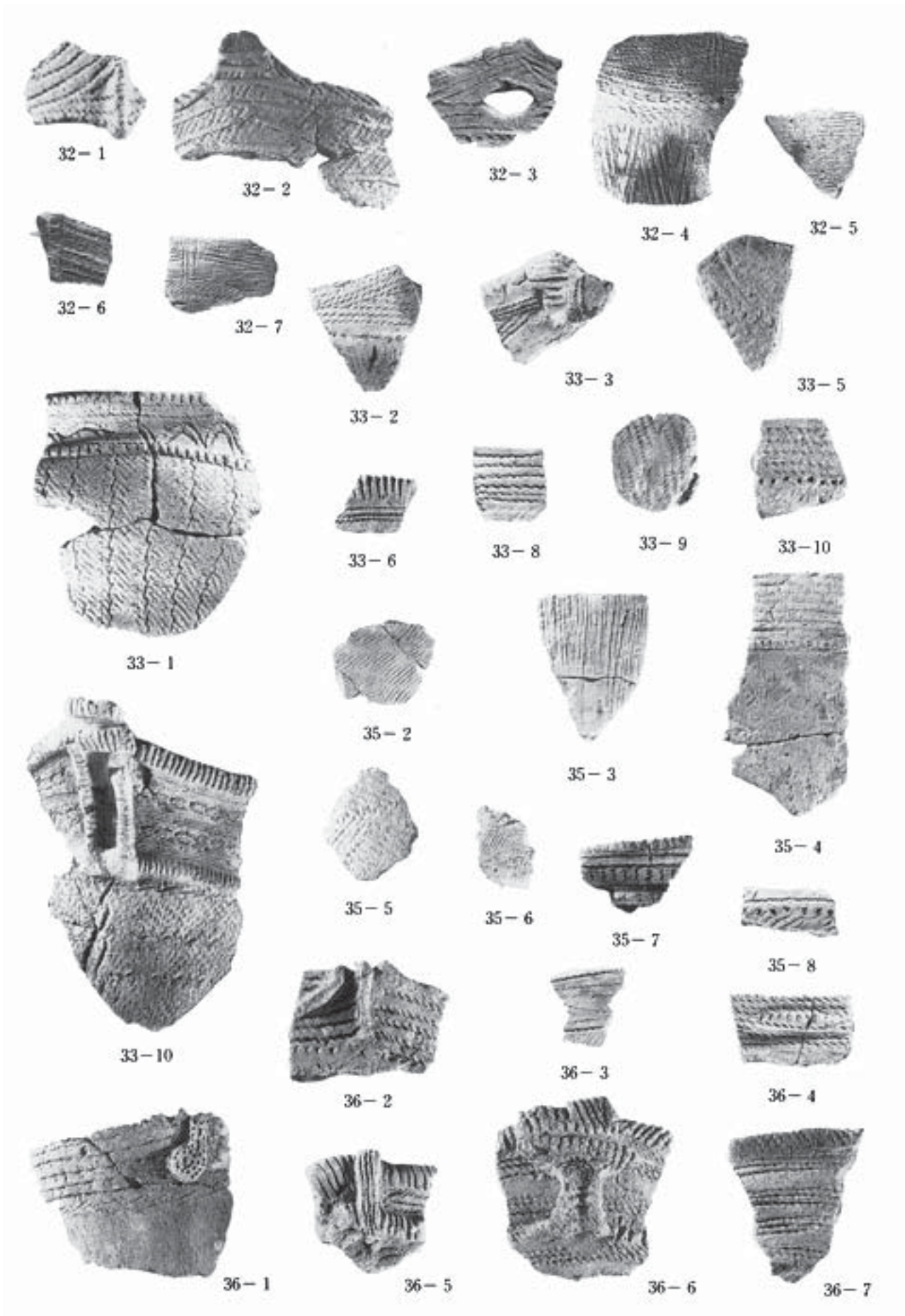


写真8 出土遺物(土器)



33-7



35-1



34-1



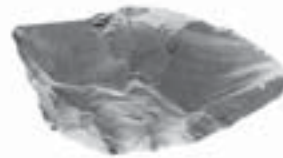
37-1



37-2



37-3



37-4



37-5



37-6



37-7



37-8



37-9



38-1



38-2



38-3



38-5



38-4



38-6



38-7

写真9 出土遺物(土器・石器)

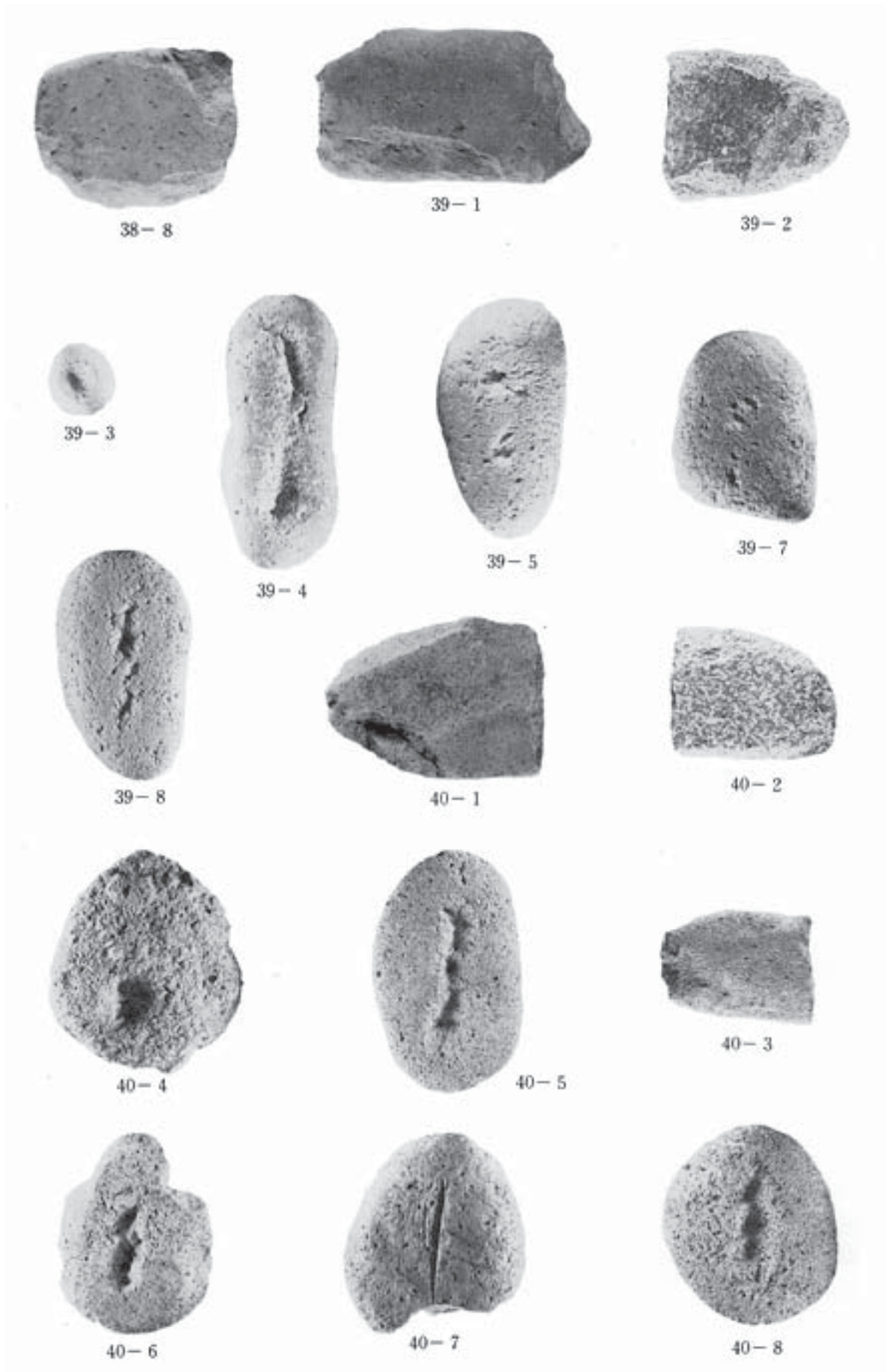


写真10 出土遺物(石器)

| ふりがな | よこうち いせき・よこうち に いせき | | | | | | | |
|---------------|--------------------------------------|----------|----------------------------------|-------------------|--------------------------|---------------------------|------------------------|-----------------------------|
| 書名 | 横内遺跡・横内(2)遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 青森市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第24集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 徳差義男、田澤淳逸 | | | | | | | |
| 編集機関 | 青森市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒030 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL0177-34-1111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1995年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 横内 | 青森県青森市 合子沢字山崎 | 2201 | 164 | 40° 45' 58" | 140° 45' 57" | 19930907 ~ 19931112 | 180 | 道路建設(市道合子沢6号線道路改良事業)に伴う事前調査 |
| 横内(2) | 青森県青森市 合子沢字山崎 | 2201 | 206 | 40° 45' 59" | 140° 46' 00" | 19930907 ~ 19931112 | 1,100 | 同上 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 横内 | 集落 | 縄文 | 住居跡 3軒 | | 縄文土器 石器 | | | |
| 横内(2) | 集落 | 縄文 平安 | 住居跡(平安) 1軒 土壇(縄文) 26基 溝状遺構 | | 縄文土器 石器 土師器 須恵器 | | | |

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

- 青森市の文化財 1 1962 『三内霊園遺跡調査概報』
" 2 1965 『四ツ石遺跡調査概報』
" 3 1967 『玉清水遺跡調査概報』
" 4 1970 『三内丸山遺跡調査概報』
" 5 1971 『野木和遺跡調査報告書』
" 6 1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
" 7 1971 『大浦遺跡調査報告書』
" 8 1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』
1979 『螢沢遺跡』
1983 『四戸橋遺跡調査報告書』
- 青森市の埋蔵文化財 1983 『山野峠遺跡』
" 1985 『長森遺跡発掘調査報告書』
" 1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
" 1986 『横内城遺跡発掘調査報告書』
" 1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
- 青森市埋蔵文化財調査報告書第 16 集 1991 『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
" 第 17 集 1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
" 第 18 集 1993 『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
" 第 19 集 1993 『市内遺跡発掘調査報告書』
" 第 20 集 1994 『小牧野遺跡発掘調査概報』
" 第 21 集 1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
" 第 22 集 1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』
" 第 23 集 1994 『三内丸山（2）遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
" 第 24 集 1995 『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
" 第 25 集 1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
" 第 26 集 1995 『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第 24 集

横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 7 年 3 月 3 1 日

発行 青森市教育委員会

〒030 青森市中央一丁目 22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 東北印刷業株式会社

〒030 青森市合浦一丁目 2 - 122

TEL 0177 - 42 - 2221
